

---

# 裏（時の支配者の裏側）

こんこん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

裏（時の支配者の裏側）

### 【Nコード】

N9201F

### 【作者名】

こんこん

### 【あらすじ】

「時の支配者」の最後の話の裏側の話です。主人公、月夜海とみゆは、門をくぐり未来の世界へ旅立った。そこは荒れ果てた世界。門を全て元通りにし、朱里たちのいる世界に帰ることを必死に探す。とす。

## 1話

俺は、嵐の中で溺れるように手足をばたばたさせながら、必死に握り締めていた武器に力を込めていた。

これは、体が自然に反応していたからそれに従ったまでだ。

自分の能力が完全開放状態になったのと同時に、この武器の使い方も分かったのだ。

俺にしかできないことだ…

そう思い、闇の中で短剣に力を注ぎ込む。それと同時に剣は光輝いていった。

するとどうだろう、視界が見る見るうちに明るくなっていくのが分かる。

剣が全ての闇を吸い込んでいたのだ。

そして嵐のような空間は、その内に穏やかな景色に変化した。

「え？」

自らの体を見回すと、浮いて、もがいていたはずの体が、地面に足がついている状態になっていた。

きよろきよろと辺りを見ると、見たことのない景色が広がっていた。

灰色の空が無限に広がり昼なのか夜なのか分からない。そんな世界だった。

しかも空からは灰のようなものがちらちらと降っていた。

これが…門の向こう側で未来の世界ってことか？

呆然と立っていた俺にみゆが声をかけた。

「今のは何だ？」

俺に説明を求めてきた。

その声で我に返ると、思い出したかのように話した。

「あ…その…憶測でしか答えられないが、この剣が門の力を吸い込んで吸収したんだと思う…」

そしてこの剣を見せた。

すると、先ほどよりも一回り大きくなっているのが分かった。

「それなら、私たちが潜った門は、消えてしまったのか？」

「そうなる…一つの門を消滅させたから、全問の完全開放状態を防ぐきっかけになったと思うんだが…」

もう一度空を見たが、先ほどまで存在した空間の穴はなかった。

「他の門が心配か？」

みゆは質問を変えてきた。俺の顔つきを見てそう言ったのだろう。

「そうだな。こればかりはあくまでも推測に過ぎないからさ…もしも他の門が未だに開放状態になっていたらと思うとな…」

素直にみゆに話すと、彼女は心配ないとすぐに返答してくれた。

「どうして、そう言いきれる？」

「どこかの門が開いていれば、必ず空の雲の色が紫に変わって雷が鳴るし、嵐も来る。」

でも、今は灰色の雲しか広がって見えない…」

「他の大陸の門のことまでここから分かるものなのか？」

「ああ…私がいた頃の世界の門は、都市を中心に取り囲むように無理やり集められたんだ。」

だから、一つの大陸に七つの門が存在した…  
そうすることで全ての門を少ない人間で管理することができたからな」

「おいおい…そんな大掛かりなことできるのか？」

「空間の転移の能力を門にかけたらしく、丸ごとその空間を移動させたのだ。」

だが、移動は可能だったが、消滅は無理だったらしい」

「現状を考えれば分かる…なら、この世界には何人の人間が住んで

いるんだ？」

「百を満たない数だ…」

それに私のような存在が数人存在し、壊疽者と呼ばれる出来損ないが数千という…」

「明らかに勢力が変わってしまったな」

「三賢人の奴らがそういう世界にしたんだ」

そう言えばそうだった。科学の力を横暴し無茶な実験を繰り返して、どんどん壊疽者を作り出してしまった。

俺もその末路って訳だ…

「これからどうする？何もなくてここに来たわけじゃないんだろ？」

「ああ…そうだな…俺が時の雫をこの世界で元に戻すさ。」

そうすれば、時の雫でできているあの門は全て消滅する。過去には何も影響がでない…」

「なら、お前は向こうへ帰る手段を失うことになるんだぞ？」

「それはまだ分からないだろう？可能性はあると俺は信じている」

期待の意味も込めてそう話したが、そう信じたいだけだったのかもしれない。

## 2話

俺とみゆはこの世界の都市という場所まで移動していた。

かつては三賢人が統治していたこの都市も今となってはゴーストタウンのようだった。

廃墟のビルやら店が建ち並び、人がいるのかいないのか分からなかった。

みゆが話すには、壊疽者の攻撃を避けるように人間は地下で暮らしているらしい。

「お前がこの世界を旅立って数ヶ月は経っているが、この世界はその時と同じか？」

「見た目だけでは違いは…ないな」

「だとすれば、この世界を中心に門が動いているのも納得だな。

ここから門を抜ければいつか分からない過去に飛び出すが、

向こうからこっちに移動すれば門が出来上がった以後の世界の最先端の部分に飛び出す」

粗方の世界の仕組みを把握しつつ、俺たちは街中を歩いていた。

すると物陰から何かが飛び出してきた。

そいつは人とも動物とも思えない外見をしていた。

鋭い爪と硬そうな皮膚：二足歩行をしていて牙まである。

俺がみゆと初めて会った時に見た得体の知れない生物そのものだった。

なるほど…こいつが壊疽者という奴か。

みゆは何も言わないですぐに短刀を手にして身構えていた。

「ぐあああああああ」

吠えながらそいつはみゆに向かって近づいていった。

「雑魚か…」

俺はみゆの後ろに立っていた。

壊疽者は鋭い爪を大きく振りかぶって襲い掛かったが、あんな大きな動作ではかわされてしまう。

みゆは最小限の動きだけで全てをかわして、その身を一瞬で切り刻んだ。

壊疽者の体は八つに分かれてそのままさらさらと砂のように消え去ってしまった。

「おいおい…」

俺はそれを見てみゆの方に近づいた。



「海…こいつが壊疽者だ。しかもかなり下の階級のな」

「下のだと？それならまだ上がいるってことか？」

「ああ…壊疽者も進化を遂げているんだ。知恵を持ち力を付けて人に成り代わるうとして…」

三条織斗とやりあったときに門の中から出てきた巨大な腕を思い出した。

そう言えば…あれがそうだったな。

「この世界もより強い生き物が残る世界になつたんだな。

まあ…それが自然の摂理か。しかしそれなら、早く何とかしないと、純粋な人間が全て滅びてしまう」

「だから私たちの存在があるんだ。壊疽者を殺すための存在に生まれたな…」

「相変わらず悲しいことを言っただな。まあ、俺も同じか…知らなかっただけで」

ありもしない過去を思い出すかのように憂鬱な気持ちになった。

「なあ、俺の出生については何も知らされていないのか？」

俺はこの記憶が無いといっても言い位だ。

だから知りたいという気持ちもあった。だから駄目元で聞いてみた。

しかしみゆは困った表情を見せた。

「すまない…それは詳しくは分からない。それは、私の出生についてもだ…聞かされたただだから。」

しかし不死の力が備わっているのは間違いない」

「それは俺も思った。三賢人の能力と同じ感じがしたからな。リオに傷つけられた時も友人に怪我をさせられた時も数時間で治っていたからな。」

お前もそうだろ？」

「まあ…そうだな」

「時の雫の影響はいろんな形で世界に影響を及ぼしているのは間違いない。」

下手すると今のこの世界自体を飲み込む可能性がある。

そうなる前にも六つの門を全て元に戻さなくては…」

俺は辺りを見回しながら、遠くを見つめた。

見えもしないそこには六つの門があるのには違いなかった。

しかし先は長い…この世界というものがまるで分からない。

自らの出生もそうだが、俺がいたさっきまでいた世界とは根本的に異なるのだ。

「なあ、ここに存在する人間とは話ができないのか？」

この世界のことだって彼らが一番良く知っているはずだが…」

この状況を打破するために俺は提案したが、みゆは、うんとは言わなかった。

「それだけは…その…勘弁して欲しい」

「え？」

「私は、人間とは二度と会わないと決めているんだ…」

その表情からはみゆの考えていることなど分かるはずもなかった。しかし、よほどのことがあったのだと思い、俺はそこは流すことにした。

「そうか…それなら、まずはどうしたらいいんだ？」

俺はとりあえず方向性を変えるように考えた。するとみゆは間髪いれずに、

「我々の出生を先に探るのはどうかな？」

と意見を出してくれた。

そのことは俺が第一に知りたいことでもあったし、死ぬことになったとしても知りたいことだった。みゆの人間と会いたがらない理由はさておき、とりあえず先には進める。

「そうしたい…」

素直に承諾すると、方向性はお互いにまとまった。

「場所は分かるのか？」

「ああ…ここから数キロ離れた場所にある。第五研究所という所だ」

### 3話

一夜明けて、改めてこの世界をまじまじと見ていた。

冷静に考えてもこの世界の気候はめっちゃくちゃだった。

冬だというのに初夏のような暖かさがあったのだ。

景色が灰色なのは変わらない。青い空など存在しない。無限に広がる曇り空だ。

いずれ訪れるであろう、俺たちの未来はこんな世界なのか…

人は追い込まれ、人ではないものが増え続け、そして生態系まで変わっている。

こんな未来か…

それを目の当たりにしてしまうと、俺はどこか心が寂しくなってしまうた。

しかしこんなことを考えてばかりいられないのだ。先を見なくては俺に未来はない。

昨夜は廃墟で体を休めていた。起きるとそこにはみゆの姿がなかった。

どこかに行ったのだろうか？

俺は慌てて起き上がると、外の様子を伺った。

昨日のように壊疽者がうろついている可能性があるからな…

しかし気配はなかったし、視界にはそういったものは映らなかった。

そうこうしている間にみゆが何事もなかったかのように俺の前に姿を現した。

「起きたか？」

「どこに行っていたんだ？」

俺は思わず聞いてしまった。

「朝食を…な…」

朝食だと？そんなものがここにあるのか？

しかしみゆの右手を見ると、紙袋があった。

まさか…ここにも クドナルドが存在するとも言つのか？

「分けてもらった…逃げたのは人間だけで、ここには残っている者もいるんだ。」

我々と同じような存在の者達がな…彼らはここに来る壊疽さを見張り、そして対抗策を練っている。

地下の人間と連絡をとりながら」

「よく、すんなりもらえたな」

「ああ…私のような存在は、壊疽者と真つ向から戦える唯一の人間だから」

扱いはどちらかといえば優遇されているんだ」

「特権か…それにしても…ここは本当に俺のいた世界とはまるで違う…まるで死んだ世界だ」

みゆは紙袋の中から、コーヒーとパンを取り出して俺に手渡した。

入れたてのコーヒーは温かく、俺の喉を刺激すると共に眠気を一気に吹き飛ばした。

「美味しいな…まさか、こんな世界で普通にコーヒーが飲めるなんて思わなかった」

「ああ…そう言ってもらえると持ってきたかいがある」

そのまま朝食を二人で済ませ、俺たちは旅立つ準備を整えた。

とりあえず野宿できるように、そこら辺で簡単な食料と寝るための寝袋、ライター、水、簡易食器を調達した。

意外にも使えるものは、あちこちに残っていたのだ。

そして俺たちは北を目指して荒野を歩き出した。

この世界は簡単に話せば、ほとんどが枯れ果てた世界だ。植物を目にすることはあまりない。

異常気象の末路という奴だ。

そうなってしまえば当然酸素を作り出すことはできない。しかしそれを文明でカバーしていた。

世界のあちこちに植物に成り代わって二酸化炭素を吸収し酸素を排出する巨大な装置が置かれていたのだ。

そんな人工の設備は至る所にあつた。

もう自然なんてものは存在しない。

ここは大きな工場だ…

地平線の見える荒野を俺たちは歩き続けた。そして歩きながら俺はみゆに話しかけた。

「みゆ…お前はどうかやって暮らしていたんだ？」

その…この世界は生きていくこと自体が辛そうだ…」

それはみゆのことを知りたかつたという気持ちもあつたし、この世界のことを知りたいと思う気持ちもあつた。

「そうだな…海の世界を見れば、こことはまるで違う…」

でもね、私はここで十数年生きてきた。ここが故郷だ。嫌なこともあつたが、辛いことはない…」

嫌なこと？その言葉が引っかかったが、みゆは真剣な表情だった。



俺はそれを見ただけで圧倒されてしまった。

「そうか…悪かったな。勝手な憶測で物を言って…」

謝ることしか出来なかったが、みゆは笑って答えた。

「お前の世界も好きだったよ。だから気にしないでくれ…」

そして少し間を置いてからみゆは自らの話をした。

## 4話

「今から十七年前だ…私はこの世界に誕生した。普通に赤ん坊からな。検体シックスとして…」

「シックス…数字のことか？」

「ああ…名前は与えられなかった。それは不完全な生命のままだったからだ。」

私の自我が芽生えたのは五歳の頃だ。どうやらこの研究は五歳という分岐点が重要らしく、

失敗作になるか、成功するかは分からないらしい。

それまでは、検体何番と番号で呼ばれていたんだ…」

「物みたいだな…」

「その通りだ。私たちは物だったんだ…」

そして五歳を境に数百といった検体のほとんどが失敗作になった…」

「それが壊疽者か？」

「そうだ…後は転げ落ちるように、この世界は終わりに向かっていく…」

壊疽者によってめちゃくちゃになったのだからな。

そして成功した検体は、この世界を守るために壊疽者の退治を命じられた…」

元々は同じ存在だったのに…」

悪循環そのものだ…自ら生み出した毒を成功した者で正そうとす

るなんて…

俺は言葉もなかった。

科学の成れの果てがこれかよ…

「それから十数年。私は壊疽者退治を中心に活動するも空しい結果だけが残った。

数百いた壊疽者が更に増えていたのだ…彼らも進化をしたのだ。分離したり、巨大化したりとな…そして極めつけが…奴らが知能を手に入れてしまったのだ。

唯一潰け込めるところが知能の低さだったのに、そこまで進化を遂げられたら人間の立場がなくなっていく。

だから人間はこの十数年で地下や隠れ場所へと追いやられてしまったのだ…我々の仲間を残してな」

「捨て駒かよ…」

胸糞が悪くなる思いだった。

「そんな壊疽者を追いかける毎日だったが、あの日、私に予想外の出来事が襲ったのだ。

海…お前達の世界に行った日だ。

今から半年前、壊疽者を追いかけて門の側まで来たときに運の悪いことに門の開放が始まった。

こちら側から門の開放は自由に出来る。その目的は壊疽者を吐き出すためだ…

だから数百という壊疽者と共に私は海の世界に飛ばされたのだ」

「それから三糸織斗に拾われたのか…そして奴はお前からこの世界

の仕組みを聞いて、門を開こうとしたのか…」

三条織斗…もしもあの傷で絶命していなかったら、この世界にいるのかもな。

俺はそんなことを思った。

そしてそうこうしている内に遠くに目的の建物が見えてきた。

「あれが…研究所か？」

「ああ…遺伝子工学を基にした、植物や生物の生成が存在した場所だ。」

異常気象は食料にも影響を与える。

そのためにも今までこの星に存在した植物、生物のベースがここにはあるんだ。

そして野菜や肉、魚など食料となるものを量産していった…」

「その話だけを聞くと気持ち悪いな。まるで工場で淡々と大量生産されている感じで…」

「しかしこの世界ではそれが当たり前なんだ。」

だから人間も作った。それを禁忌だと知りながらも」

世界の定義が変われば、それも当たり前になるってことか…

今という世界を生き延びるために人が考えた結果だ。

だからそのことを否定する気もなかった。

「人は…間違いと分かかっていても生きながらえようとすると運命からは逃れられない。」

それが正しいかどうか分からないまま…」

まるで悟ったかのようにみゆは話したが、その言葉には重みがある。

確かに人の歴史はその繰り返いだ。

正しいということはないのだ。運命。その一言で片付けてしまえば丸く収まってしまふ。

しかし俺は人の想いといものは、どこかに残ると信じていた。

例えちっばけなものだとしても…

「着いたな…」

話しながら歩いているうちに、目の前には大きな建物が聳え立っていた。

「これが…その…俺が生まれた場所なのか？」

未だにこの世界のこの場所で俺が生まれたということが信じられなかった。

まるで他人事のように現実が見れなかった。

「そつだ。この中に入れば少しは分かるかもしれない」

コンクリートに覆われた建物に窓は存在しなかった。

まるで小さな要塞だ。重々しい雰囲気だけが辺りを支配していた。

ドアは鉄製で、誰もいないことを証明するかのように半開きの状態だった。

「入る覚悟はできているか？」

みゆは俺の顔をじっと見て再確認をした。

俺は逃げたくはなかったし、不可思議な自分の正体を知るために必要なことだと割り切ってもいた。

変な緊張感がそこにはった。

「ああ……」

低いトーンで返事をする、みゆは俺の決意を認めて先に入ってしまった。

暗い室内に入ると青白い光が研究所内に広がった。

「これは……」

真つ暗なのだろうと思って入った俺からしたらその光景は予想外だった。

「永久電灯って奴だ。微力ではあるが大気中の摩擦熱を利用して発電している」

「小さい雷みたいなものか？」

「まあ…そうなるかな？」

研究所内を動かしている原動力はこういった自然の力を何倍にも増幅させて使っていた。

そして…この先に人間の培養実験室がある」

みゆは薄暗い部屋をどんどん進んでいた。

まるで迷いがなかった。

広い研究所内には人の気配はしない。本当に誰もいないようだ。

奥へ奥へと進むと今まで見たことのないような扉が目の前にあった。

## 5話

厚さ一メートルはありそうな物々しい扉だ。

電子ロックと鍵穴があるのを見ただけでもよほどのものがこの先にあることを示していた。

「ここだ…」

みゆはお決まりのようにその台詞を口した。

どうやって入るのか俺には分からなかった。

しかし次の瞬間、みゆは俺を納得させる行動をとった。

カキイイイイーン

響き渡る金属音と共に扉が斜めに斬られた。

まさか…

そう思ったが、一呼吸置いてから扉が、がこんと崩れた。

「マジかよ…」

俺は信じられなかったが、事実を受け止めるしかない。



みゆは小太刀、雪姫で分厚い扉を切り崩したのだ。

どう見ても扉の厚さよりも小太刀のほうが短いのにみゆは物理的  
法則を無視した荒業を繰り出した。

「こいつは、時の雫の一部だ…斬れないものはない」

「そうだな…」

俺ははははと笑うしかなかった。そして崩れ落ちた扉の先の景色  
を見た。

そこにあっただのは、硝子のケースの数々だ。

先ほどとは一変して緊迫した空気が流れた。

みゆも俺のこういう反応を察していたのだろうか、何も話さな  
かった。

ぶんぶんと低音の機械音が響き、薄暗い部屋は俺を迎え入れてい  
るかのようだった。

くそ…

何かこの雰囲気飲み込まれそうだ。

「ここで…俺が…生まれたのか？」

人が出産する場所とは程遠い、機械と見たこともない薬品に囲ま  
れたこの場所はどこか俺を現実から引き離れた。

ずきん…

頭が急に痛み出し、何かが映像のように頭の中を駆け回る。

白い白衣の男達に、囲まれて見られている。

そして俺の体には…チューブがあちこちから挿入されている。

ちくしょう…何だ？この映像は…

頭を抑えながら、じつと自分の生まれた硝子ケースを見た。

そして硝子ケースには名前とは違い、番号プレートが付いていた。

たくさん並ぶ空っぽの硝子ケースに近づいてその中の一つ一つを見るがはつきりとは思いつかない。

うる覚えのように微かに過去の記憶が断片的に頭の中に浮かぶだけだった。

『検体000…』

嫌な言葉が聞こえてきた。

またか…

しかしどんなにがんばってもここで過ごした数年を思い出すことができなかった。

俺はもがき苦しむように研究所を見回した。

「そつだ。私も…お前も、この硝子のケースの中で生まれたんだ。親の顔も知らずにひっそりと…」

その言葉はひどく冷たかった。

いや、ここでみゆが俺に温かい言葉などかけるはずはない。

それは知りたいと思った俺が望んだことなのだから…

しかし実際に目の前にこんな光景が広がれば、冷静にもなれない。

俺はただただそれが嘘なのではないかと思ってしまうた。

「…ここで…その…どうやって…人が生まれるというんだ？」

言葉が上手く出なかった。

「ここ数十年の間に採取された人間の卵子、精子を受精させ、培養液で育てられる。」

そして第一段階として遺伝子操作を施される」

「遺伝子操作？」

「より強い人間を作るために都合の良いようにいじくられている…」

それが能力者の根源だ。

そして…大気中の時の雫が影響して不死の体を持つ者や異形の形の生物も生まれた。

以前も話したが、異形の方が生まれる確率が高い。

それは…大気中の時の雫の効力の気まぐれだからな」

みゆは冷静に分析して俺に話して聞かせた。

「なら…俺やお前の存在は奇跡のようなものなのか？」

「ああ…決まった定義で我々が生まれた前例はないんだ…だからこれは賭けだ。

私たちが生まれて出来損ないを一掃し、更に子孫を残してくれるという…」

「く…何て…無謀な計画を…」

「人はそれでも希望を我々に託したんだ…愚かかもしれない。

しかし私はそのことを否定することはない。私にできることをしたい。

お前も…私たちの中でも特に期待されていた者なんだ。それを感じてほしい」

まるで嘆願するかのようにみゆは俺を見た。

しかし今の俺に素直にそうだなと答える気力はなかった。

とりあえずここを出たかった。

興味本位で来てしまったこの場所は、俺には刺激が強すぎた。

それは現実を見せられたという衝動があったからかもしれない。

研究所を出て少し歩いた。

何も考えずにただ歩いていた。

そしてみゆは適当な場所まで来ると、俺を引き止めて今日はここで休もうと言って俺を座らせた。

空はすっかり暗くなって夜を迎えていた。

俺とみゆは火を囲んで向かい合って座っていた。

未だに俺の心はここに在らずって感じだった。

「大丈夫か？」

みゆは俺の事を心配して話しかけてくれた。

しかし俺はどこか落ちつかなかった。

思い出すのは、親父や朱里、京、真希との思い出ばかりだった。

人間じゃない俺が…あいつらと過ごしてきた時間は何だったのだらう？

そんな疑問が残っていた。

いつまでも頭の中にあるのはあの無機質な実験室の硝子ケースだ。  
あんなものから自分が生まれたことを想像するだけで気持ちが悪くなる。

大きく深呼吸をして呼吸を整えた。

「早く休んだ方がいい…」

みゆが俺の肩に触れた時に俺は無性に苛立った。

「別にいい!」

声を荒げて、手を振り払った。

「あ…」

みゆは手を引っ込めて寂しい表情を見せた。

「…ごめん。みゆは何も悪くないのに、俺が…その…」

言葉が上手く出てこなかった。

今までの生活とがらっと変わったこの世界、そして自らの出生を直接自分の目で見たことは衝撃が多すぎた。

「海…これだけは認めて。あなたは、この星の希望だということを…」

「え?」

「いい…この星は破滅へと向かっている。それを食い止められるのはあなただけだということ。」

私は…あなたがあの門を潜ったということはその覚悟を決めたと思っっている…

あなたが生まれたことは奇跡に近かった。

時の雫の影響を多大に受けたにも係わらず体に変化することなく、時の能力をその体に吸収することができたのだから…」

「それは…」

「すぐに受け止めるのは無理かもしれない。」

でも受け止めて…そうしなければ先へは進めないのだから」

機械のような少女だった彼女は、血の通った言葉を俺にぶつけてきた。

それは俺の心に何度もノックしていた。

「私は少しここから離れる…一人で考えてみて」

そのまま、みゆは俺の前から姿を消した。

残された俺には静かな時間が流れた。

暗闇の中に目の前の燃えている火だけが、ちらちらと温かさを感じさせた。

俺は今までの自分のことを振り返った。





## 6話

今でも鮮明に覚えていること…

それは親父との出会いだ。

たぶん四歳ぐらいだと思う。

俺は雪のちらちら降る中で、親父の顔を初めて見たんだ。そして…初めて人の温もりを知った。

そこからは朱里と出会い、そして一人の人間として道を歩んだ。

初めて心から友人だと思える京や真希とも会えた。

そして自分は少し頭のいい普通の学生と思っていた。

だが…現実はずう。

あの日、衝撃的な出会いをしたみゆという人物と同じ世界の人間なんだ。

みゆは、一人で使命を背負い生きていた。三条織斗に操られながらもだ…

親父は…世界を救うために生きた。

朱里も…

京や真希はそれに巻き込まれて死んだ

俺はその一つ一つを思い出して自分なりの答えを見つけようとした。

そつだ…自らの出生など関係ないんだ。

係わった人間が全てだ。俺を取り巻く環境が俺自身なんだ。

自らに出来ることをしなくては、未来を変えることなどできない…

「そつだな…それが俺の生き方なんだ」

自分自身で答えを見つけて納得した。

その夜は、みゆは気を利かせてか俺の前に姿を現さなかった。

そして翌日。

朝もやが酷い中、俺は門のある場所を目指して歩こうとした。

今までのように残り六つの門を全て元の形に戻す決意を固めた。

「吹っ切れたみたいね…」

白いもやの中から声が聞こえた。

みゆだった。

「ああ…おかげさまでな。」

俺も自らの出生を知っただけであそこまで取り乱すとは…情けないな」

「そんなことはない。聞いて想像することと、実際に見るのでは違う…」

正面から受け止めることができたのだから、海はもう大丈夫」

「はは…ありがたいな。そんな励ましを受けたのは久しぶりだ…」

俺は朱里のことを思い出してしまった。

あいつもいつも俺の側で励ましてくれたのだから。

心がすつと軽くなった気がした。

「それなら、行くとするか？」

「ああ」

俺はみゆと並んで、十数キロ先にあるであろう第二の門を目指した。

この世界に残る門は全部で六つ。

どれも時の雫の力がそのまま具現化したものだが、元に戻す方法は同じだった。

俺の持っているこの武器が吸収し、大きくなるだけだった。

五ヶ月かけて、俺たちは門を三つほど元に戻した。

その間に壊疽者なる異形の者たちは幾度となく襲い掛かってきた。

それは最初に出会った連中と同じで、体の部位が変化していた異常者だった。

そしてみゆと俺はそいつらを容赦することなく次々と消して言った。

みゆと俺の持つ武器の効果は絶大で触れれば確実に絶命させていた。

残る門は三つ…

しかし門を元に戻すのにつれて壊疽者たちに遭遇する数も増えているのは事実だったので慎重さをより一層求められることになってきた。

この世界に五ヶ月もいると慣れてきたのか、俺も野宿することに戸惑いをもたなくなってきた。外での食事と睡眠。

いつ教われるか分からないこの世界で布団に寝ようなど無理な話だ。

壊疽者に襲われ続けることで、俺自身も精神的にも肉体的にも大分強くなっていた。

殺すという行為に躊躇いを持たなくなった。

しかし困ったことは、あの壊疽者も次第に強くなっているということだ。

奴らは奴らで統率力を持っているらしく、弱い者に先陣を切らせ、それから中堅クラスがメインになって俺たちを襲ってきた。

しかも武器まで持っている。

自らの肉体を武器にしている者ばかりだと思っていたらとんでもなかった。

自らの肉体と近代武器やら古代の武器を用いて少しずつ俺たちを追い詰めていたのだ。

## 7話

「この五ヶ月で奴らも私たちの存在を脅威に思い始めているようだ…」

「と言うと？」

「戦い方が毎回変わっている…それに進化している。布陣を組んだり、奇襲をかけたたり、遠距離攻撃を仕掛けたりと…以前ではここまでの統率は考えられないんだ」

「だとすれば、一丸となって戦っているってことか…」

「そうなるな。知能の低い奴らは、元々個人行動がほとんどだ。しかし今は違う。こちらの戦力を測る行為をしてから戦い方を変えている…」

個人ではそれは到底無理だ」

「確かにそれは明らかだな。

それなら早く残りの門を何とかしないと勢力をどんどん強めていく一方だな」

こうしてはいられないと俺は思い、少し焦った。

「こちらの協力者を増やすことはできないのか？  
その…みゆの仲間だったり、人間だったり…」

この世界を動き回っている人間は俺たちしかいなかった。

遭遇するのは壊疽者ばかりで誰にも会わなかった。

「難しいかも…人間を守ることが目的のものがほとんどだから持ち場を離れられない。」

私のように壊疽者を退治しに行くことだけが目的の者は後二人。彼らに会えることができればそれは可能かもしれない」

「味方が多いほうが助かるからな。そいつらに会えればいい。さてと、先を急ぐか…」

俺たちは歩き始めた。

七つの門はこの世界の中心を取り囲むように存在していたが、都市から門の距離は決して近いものではなかった。

距離にして五百キロ近く離れている。

食料を調達に都市へ戻り、再び門を目指すとなると千キロは歩くことになる。

歩くのにしても毎日二十キロ歩いても最低一ヶ月半は掛かるのだ。

歩くのにももう慣れてはいた。しかし靴はとっくにぼろぼろになっていたから、この世界の物を適当に拝借した。

衣類もそうだった。適当なものを探して着替えた。

この世界の気候は一定だった。異常気象のせいで夏の暑さのままだったので、着込む必要がない。

だから必要なものは水と塩分だ。黙っていても勝手に水分が抜け出てしまう。

水は都市部を出た郊外にいくつかあった。研究所跡地だったり、民家の中に…

大気の成分から水を作り出す機械がそこにはあるのだ。便利といえれば便利だ。

だから、そこから定期的に補給をしていた。

食べれそうな食料もついでに調達していた。

そして七ヶ月目にさしかかろうという時に、四つ目の門の存在する場所に到着した。

門は普段は空にはない。

ここでじっと待っていると一週間に一度は姿を見せる。

時の雫の干渉を受けているだけに俺の持っているこの鉱物に反応するのだと思った。

そして俺たちは野宿をしながら門が現れるのをじっと待っていた。

壊疽者のことを警戒して交代で寝た。

二日目、三日目と何も起こらなかったが、四日目に異変が起きた。

門よりも先に壊疽者が現れたのだ。



真つ暗な景色の中で、起こした焚き火だけがゆらゆらと揺れて明るくその場を和ませる。

俺は火を見ながら自分で入れたコーヒーを飲んでいた。

隣にはみゆが眠って休んでいた。

かれこれ七ヶ月もこいつと一緒になんだな。と改めて感じさせられた。

すると妙な空気が周辺に流れ出した。

まさか…

そう思い、俺はみゆをたたき起こした。

「おい…起きろ！敵かもしれない」

みゆはすぐに目を覚ました。

俺らは熟睡などできないから、ちょっとした声や物音で起きることに慣れてしまっている。

「壊疽者か？」

「だと思っ…距離はそう近くはないが、ここを取り囲むように迫ってきている」

みゆはすぐに武器を手に取り、体を起こした。

「さて…どうする…」

俺は考えた。過去壊疽者とは二度やりあったが、最初は下っ端の奴らが十数人無謀に突っ込んできたので正面から切り伏せた。

二度目は下っ端と武器を持つ者の二段構えで襲い掛かってきた。

しかしそれでも動きの差が出て、俺たちは全員を消した。

しかし最初に比べると格段に戦いづらくなったことだけは確かだった。それに人数も増えている。

これが、どんどん増えて、戦術を変えてくると思うとぞっとする。

俺は周囲の様子をじっと伺い、気配を感じ取ることに専念した。

しかし奴らは人の波動とは違うのでそれを掴むのが難しかった。

十…から十三？以前よりは少ない人数だ。

そして動く様子が感じられない。俺たちを見つけたら見境なく襲い掛かって来る連中がどうして踏みとどまっている？

そんな疑問が残った。

そして時間はゆっくりと過ぎていく。

動かない敵に待たされている行為は、数分を数時間に感じさせられる。

「みゆ…あいつら俺らに気が付いていないのか？」

俺は確認したかった。

「気付いているはずだ。この火を見ているはずだからな」

「ならどうして…」

俺はいらついていた。

かれこれ数十分は伏せたこのままの状態だった。

## 8話

そして遂に俺は動くことを決断した。というよりは動かされていた。

暗闇の中を姿勢を低くして、奴らがいるであろう場所へ走り出した。

「おい…」

みゆもそれを見て一呼吸遅く俺の後を追いかけて走った。

こここの地形は盆地のように周辺より低い場所だった。

だからもしも奴らが俺らのことを見ているのならここよりも高い場所にいる。

俺は上を見上げながら敵の場所を確認しようとした。

だが、次の瞬間思いがけない出来事に俺はつまずいてしまった。

「う…」

足元に違和感を感じたが時は既に遅かった。

俺はそのまま地面に足をとられてしまった。

敵の罠だった。

ここら一带に穴を掘りそしてその中に粘着物を注入していたのだ。

幸い足を怪我することはなかったが、足がびくともしなかった。

そしてそれはみゆも同じだった。

俺のすぐ後ろでもがいている姿が見えた。

「これは…罫なのか？」

俺は正直焦った。ここで足止めをするのが狙いなら、次に自分達に降りかかるであろう出来事の予測が付く。

壊疽者が一斉に襲い掛かってくるのだと、武器を片手に身構えたが、全く別の攻撃が俺たちに迫っていた。

空から無数の球体が落ちてきた。

「何だ？あれは？」

俺はそれが何か分からなかったが、みゆがすぐに気が付いた。

「爆弾だ！」

「え？手榴弾ってことか？」

まずすぎる…動けないこの状態で爆撃を受けたら体がばらばらになる。

ばらばらになっても自分が再生できるのかどうかは分からなかつ

だが、そんな状態はごめんだと思った。

俺は腕に力を込めると、硬い地面をくりぬくように武器を扱った。

「おらあ！」

動かない右足周辺の地面を力ずくで掘り起こし、粘液のついたままそこから引き抜いた。

「くっ…」

目の前には幾多にも及ぶ爆弾の嵐がすぐそこまで迫っていた。

俺はそのまま自分達の周辺に落ちそうな爆弾を切らずに叩く感じで遠くへと弾き飛ばした。

みゆは未だに足をとられたままだから、俺一人で何とかするしかない。

未来を見る能力で大体の落ちる場所は予測できていた。

そして最も致命傷になる箇所は避けるべきだと判断して、至近距離の爆弾はなるべく遠ざけた。しかしそれでも全てを取り除くのは不可能に近かったので、数秒後には数メートル離れた場所で爆撃が起こった。

「ぐう！」

爆弾の破片が体に刺さる感覚は、初めての体験だった。

それでも体の一部がなくなるのよりはましだ。瞬時に応戦できなくなってしまう。

何発か破裂する音を聞いた後に周辺は煙で覆われてしまったが、俺とみゆはそのまま身を潜めるように動かなかった。

みゆは、俺同様に体中から血を流していたが、意識はあった。

そしてすぐに足元の地面をくりぬいて動けるようにした。

「大丈夫か？」

「何とか…でも、海の方が重傷だろ？」

俺の背中を見てそう話した。

確かにみゆをかばう形で立っていたから、背中はずたずただった。

しかしそんな痛みよりもこの場を何とかすることに集中していたので、俺は意識を失わないですんでいた。

「今はそんなこと気にしている場合じゃない」

俺はすぐに次の動きに対応しようと動いていた。

そう、未来が見えていたのだ。

壊疽者が追撃を仕掛けようと一斉に襲い掛かってくる姿が…

武器を構えて、爆煙に潜んで奴らの動きを密かに計っていた。

十三人…それぞれがナイフを握っている。

俺らを中心に円を描くように等間隔で残り数秒と迫っている。

はつきりと捉えられなかった相手の動きが今全て明確に俺の脳裏に流れ込んだ。

だからこそ俺は先手を取ることができた。

相手がこれまでの攻撃で俺たちの戦力を削いだという思い込みでの気の緩みもあったのだろう。

気迫の上で遅れを取った彼らは突如煙の中から現れた俺の動きによって一撃で一人ずつ消滅させられた。

視界の悪さと思いがけない攻撃は、群集の混乱を大きく招く。

その数秒の迷いが俺にとって格好の餌食だ。

その場にいた十三人は、ものの十秒ともたなかった。

絶命の一撃を浴びてその場所から全員が姿を消した。

「はあ…はあ…」

その場を切り抜けられたと思った瞬間、力が抜けて膝を地面についた。

背中が急に痛み始めた。よく見れば背中はずたずたになっていた。



「無理しすぎだ…私を頼ってもいいのに。庇うなんて…」

みゆが塞ぎ込んでいる俺の前に立っていた。

「だってそうでもしないと、お前自分の足を切っても前に出たろ？」

みゆの性格を考えればそうするであろうと俺は思っていた。すると、ものの見事に当たっていた。

当然だと俺に向かって話した。

「あのなあ…知り合いのそんな凄惨な姿を俺が間近で見たいとも思つか？」

「戦いの上では仕方のないことだ…それに少し経てばくっつくし…」

不死身の体のことを言っているのだが、痛みは感じるのだ。

女の子が痛みを無視できるほど俺は割り切れない。

馬鹿かもしれないが、そうなんだ。

しかしみゆは相変わらず頑固だ。俺は自分の伝わらない気持ちに少し苛立った。

「ふざけんな！俺はお前のそんな姿を見たくないんだよ」

思わず襟首を掴んでしまった。

感情的になつてしまったのは久しぶりだった。自分の行動にも思わず驚いてしまった。

「う…」

それを見るなりみゆも怯んでしまった。俺があまり見せない一面を見せたからだろう。

思いがけない一言が出てしまった。

「その…すまない…」

素直なその言葉に意外だと思いつつも俺は、掴んでいた手を離して、頭をかきながらそれを受け止めた。

「うん…ああ…俺も…その言い過ぎた」

俺自身、反省しながらみゆから視線を外した。そうでもしていないと恥ずかしいからだ。

それから俺は今までのように門を自らの武器に吸収させて時の雫の姿に戻していった。

これで残る門は二つだ。

## 9話

「みゆ…壊疽者の進化についてだが…どう思う？  
この前の戦い方は到底知能の低い者にはできない…  
実際に窮地に追い込まれたのも事実な訳で…」

あれから一週間が経過していたが、俺とみゆは都市に向かう途中の荒野にいた。

この前の戦闘で受けた傷は一日と掛からず治っていた。

そしてそこで朝食を取りながら話をした。

「かなり高度な感じはする…  
その…どちらかといえば海たちの世界の戦術に近い。だから予想外なんだ…」

「罾を仕掛けて、遠距離からの攻撃…混乱に乗じて追撃とは俺も恐れ入った…」

あんなの知能が低いものには不可能だ。

あいつらが、更に近代兵器を用いて作戦を練ってきたら手のつけようがない」

「ほんの数ヶ月前まではここまでの戦術を用いることはできなかったのだが…」

主に体の部位の変化や身体能力での変化だったから」

「しかし…奴らは格段に知能をつけている。

これまでとは違う何かを手に入れたのかもしれない…」

「まさか…時の雫の一部か？」

「それもある。しかし、きつと入れ知恵をしている者がいるに違いない。

でなければ、戦術の急激な変化はあり得ない。

アルタイルたちが世界を仕切っていたかのように、壊疽者を仕切る統治者も存在するのかもしれない…」

それはそれで脅威だ。ここまで短時間で急激に成長する生物など存在しない。

しかし時の雫の能力を用いることが出来れば、進化を早めることができるのかもしれない。

だから残りの二つの門を元に戻すことが難儀だということが分かった。

「海…聞いておきたかったのだが、お前は時の雫を本当の形に戻したらどうする気なんだ？」

「それにあれはどうやって元に戻るんだ？」

「みゆは知りたかったらしい。」

「それもそのはずだ。俺は今まで何も話さなかったし、今後どんな結末をこの世界が迎えるのかも分からないからだ。」

「そうだったな…」

「これは、俺の体に流れ込む星の記憶みたいな感じで漠然としか話せないんだが、それでもいいか？」

「それでいい。何も知らないよりはずっとましだ」

「なら、話そう…アルタイルたちとの戦いの時に俺の体の能力は開放することができた。」

それと同時に星の記憶も流れ込んできたんだ…断片的に」

「星の記憶？」

「ああ…あの鉱物は元々種みたいなものなんだ。この星のな…」

それは星の誕生から始まり幾億年を開花しない状態で迎えていたんだ。

つまりそれが安定しているってことだ」

「種の状態が星の安定だということか…」

「それを人が無理やり掘り起こし、種に水をまいた…」

水を与えられた種は…そのまま成長し開花してしまった。

それがどんな花かと言うことも分からないままに…多分いろんな可能性を含んでいたのだと思う。

ひよっとしたらやり方によっては違う世界に変わっていたのかも…  
しれない…」

だが、現実はどうなってしまった」

荒れた大地を見ながら俺は悲しそうに答えた。

「種は…元に戻りたがっているんだ。」

それが砕けた時の雫の中に残っていた意思として俺の中に存在する。

俺は…偶然生まれた生物としか言い様がない。時の雫の欠片の恩

恵を多大に受けたんだ…

だからあらゆる時に干渉する能力を見につけた。そして時の雫を元に戻せる唯一の生物なのかもしれない」

「アルタイルたちはどうやって戻そうと考えたんだ？」

「それは俺にはさっぱりだが、科学的な根拠で見つけたんだと思う。その時と状況って奴を…」

「お前一人いれば全てことが足りるって言うのにな…奴らは千年もの時を費やしたのか」

「そうなるな…まあ、それでも俺だって自分でどのようにして時の雫が元に戻るのか原理は分からない。

これだけは体が自然と反応するから。

だからこの世界に散らばった時の雫の欠片を戻すとどんなことが起きるのかは今はまだ予測がつかないんだ…」

「開けてびっくりってことか…」

「すまない。そうなる」

「何故謝る？海は何も悪くはない。

お前が取った行動の数々は立派だと思っし、何よりもこの世界に命をかけている」

みゆが真っ直ぐな目で俺を褒めてくれた。

「ま…まあ、そういうことだから、全ての門を戻した時に分かる」

濁すような形になってしまったが、事実だ。

俺には星の記憶が断片的に流れ込んだりしてはいるもののその全てが分かるわけではない。

しかしそれでいいんだ…

結果が分かかってしまう未来など必要はない。

今をやるべきことをやって生きていることこそ意義がある。

そのまま朝食を済ませると、俺たちは四度目の都市を目指した。

## 10話

都市部は未だに壊疽者の姿がちらちらと蠢いていた。

ここへ襲撃に来るものは下っ端の奴らで、恐らく偵察に来ているのだと思った。

俺たちは物資の補給でここを三回訪れたが、変化はなかった。

変化がないのは人間ばかりだ…

もしも進化している壊疽者が何千と襲いかかったらどうなるのだろうか？

そんなことを考えてしまった。

数百人しかいない人間は地下に隠れて、みゆや俺のような作られた人間を盾にして生きていた。

一度でいいから話をしてみたかったが、その願望が叶うことはなかった。

人間の警戒心はすさまじいもので壊疽者が全て滅びるまでは出てくる気はなさそうだった。

分厚い扉が何層も存在する核シェルターのような場所でひっそりと暮らしていた。

「いつになったらこの世界の人間は出てくるんだ？」



「私たちの体は壊疽者に反応するようになってきているから…  
きつとそれがなくなったらだ。そのときに報告に行くようになって  
いる」

「それまでずっと暗い地下で過ごしているのかよ。

壊疽者だって進化を遂げているのに、人間だけは退化をしていく  
一方だな…」

「そう言うな。人は…繁殖することもできなくなり、我々に希望を  
見出しているんだ。

下手すれば我々がこの先の世界を担うようにすることも視野に入  
れているかもしれない」

「それだよ。それが良く分からない。みゆたちは強制力の掛かった  
命令を受けて生きている。

それがもしも終わったらどうなる？」

何度も思ったことだったし、みゆの存在というものの答えになる  
ことだった。

だから、みゆがすんなり答えられるはずもないと思っていたが、

「分からない…もしもそれが私の生きる意味だと言うのなら、消滅  
するかもしれない」

みゆは臆することなくそんなことを言った。

「変な想像は止めるよ。そんなことには絶対ならない。っていうか、  
俺が何とか考える」

別にあてがあるわけではないのにそんなことを答えてしまった。

「いいさ…期待しないで待ってる」

みゆはふふつと笑った。

それを見て俺は少し安心した。

みゆという存在は俺の中では大きくなっていた。朱里だって大事なだ。

しかしこいつと俺は同じ境遇で育ったのに生き方がまるで別だ。

だからかもしれない…同情って訳ではないが、こいつには幸せになつてほしいんだ。

「人間の未来はどうなるんだろうな？」

もしも俺たちがこのまま生き続けて、繁殖できたとしたらそれでいいのか？」

俺にとって人間に育てられた第三の人類だからこのことは複雑な感じがする。

人類の破滅は避けたいが、どうしようもないことだってある。

そして自分達が新たな時代の先駆者になることも何故か頭の中に浮かんでしまった。

「それが…私たちに託した夢なら…」

みゆはそれを受け入れる姿勢をとっていた。

流石だ…迷いというものが無い。俺とは違ってこいつは真っ直ぐだ。

「今、考えることじゃないよな。まだそうと決まったわけじゃないんだし…」

俺もこれから先に良い結果が待っていることを願いつつそんな言葉をお口にしました。

「さて…食料はありそうか？」

俺がきよろきよろと辺りを見回して、いつもの食料供給の場所を探していると、変な物が目の前を横切った。

「何だ？」

思わずその影を目で追った。

するとみゆが叫んだ。

「伏せろ！」

「え？」

俺がぼーっと立っているとみゆが覆いかぶさって俺の体を地面に叩きつけた。

「痛え！」

背中の痛みと同時に何かは俺の頭上を横切った。

ひゅん！

ロケット花火のような音のすぐ後に耳の鼓膜を破らんばかりの爆撃音が聞こえた。

「うわぁー！」

どうやら俺の立っていた後ろの建物に何かは直撃したらしく、轟音と共に崩れた。

コンクリートががらがらと飛び散り、そして土埃が舞い上がった。

「何だあれは！」

俺が取り乱しているとき、みゆはすぐに立ち上がってその物体の飛んできた先を見た。

するとそこには見たことのないような壊疽者がいた。

## 11話

体は今までのように部位が変化していて、化け物のようだったが、今までにないものが体の中に取り込まれていた。

「あいつら…近代兵器を取り込んだのか？」

見れば体のいたるところから金属の筒状の物体が飛び出していた。

「どこまで進化する気だ？」

俺は呆れながら立ち上がった。しかしまだ余裕はあった。

みゆと二人ならこいつを倒す自信があったからだ。

壊疽者は俺らの動きを引っ込んだ目で追っていた。

俺らは固まっついてはまずいと判断し、離れていた。

すると、そいつは目をぱちぱちと光らせた。

まさか光線でも出てくるのであろうか？

そんなアニメみたいなことを考えていると、そろそろ仲間が物陰から姿を現した。

「仲間を呼んだのか…しかも同じタイプの奴らだな…」

出てきた数は全部で八人。いや、八体と呼んだ方がいいのだろうか。

生物というよりは、機械に近い。

「それに…あいつら小さな要塞みたいな感じになってるが…まるで体中から砲弾が飛んできそうだ」

俺たちが相手を見てそんな風に分析をしていると、あいつらはいきなり攻撃を仕掛けてきた。

まるでこっちの話など聞いていない感じだった。

「くそっ…」

急いでその場から離れて距離をとった。

こいつらと近づくのはまずすぎる…

建物の陰に隠れて様子を見るしかなかった。みゆとは、離れ離れになったが仕方がない。

俺は街の中を走った。

一度でも止まれば、蜂の巣にされるのは目に見えている。

すると街中の至る所から爆撃音と建物の崩落する音が聞こえてくる。

まさか…

一旦立ち止まり後ろを振り返ると、奴らはあるところか、見境なしに建物を壊し続けていた。

それは俺たちを狙っているというよりか、何かを探しているのか？

だとすれば…地下にいる人間達ってことか。

今までそこまで地下に存在する人間に固執することもなかった奴らが、殲滅活動でもしようかと企んでいるのか？

俺にはその理由は分からなかったが、その場をどうにかしなければ、この場所は破滅を迎えるのも時間の問題だ。

俺は向きを変えて再び走った。

一体ずつなら何とかなるかもしれない。

そう判断し、後ろに回りこんで応戦しようとした。

建物の合い間を縫うように走り、それぞれの敵の場所を確認し瞬時に街全体の地図を頭の中に描いた。

最短ルートはここか…

狭い路地の中を通り抜けると、早速一体目の敵の背中が見えた。

他の仲間とも距離は十分離れている。これならすぐに追撃を喰らうこともないな…

そしてすぐに飛び出すと、敵の背中目掛けて武器を突き刺した。

その感触は金属を貫くような変な感じだった。

血など出るはずもなく、壊疽者は何が起こったのだろつと振り向いた。

「ぐぐぐぐ…」

そして声にならないような声を上げて、壊疽者は消え去った。

残りは七体…みゆもどうにか応戦してくれていればいいが…

そんなことを考えていると、更に連続で爆撃音が近づく。

破壊活動は続いているのだ。

がらがらと空からコンクリートの破片が降ってくる。

早くしなくては…：しかしみゆと一緒にでも二人だけで残り七対は無理がありすぎる…

人間の護衛に回っている俺らと同じ存在の奴らはどうしているんだ？

そんな愚痴をこぼしながらも俺は再び動いた。

あいつらが無茶苦茶をするから、元々の地形が変わってしまった。

だが、俺の頭の中には街全体の地図が入っている。



迷うことなく第二のターゲットに向かって最短距離を走った。するとそこには地面に倒れた壊疽者の姿があった。

「これは…」

俺はその時に周囲の様子を伺った。

爆撃音も止んでいる…

身を隠すことなく堂々とその場に姿を現すと、そこには全ての壊疽者が倒れていた。

そして見慣れない二人の男とみゆがそこにいた。

一人は長髪で黒髪、細身で背が高くていかにもプライドが高そう  
だ。

もう一人は子どもみたいで童顔で、背が低くこれまた長髪だが、色は銀色で目が見えないくらい伸びている。

「まさか…」

俺は警戒しながらそいつらの側に近づいていった。

すると、向こうも俺に気が付いたようで立ったまま待っていた。

「お前か…門の向こう側から来た人間は…しかも希望の子ども…」

「出来すぎているぞ…」

「どうぞやら歓迎してくれる様子はない。明らかに敵対心丸出しだ。」

「俺の事を…ということとは、みゆの仲間か」

俺はその場の雰囲気は何となく察した。

しかし奴らは不機嫌な顔のまま答えた。

「味方がどうかは知らんが、同じ目的を持つ者ということだ」

「みゆはともかく…お前は嫌いだ」

直球とはこのことだな。

しかしへらへらされるよりはいい。憎まれることは慣れているからその方がやりやすい。

「あいつらは、あんたらが殺したのか？」

倒れている壊疽者を指差して話した。

「ああ…お前らがちまちまやっていたからな。」

全く…北の壊疽者を壊滅させに行つて帰ってきたら都市がこの有様とはな…」

「お前…弱い」

一人は頭が良さそうだが、もう一人は…馬鹿なのか？言葉が足りないぞ。



## 12話

「あのなあ…そう思うなら早く助けて欲しかったんだがな…」

俺は皮肉たっぷりでそう話したが、相手は全然動じることがなかった。

「お前の実力も見たかったからな。」

しかし…あんなものなのか？敵の後ろから不意を付いて攻撃なんて…

あれではこの先思いやられるが…」

ため息交じりで長身野郎が俺に吐き捨てるように話したが、みゆが俺のことをかばってくれた。

「海は、一生懸命やってくれている。それを馬鹿にするな！」

みゆは今にも飛び出しそうだった。

すると童顔のもう一人の奴は、

「シックスが怒った！くくく…子どもみたいー」

お前に言われたくない、と思わず突っ込みたくなかったがそれをぐつと堪えた。

何なんだ？この二人組みは…

「こいつを俺は認めない。大体、門の向こう側で育てられた奴なん

だろ？

それだけで否定する理由が十分だ」

まるで俺の事を受け入れる気はないようだが、俺も流石に言い返した。

「何だそれ？何でそれだけで十分なんだよ。お前だって俺のこと何も知らないだろうが」

「うるさい。目障りなんだよ。俺らがここから消えてやるから後は勝手にしろ」

「そつだ…勝手にしろ！ばーか」

そのまま二人は言いたいことを言ってその場からいなくなってしまうた。

「おいおい…」

嵐のような出来事に俺はどうしたらいいのか分からずに、飛び出した怒りをただ引っ込めるしかなかった。

そして静けさだけが残るこの状況を俺はただ見ているしかなかった。

「海…まずは現状を確かめなくては…」

みゆはあいつらのことなど気にせず、周囲の様子を伺っていた。

「そつだな…」

俺もワンテンポ遅れて、その言葉に従った。

それにしても酷い…

先ほどまではたくさんの建物が建ち並んでいたのに、その大半が崩壊し見晴らしの良い街に変わってしまった。

幸い、ここに住んでいる人間はいない。

定期的に見回りに来ている、クローンの存在がちらちらと見て取れた。

「良かった…あいつらも無事だったか」

俺はそれを見て胸を撫で下ろした。

何度も彼らには世話になっていたし、俺らの要求に嫌な顔一つしなかった。

寧ろこっちのほうが人間っぽい気がする。

人間とクローンの差など俺には到底理解できなかったが、全員の無事は確認できた。

「壊れたのは街の三分の一程度ってどこか。

それにしてもあいつら今までとは別人のようにやり方を変えてきたぞ？

武器を体に融合させるなんて…」

「本格的にこの世界の立場を逆転させにきたのかもしれない」

みゆはぼそつとそんなことを口にした。

「人間を滅ぼし、壊疽者がこの世界の唯一の生物になるってことか？  
人数でいったらあいつらのほうが多いかもしれないが、どう考え  
てもあいつらだけではこの先生き延びれないだろ……」

「そうかな？ 奴らは付け焼刃にしても人間以上の成長を見せている。  
どんな形であれ進化しているんだ。人間よりも優れる日が来るの  
もそう遅くはない……」

現に人間の住む地下への入り口を真つ先に目指していた。  
今まではそこまで固執することもしなかったのに……」

「おいおい……」

まさかとは思ったが、みゆの話すことにも一理ある。

だとしたら、本当に時間がないということだ。

「みゆの言うとおりだとしたら、近いうちにまた、ここが襲われる  
ということになるが……」

「多分、そうなる。奴らも段階を踏んでいた。  
何度も姿を現していたのもここを調べるためであり、進化させた  
壊疽者を送り込んで、

どの程度なら我々に対抗できるか判断していたのかもしれない……」

「そこまで用意周到だと？ しかし……」

今までのことを考えれば、否定する言葉が出ることはなかった。

「奴らにはまだまだ上の存在の可能性がある。

だから、これから先、襲われるとしたら、今以上の壊疽者が出ると思う…」

個人での行動が主だった者が、統率力を持ち、武器を持ち、

そして知能まで手に入れたら太刀打ちするのが難しくなるのは明白だ…」

「なら、どうしたら…」

「とりあえず、この地下に潜っている人間に会いに行くしかないのかも」

「人間に？みゆ…お前、場所を知っているのか？」

「ああ…そこに我々を生み出した最高学者の一人が存在する。

その者に今の世界の現状を教えてもらわなくては…」

私がいなくなってからこの世界も大分様変わりしたし、何よりも壊疽者の動きがさっぱり読めない。

情報が少なすぎるんだ…だからこればかりは当初の目的を遅らせてもやらなくてはならない行為だと思うが、

海はどう思う？」

「いや…俺だって現状を知らなくては先へは進めないと思うし、

今のままでは足止めされているような感じだ…」

ただ漠然とこのまま門を元の姿に戻すことよりも、この世界の原点を知らなくてはならないのではないかな？

でも、どうして今になって人間に会おうと思ったんだ？

あれだけ毛嫌いしていたのに…」



そうだ…みゆは、ここに着いた時に人間に会うことを拒絶した。

それが人間との約束だったのか、それともただ単に自分が会うのが嫌だったのかは分からない。

しかし俺は問い詰めることができなかった。

どこか寂しそうなあの表情を見たから。

「なあ…本当にいいのか？」

再度確認するが、みゆは黙認した。

そうか…もう過去とのしがらみを気にしている訳にはいかなかったということがあるのか。

俺はそのことを追及することはしなかった。

そのまま黙ってみゆの背中を追いかけるように後を追った。

みゆは、真っ直ぐに目的の場所を目指した。

そこは何もないくらい見晴らしの良い場所で、どこにも入り口があるのか分からなかった。

すると、みゆは地面に向かってこつこつと指先で何度もたたいた。

俺には儀式のようにしか見えなかったが、実はそうではなかった。

みゆが数度、地面を指先でたたくと、急に地面が大きな音と共に穴が空いた。

いや、扉が開いたといった方が正確だろう。ぽっかり開いた地面には階段が見えていた。

「これが…入り口か？」

俺は呆気にとられてその様子を見ていた。

「そつだ…ここから下に下りて、更に地下に潜る…」

みゆは淡々と行動に移っていた。

しかしそれがどこか寂しそうにも見えたのは俺の気のせいなのだろうか…

誤魔化すかのように振舞っているみゆの行動が気になっていた。

### 13話

地下に潜ってもうかれこれ二時間が経った。

どれだけこの世界の人間は慎重なのだろうか？

俺はぶつくさ文句を心の中で呟きながら歩いていった。

しかし文句も言いたくなる。最初の階段を下りると、まずは何も  
ない空間がぼつかりと広がりそこを数キロ歩かされた。

そして更に下に通じる扉をみゆが暗号化されたコードを打って開  
く。

それを三度も繰り返した。それでも人間の存在する空間には出る  
ことができなかった。

それだけで一時間だ…イライラも募ってくる。

「なあ…弱音を吐いて済まないと思うが、まだなのか？」

痺れを切らして聞いてしまった。するとみゆは、

「もうすぐだ…」

の一言であっさりと返した。

そうですか…

俺はそれ以上何も言えなくなった。

そして結局それからたっぷり一時間は歩かされた。

「ここだ…」

迷路のような道を歩き続けること三時間。ようやく目的の場所までたどり着いた。

そこには近未来的な扉があった。

みゆは何もない空間に指先でキーボードを打つように数度動かした。

するとその扉はしゅっと開いた。そこはエレベータだった。

俺らは何も言わずにそこに乗り込み、そのまま地下へと下がっていった。

それは俺の知っているエレベーターとは違い、すぐに目的の階に着くようなものではなかった。

数分経つても止まらない。

「なあ…さっきからお前何をたたいていたんだ？あれは鍵か何かか？」

一連の行動で見たみゆの動きは不可解だった。

「あれは、空間に記憶させてあるシリアルコードだ。」

それを特定の場所に同じようにたたかないと扉が開かないようになっている。

ちなみにあの扉全ての強度は、この世界最高硬度を誇っていると  
いっても過言ではない」

「つまり、壊疽者には破られない自信があるということだな…」

「それは知らない。

特異な能力を用いれば、すり抜けることも可能だし、溶解させる  
ことも可能なのだから…」

しかしその先に進んだとしてもあの地下迷路を攻略できるかは分  
からないがな」

「ああ…あれか…俺も歩いて気持ち悪くなった。暗闇に数十もの道  
が広がっているのだからな…」

「あれを正解の道を最短で歩いて四十分…迷えば、一生出られない。  
破壊して突き進んでも無理だ…」

そういう意味があつて、あの厳重な空間を三度も歩かされたのか…

しかしそこから更に下がっているってことは、人間の存在する場  
所は地下数十キロメートルあるってことか…

「あと数分だ…」

みゆの表情も少し強張った。

気丈に装ってはいるが、心が揺れているのだろうか？

沈黙の時間がしばらく続き、数分後には地面に降り立つような感覚に襲われた。

「着いたのか…」

目の前のドアがさっと開くと、そこには人の作り上げた空間が広がっていた。

巨大なドームのようなまるまる都市一つがそこに収まっているような巨大な空間と太陽のような照明、

そしてそれらを動かしている機械音が微かに聞こえた。

壁は金属、地面も土ではなく人工の床だった。

「街が丸々この中に入っているのか？」

「そう…ここには人間の科学の結晶が凝縮されている。

何でも人工で作り上げられている世界だ…」

「こんな広い場所に百人に満たない人間がいるのか…」

贅沢というか、何と言うか…俺の想像を遥かに超えている…」

静まり返った路上にぽつんと立っている俺たちの存在はひどくちっぽけに思えた。

「大聖堂がこの都市の中心部にある…そこでこの世界の最高幹部に会える」

「みゆ…大丈夫か？お前…さっきから無理しているように見えるが

…」

「す…すまない。どうも少し前のことを思い出してな…」

よほどのことがあったのだろう。今までこんな弱弱しいみゆの姿を見たことがなかった。

しかし今は黙っていることしかできなかった。そのまま大聖堂を目指してただ黙って歩いていった。

この空間に出来上がっている都市は中心部に大聖堂それを取り囲むかのように全てが対照に建造物が出来上がっていた。

よほど几帳面な奴が設計したんだな…そんな風に思っていた。

大聖堂の重い大きな扉を開けると、俺らを待っていたかのように一人の老人が立っていた。

白髪の長髪を後ろで結び、髭も長く生えていた。眼光に鋭さがあり、体格も大きく、腰も曲がってなどいない。

「シックス…いや、今は尾上みゆか。来ると思って待っていた」

大聖堂の中はキリスト教の教会そのもので、後ろには十字架にかけられたキリストの像と聖母マリア像が存在した。

## 14話

その男の言葉が広い部屋の中でわんわんと響く。

「あなたは、ここで全てを見ていたんですね。セウロ…」

「ああ。地上のことは全てお見通しだ。

六ヶ月前にこの空間の完成と共に、地上の警戒も同時に行っていた…」

特に旧都市部と門の周辺には大量の監視装置を設置している…  
しかしよくここへ顔を出せたものだ…裏切り者の分際でな」

「え？」

俺は思わずみゆの顔を見てしまった。

「それは、まあ置いておこう…そいつは行方不明の希望の子どもだな？」

セウロという老人は俺の事をぎろりと睨んだ。

「そいつを連れてきただけでもよしとしよう。  
しかし忘れるな…お前の犯した大罪は全ての人間の怒りを買っている。」

生み出された恩恵を忘れ自らの欲に走ったのだからな…  
だから全ての生まれし第三の人類に強制力を与えたのだ…お前を例外としてな…」

俺の事を指差した。



「お前は強制力が適用される遙か前にこの世界から姿を消したからな。」

まあ、しょうがないといえばしょうがないが…

よりによって我々に従うべき者が揃いもそろってな」

まるで欠陥品と言いたいような表情だった。

こいつ…

俺は怒りが込み上げてきていた。

「この世界の歴史はここ二十年の間に大きく変化させられた。」

ポラリス…そしてアルタイルたちの存在のせいだな。

もっと早くポラリスの研究機関を完全封鎖していればこんなことにはならなかったものを…」

「アルタイルとはどういった関係だ？」

俺は強気の姿勢でセウロに聞いてみた。

「ふん…口のきき方も学ばなかったようだな。」

お前は自らがどうやって生まれたのかを知りにあそこに行ったのだらう？

なら、私に感謝するのだな。生みの親は私なのだから…」

「何だと？」

「アルタイルたちがこの世界から消えて三年後にお前らのプロジェクトが完成した。」

完璧な遺伝子操作された特異な能力を持つ人間、第三の人類としてな…

その第一期に生産されたのが、みゆとお前そして残り五名の計七人だ。

そして特にお前は時の雫に関する干渉能力を持つ我々の望むべき存在だった。

しかしそれと同時に第一期の時に出来損ないとして生み出されてしまった壊疽者は数百人になった…

それでもお前を生み出せたことが人類にとって唯一の希望だったんだ。

それを…まさか研究の途中で失うことになるとはな。愕然としたよ…

そしてお前のような存在を再び作り出そうと切磋琢磨したが無理だった。

第二期、第三期と同じような工程で人間を作り出したが、結果は壊疽者の数を何倍にも膨らまして終わりだった」

「そんな…」

俺は自分の存在の大きさを知った。

しかしそれをすぐに分かりましたと受け入れられないのが現実だ。

「それだけお前の存在は貴重だということだ…

向こうの世界で名前を貰い、人として育てられたのだから元は我々の所有物だ。

ここに戻ってきたからにはしつかりと仕事をしてもらおうか。

さて、みゆ…お前は我々に多大な損害を与えた張本人だが、今はそれをどうこう言う時期ではない。

壊疽者の侵略が迫っているのは事実だ。それならば過去を水に流

して先を見るとしよう。

残された純粹な人類は七十人を切ってしまった。

一番若い者でもとうに四十歳を超えている…

簡単に計算しても何も起こらない状況で人類という種族が減びるのは五十年と掛からない…」

「壊疽者の侵略状況をどれだけ把握しているんだ？」

俺は気を取り直してセウロに聞いた。

「初動という所だろう。」

我々の住んでいる場所、規模、どれぐらいの期間で攻略できるのか…

などなどな…会話をすることも計算をすることも出来ない壊疽者がこの数ヶ月で飛躍的に成長している。

少なくとも後一年もすれば、我々は追い込まれているだろう」

「それは俺も自分の目で見て分かった。

しかし、まだ俺らのような存在の方が実力は上だ。

先ほども仲間のよう奴らが進化した壊疽者をあっさりと倒すのを見たからな」

「そうか…はは…おめでたい奴だな。

お前は。いいか？進化というものは、急激には行われないんだよ！段階を必ず踏む。

お前らのような人類だって、完璧に出来上がるまでに百年の歳月を要しているんだぞ？

それが、あいつらは数ヶ月で意思の疎通を持ち、そして戦略を組み立てられるようになった。

しかも武器まで使える…繊細であったり冷静な部分が未だ備わっ

ていないようだが、

それでもこの速度を保ちながら成長すれば、半年もあれば我々と並ぶだろう…

知識を得て、そして武器を持ち、自らの体までも変化させる。

そうなってしまうたら手遅れなんだよ。今のうちに全ての壊疽者を壊滅させなければ我々に未来はない…」

「ここ数ヶ月と言ったな…それまではどうだったんだ？」

「我々と同じようにゆっくりと進化をしていた。

しかしそれは体の部位の変化だったり、巨大化したりと知能とは関係のないことだったんだ…

元々脳みそのない奴らが、どうしてあそこまで知識を得たのかさっぱりなんだよ」

## 15話

「謎が多すぎるな…」

ところで、話を戻すが、アルタイルとはどういった関係で？」

「私は、あいつらの上司だ。

単一国家『パンドラ』が出来上がったときの最高幹部の一人で、この国を動かしていた。

あいつらの上司であるポラリスが訳のわからない鉱物の研究を進めていなければ、

あんなことにもならなかっただろうに…」

俺もその話はアルタイルから聞いていた。

だとすれば、こいつはポラリスに研究所を閉鎖するように命じた政府の重役ってことか。

「アルタイルが不老不死という能力を手に入れてからはこの世界はめちやくちゃだった。

暴力と無茶な科学の研究で、壊疽者を次々と作り出してしまったんだ…」

そして当の本人は門の中へと消えてしまった。

ふざけやがって！世界の後始末を我々に押し付けていなくなるなど！」

セウ口の怒りも当然だが、同情してやれるほど俺はまだこの世界に馴染めていない。

「海…だったか。アルタイルはお前のいる世界にいたのだろう？」

あいつは何をしてどうなったんだ？」

これだけ世界をめちゃくちゃにした張本人のことを俺は隠すことなく話した。

過去の世界に戻り全ての門の開放をして、時の雫を元に戻そうとしたこと、

そして時の雫を元の形にした後に世界を自分の思い通りの世界に作り直そうとしたこと…

最後は俺の父親の手によって殺されたこと。

その一つ一つをセウロは興味深く聞いていた。

「なるほど、ほとんどがアルタイルが残した研究書物に書かれている内容と一致する。」

しかしこちらの世界からは、時の雫を元に戻す術がなく、それが出来るはずの唯一の存在が向こうにいったからな…」

俺のことだな。しつこい奴だ。

「しかしそれが逆転して全てがこちらに揃った…」

セウロは不適な笑みを浮かべていた。

「おい…一応言っておくが、お前もアルタイルと同じ考え方なのか？世界を自分の好きなように作り変えるために時の雫を利用しよう？」

「それは当然だ…人類が生き残るためにはそうすることが得策だからな」

「お前の意思でか？」

「ふ…それはこれから全員と相談するさ。しかし有意義な情報をもらった。」

その代償というわけではないが、みゆ！お前はこれから好きにするがいい…」

そこまで話すとセウロはみゆにカプセルを渡した。

「こいつを飲めば、お前に掛かっている強制力がなくなる。」

つまり壊疽者を全て殺せという力は働かなくなるということだ…自由な身だ。これから海について、好きなように動くがいい。

壊疽者退治は他の者に任せて、お前は時の雫を元に戻すことに専念しろ。

これは強制力ではどうにもできない行動範囲だからな…

だが、前回の事を踏まえて今更我々を裏切ることはないと思ったから、このような処置を施したんだ…

二度目はないからな」

みゆは、カプセルをじっと見つめていた。この中に自らの自由が詰まっているのだと考えてもいたのだろうか。

「これだけは話しておく。俺は…お前のために時の雫を元に戻す気はない。」

もしもこの世界の人間がそれを望むのならそうしてもいい。しかし俺には俺の考えがある…」

「その考えは？」

セウロは俺の答えを聞きたがったが、俺は今は答える気がなかった。

「全てが揃ったら教える」

「ふん…勝手だな…」

だが、時の雫を元に戻せる存在ならお前にもこの世界を思い通り動かす権利はあるかもしれん。

しかし…私利私欲のためにあれを使おうとするのなら、私は再びあれを粉々にする。

私にだって切り札はある。ポラリスたちがしたことをするまでだからな…」

その行為はどんなことが俺には理解できなかった。

しかしその気迫と信念に口だけの虚偽はないと俺は受け取った。

「分かった」

「それなら…来る時が来るまでにお互い、結末に向かって前へ進むとしようではないか。」

我々もお前達を支援することに力は惜しまない」

「それは…それで助かる」

「なら、話はここまでだ。次に会うときはお前が門を全て時の雫に戻している時だろう」

「…ついいいか？」



「何だ？」

「先ほど会った者たちだが、あいつらは…その…」

「気にしているようだ。みゆと同様に兄弟のことを…」

「そんな言い方するな！」

「本当のことを言ったまでだ…いい加減に受け入れる。

あいつらは、この世界で壊疽者を殺すためだけに生きている。

自由に動けるお前の存在をねたむ気持ちは正直強い…」

やはりか…俺は門の向こうの世界に行って帰ってきた。

そんな新参者に近く、強制力が働かない俺も存在はうっとおしい以外の何物でもないな。

自覚はしていたが、正直仲間が欲しかった。

この先を乗り越えるのに俺とみゆ二人だけでは無理だった。

しかしすんなりいかないのだろうな。

「彼らに自由は与えないのか？」

俺をねたむというのならば、彼らも自由になればいいと思った。

しかしセウロは冷酷に吐き捨てた。

「その答えはみゆが知っている。聞きたければ彼女に聞け…」

シックスよ、お前は記憶が戻っているのだろうか？」

そしてセウロはそのまま奥の部屋へと引っ込んでしまった。

広い大聖堂の中心に俺とみゆは残され、無言のまま立っていた。

やれやれ…気性の荒い爺さんだ。

そんなことを思いながら長い椅子に腰掛けた。

「みゆ…少し休もう。流石に歩き続けて疲れた…それにお前には聞きたいこともある」

そう促すが、みゆは思い埋めた表情で何か悩んでいるようだった。

「う…あ…ああ」

それを見て俺は無理に聞く気にはなれなかった。

「いや…いい。とりあえずここを出た方が良さそうだな。ここは息が詰まりそうだ」

そう判断すると、すぐに立ち上がりみゆの手を引っ張ってここから立ち去った。

「お…おい…」

みゆの言葉も聞かないで、強引かもしれないが何も話さないでそのまま外へ出た。

大聖堂の外は相変わらずの静寂だ。

これだけ広い空間なのに音がまるでしない。人が歩く音も話し声もまるでない。

そんな意図的に作られたような静寂を背に俺は適当な休める場所を探した。

すると公園のような敷地が見えたので、とりあえずそこで休むことにした。

## 16話

「海…お前に話しておかなくてはならないことがある」

公園のベンチに腰掛けるなり、みゆはそう切り出した。

「何だよ…急に…」

「お前だって気になっていたはずだ。セウロの言葉が…」

いきなり本題か…

まあ、ある程度予想はしていたが、俺は別に無理に聞きだそうとは思わなかった。

「別にいいよ。俺はそんなこと関係なく、時の罫を戻すことを最優先させる」

それでいいと思っていた。

みゆが嫌がることを知りたくもなかったし、知ったところでどうなるわけでもないと言っていた。

しかしそれは、俺の気持ちであって、みゆの気持ちではなかった。

だからみゆは感情的になったのだ。

「嘘つくな！お前だって気になっているんだろ！」

「え？」

みゆは驚くほど大きな声を出した。

見たことのない感情の高ぶりに俺はどうしていいのか分からなかった。

「私を気遣って…庇って…それが…私には苦痛だったんだ。

海は私のために思っていることなのは分かる…でも…でも…私は…」

あの人形のようなみゆが苦痛の表情で歪んでいるようにも見えた。

俺には信じられなかった。

「おい…」

俺は思わずみゆの肩を力強く握り締めた。

「私は…話さなくてはならないんだ…」

みゆはそつと俺の手に触れていた。

「分かったよ…そこまで言うなら、話してくれよ。みゆがそれで満足するなら…」

そして肩に置いていた手をゆっくりと下ろした。

「こんな私でも…自由を…望んだことがあるんだ…」

こうしてみゆはぼつりと自らの過去を話し始めた。

世界の景色は私が生まれてから変わることはなかった。

灰色で薄暗く生命の息吹がまるで感じられなかった。それは、私  
も同様だ。

生命の起源すら否定したくなるからだ。

生物は、母体を持って誕生するのに私は、その枠組みを大きく外  
れている。

何個も並んでいる硝子のケースと何十本と網目のように張り巡ら  
されたチューブやらパイプ、

そして消毒液の匂いがする景色が私の記憶に根強く残っている。

自らの種の起源に疑問を思ったのは、誕生して十歳の頃だった。

それは毎日の定期健診と能力を伸ばすための訓練をしている最中  
だった。

真っ白な部屋に研究者の男と対峙するように机を真ん中に座って  
いた。

そこには膨大な本の山。

知識を詰め込まれることも私には何の苦勞もなかったが、向かい

合って座っているありふれた研究者の顔を毎日見ているのは辛かった。

だから相手の偉そうな講義の合間についつい聞いてしまった。

「私は人なの？」

そんなことを話したのは初めてだった。すると職員は淡々とうろ話を話した。

「当たり前な事を今更聞くな…」

君は、人ではない。それは君自身が分かっているはずだ。君は無から生まれた。父親も母親もない。

我々の手で、情報と人間のわずかな細胞から出来上がった…

しいて言うなら君は数字の羅列から成り立っているのかもしれない」

どうしてそんなことを聞くのか分からないといった様子でぱらぱらと本を捲りながら私の顔すら見なかった。

私は自分の出生に疑問を感じずにはいられなかったから、続けて話した。

「それは…分かっている。でも…頭で理解できても…その…」

「何が分からないのだ？はつきりしろ！」

私の煮え切らない態度に腹を立てたのか、その研究者は怒鳴りつけた。

「いや…なんでもない」

思わず言葉を引つ込めてしまった。

「それなら、続きをはじめようか。我々にも時間が無いんだ。無駄なことは省いていきたい。

いいか…この世界の仕組みとこれからの計画についてだが、まずは最大の元凶でもあろうこのアルタイルの研究誌…その五十ページ目に…」

そんな彼の言葉は私の頭の中には入らなかった。

ただただ、この湧き上がる胸の痛みを抑えることに必死だった。



## 17話

五年前

私が十三歳になった頃：世界には一つの兆しが見えていた。

世界は第三の人類開発を止めて、壊疽者壊滅に向けてあと一歩というところまで迫っていた。

それというのも私とその兄弟たちの成果のお陰というものだろう。

数万に膨れ上がっていた壊疽者も数百までに数を減らしていた。

全ての壊疽者を全滅させれば、この先に憚る脅威はない。

だからこそ、これは世界を変える出来事なのだ。

しかし私は…

「みゆ…気分はどうだい？」

若い研究員で完全な人間であるこの男は私の担当の一人だった。

一年前からこの研究所に正式に職員として姿を現し、そして私の生態観察と教育係をしていた。

年は私よりも四つ上の十七歳で今まで会った人間のどれとも当てはまらなかった。

私に命令することも無理な実験も私の体で行わなかった。

どう表現していいのか分からない。

私の頭脳では分析不能ということだ…

「おい…みゆ。話しかけているんだから返事ぐらいしてよ」

みゆと言つ名前が彼が付けてくれた。番号でしか呼ばれなかった私にだ…

検体シックス…それが私の名前だ。

だが、彼はここに来るなり、名前を付けたほうが仲良くなれるだろ？つてそんな単純な理由で私に名前をつけたのだ。

彼以外の研究者は番号でしか私を呼ばなかった。

だから私もその名前にどう反応していいのか分からなかった。

だから無視する形をずっと取っていた。

「まあ…いいよ。俺が好きで呼んでいただけだし。

でもさ、こんな世界でも楽しく生きなきゃ。お前…全然笑えないだろ？」

その男は見るからに明るかった。

最後の人間の子とも言われていてもその事自体を重く考えること

も、  
自らが最後の人間だと使命感に溢れる様子もなく、私に気軽に接してきた。

「うるさい…私に気安く話しかけるな」

私はそんなへらへらしたこの男が嫌いだった。

どうしてこいつはこんなに楽しそうに毎日を過ごしている？

こんな世の中に…

「そう言っても俺も仕事だからね。俺の言うことは聞いてもらおうよ。さてと…今日は残りの壊疽者の行動についてだけど…」

そこからはそいつは仕事の目になってた。

その男の名前は椿京谷。最後に生まれた人類だ。

つまり彼以降は、人類の誕生がなかった。

十七年前に人類の繁殖能力は遂に絶たれたのだ。同時に第三の人類の計画は実現化していった。

今まで人が生み出したものは、高度な知能を持たないただの人の形をした生物だった。

それは第三の人類に繋がる第一段階とっていいだろう。

そこから人はまるでロボットでもいじくるかのように改良を何度

も重ねていったのだ。

完璧な人間を作り上げるために。

そしてついにその現実が具現化したのは、今から十三年前だ。そう、私が生まれた年だ。

私は生まれてから数年で、あらゆる知識を詰め込む行為と身体能力を高める行為を強制された。

それは人間達の執念のようなものを感じた。

自らの種族の滅びを止めるために……世界を存続させるために私たちに全てを賭けていたのだ。

だから私はそんな期待を背負って、十歳の頃から壊疽者を殺す仕事を任された。

私たちの副産物のような存在の壊疽者は気が付けば数万に膨れ上がっていたのだ。

だからその自ら出した膿を私たちが処理してきた。

京谷と初めて出会ったのは、三年前だ。

その頃には、もう人間は第三の人類を生み出そうなど考えていなかった。

その計画は、壊疽者を大量に生み出して三年で終わったのだ。

その頃の京谷は研究員としてではなく、その前段階の研修職員として、語学、遺伝学などを私に教えていた。

私にとってそんなことはどうでも良かった。

しかし義務ではあるので、仕方なく聞いていたのだが、こいつはそんな勉強よりも違うことに熱を注いだ。

感情つて奴だ。

私たち第三の人類は紛れもなく人に近い。しかし感情が全く存在しない。と彼は断言した。

そのことについて話をすると、セウロを始めとするお偉い方々は、笑いもせずそんなもの必要ない。の一言だった。

つまり…私たちは、彼らの道具でしかないのだ。

彼らに従い、そして未来の人類のベースとなり、この世界に人間という種族を永遠に残すのだ。

そのことに私は疑問は抱かなかった。そう教えられているのもあったが、生まれたときから私はそういう生き物だと自覚していたのだ。

細胞が…脳が…

特に気にもしなかったが、京谷はそんなあるのかないのか分からない私の心の中に土足でどンドン入ってきた。

「おいおい…はつきりと呆けた顔するなよ。説明しているこっちの身にもなってみろよ」

京谷は上の空の私の顔を見てそう話した。

「あ…悪い」

京谷は持っていた資料をテーブルの上に置くと、ため息を大きく吐いた。

「みゆ…お前さー…本当はこんなことしたくないんじゃないかい？」

「え？」

その質問が何を意味しているのか分からなかった。しかし京谷は話を続けた。

「君はどう生きていいのか分からないって感じだよ。

目的もなく…機械のように命令を受けたらそのまま任務を遂行する。それでいいのかい？」

「…」

私は何も話さなかった。

「もっと自由になるべきだよ。

まあ…こんな簡単に話しているけど、実現するのは難しいけどね。でもさ、そんな難しく考えないで、もう少し肩の力を抜いてみた

らっ。」

何故か私は無性に苛立つてきた。

「うるさい！私は、私だ！私のやりたいようにやっている。お前の指図を受ける気にはなれない」

思わず声を荒げてしまったが、京谷は冷静だった。

「知ってる…だけど、ゆっくりでもいいから俺の話したことは覚えといてよ。」

このままだと第三の人類は…ただの…消耗品にすぎないのだから…」

それは酷く冷たい言葉だったが、どこか的確に私たちのことを表現していた。

だから言い返すこともできなかった。

「さ…続きを始めようか。っとその前に…ご免、トイレ…」

あっさりと話を切り替えられるこの男の神経の凶太さも凄いが、その後にトイレにすぐ行けるなんて…

私は呆れながらも、この男は別の人間とは少し違うと思っていた。

しかし…今日何度目のトイレだよ。





壊疽者の勢力は格段に落ちていた。

それは一種のイレギュラーといってもいいだろう。

壊疽者自体に疫病が流行り、自滅していったのだ。だがその間にも進化はしていた。

だから新しく生まれた壊疽者はかろうじて生き残ってはいたが、その数は今までの十分の一程度までに落ち込んでいた。

数百になっていた壊疽者を一掃するのにそう時間は掛からないだろうとセウロたちは予測を立てていた。

壊疽者を全て葬ることができれば、当面の脅威は避けられる。

そして今までの失敗を生かしてこれから新たな第四の人類の計画を立てることもできると人間たちは考えていた。

第二の人類は壊疽者、そして第三が私、  
だとしたら第四まで作られたら今度は、壊疽者と私たちの合いの子でも出来るのだろうか？

そんなことも考えつつ、人間とは実に愚かだと呆れていた。

そこまでして、種を残したいものか…

しかし私はそんな人間の計画に乗せられて生きている。だから逆

らうことはできない。

そこに私の存在意義があるのだから。

数ヶ月してリロイたちは壊疽者が群れをなしている集落を発見した。

「ここを落とせば、ほぼ壊滅に等しい。

単体行動が多かった壊疽者も知識を得て、群れを作るようになったのが、今回は仇になったな」

「そのようで…ここを攻め落とせば、後はゆっくりとこれからのことを考えられます」

「それで、誰が行く？防衛の面では、二人いれば十分だろ？」

「では、攻撃の中心はファイブとシックスに…後方支援をナインでどうです？」

「そうだな。他の者は、近郊の探索に出かけてここから遠い場所にいるから。」

数百の壊疽者ならこの三人でどうにかなる」

セウロは勝利を確信したかのように笑っていた。

「詳しい作戦等は後に伝える…お前らは各自持ち場に待機している」

そう言って私たちの方を見た。

この部屋には私と同様の存在である第三の人類が集められていた

のだ。

私たちは一言も発することなく、そのまま従う意思を無言で伝えると部屋を出た。

「みゆ…」

長い通路を歩いていると、私は呼び止められた。

この名前で呼ぶのは一人しかいない。

だから私は頭を振り返ることをしなかった。黙々と前を向いて歩いていた。

「おいおい…無視かよ」

そいつは私を追いかけてすぐに追いついた。

「京谷…私は暇じゃないんだ」

一蹴するように話しかけたが、こいつはめげない。

「壊疽者の本格的な壊滅作戦だろ？」

「何で…それを？」

「いや…俺だって重役の端くれだよ。この位の情報何となくでも入ってくるわ」

「どうしてここにいるんだ？いつもなら、研究所にいるじゃないか」

「ここは、医療機関と政治機関が複合されたビルの中だ。」

いくら京谷が重役だとしても更に上の立場のセウロが開く会議には参加できないだろう。

「ちょっと…野暮用でね…そんなことよりもさ…これから出られないか？」

京谷は指を外に向けてそう話した。

「どこに行く気だ？」

「たまにはいいだろう？俺にも付き合えよ」

にっこりと笑いながら行く先は告げなかった。

私は特に何もなかったから、仕方なく京谷についていくことにした。

## 19話

京谷は公園に私を連れて行った。

この公園には木も生えていれば、巨大な池もあった。そして鳥や小動物も存在した。

流石に風は存在しなかったが、完璧なまでに自然を再現していたのだ。

京谷はその公園の中を歩き、ベンチを見つけると腰を下ろした。

「まあ…ここに座れよ」

私も何も言わずに腰を下ろした。

「なあ…みゆ。お前、この世界のことどう思っている？」

自然に話しかけてきたが、それは私にとって難しい質問だった。

世界に対する愛着やら生物に対する定義などを深く考えたこともなかったからだ。

無機質から生まれた存在として、そういった考えは無縁のものと思ってきた。

「難しいか…」

俺もさ、こんな人工的に作られた世界を目にして生きてきて、実際よく分からないんだよな」

「何がだ？」

「無理をしすぎているんじゃないかってね。」

確かに、こんな世界になったのはアルタイルを始めとする先人のせいかもしれない。

しかしこの事実には、彼らがいなくても起こっていたのではないかな？

人は…多くを求めすぎてしまった。

生物本来の能力を失い、生きながらえることに必死だ」

「それは…つまり…あっさり死ねと言うことか？」

「いや、そうは言っていないさ。」

無理をするなっということさ…例えば、体がぼろぼろで死にそうなのがいて、そいつの脳だけは生きている。

そいつは体だけをそっくりそのまま取り替えて再び生きながらえた。

これってどうだ？生物として成り立っているか？」

「成り立ってはいないな…」

「だろ？取り返しのない状態で死にそうになったら、そいつはそのまま自然に死んだ方がいいんだ。」

無理に生きながらえる方法ばかりを考えては、そこで人間でなくなってしまう気がする…」

京谷は深刻な顔をしていた。そこからは鬼気迫る状態にも似た雰囲気漂わせていた。

今日のこいつは少し変だな。

「とてもこの世界の人間とは思えない発言だな…」

「そうかもな。しかし俺は最後の人類として、普通に死ぬことを望んでいる。」

俺の分身など存在してほしくもないね」

「まさか…パーフェクトクローンのことか？」

「ああ…こちらでも計画倒れだが、壊疽者が壊滅したら実現するだろう。」

第四の人類とまで噂されている悪魔のような計画がな。

第三の人類の研究サンプルと我々の遺伝子を完璧な組み合わせで作る。」

肉体は全く同じ人間。脳の機能をオリジナルのもの完璧復元すればできあがりってことだ…」

パソコンのバックアップってところか？気持ちが悪い…」

「それで永久の生命を手に入れるのか…」

「だから、俺はそんなものはなくなって欲しいんだよ。」

人類は滅びるべきだ…今まで幾度となく生命の誕生、進化、そして絶滅が繰り返されている。」

人間もその歯車の一つにすぎないさ」

私は正直驚いていた。

京谷は作られた世界で生まれた人間なものにも係わらず、普通に生物として死にたいと言っている。

普通ならその環境に流されるものだ。それが当たり前だと思って…

こいつそのものもイレギュラーなのかもな。

そんなことを思ってしまった。

「そんな話を私にしたらまずいだろう？お前は仮にも私の教育係だぞ。反逆行為を私に教育してどうする…」

「それは百も承知だ…しかし、お前に聞いて欲しかったんだ。

俺の気持ちって奴をさ…お前は第三の人類でもどこか違う。そう直感したんだ。だから話した」

「そんな…根拠もないことを…」

「いや、俺の直感は当たるんだぞ」

「そういつことにしておく…」

「相変わらずだな…あ…悪い、ちょっとトイレに行ってくる」

そう言っただけ京谷は席を立った。

「あいつ…何考えてるんだ？」

私は京谷の背中を見ながらため息をついた。



「壊疽者壊滅の計画が立ち上がってから一ヶ月が経とうとしていた。私の生活に変化はなかった。」

京谷との勉強会、そして生態調査、健診、簡単な任務。この繰り返しだった。

しかし少し違ったのは、京谷と出かける回数が多くなったのだ。

私自身、どこかがおかしくなったのだろうか？

以前はあんなにうつとおしいと思った京谷の存在が自然に私の生活の一部になっているような感じだ。

「とりあえず、勉強はここまでだ。今日の午後は健診もないんだろ？それなら出掛けよう」

私はもう断つたりしなかった。京谷が行きたい場所へ黙ってついていくようになった。

今日は植物園に向かった。

京谷は自然がとても好きだった。だから植物が生える所を決まっつて選んでいた。

「ここで唯一自然な物といえば、これだけだからね」

その言葉が口癖だった。

周りが目まぐるしく人工的な物で埋め尽くされる中で、植物だけは、種から育って生きていた。

まあ、それでも気温を一定に保つ空調管理と機械的にまかれる水のお陰ではあるが…

「みゆ…君には、夢とかはないのかい？第三の人類とはいえ、完全服従の義務はないはずだ」

京谷は私に毎回難しい質問を投げかける。

しかし私も慣れたもので、素直に答えを出せるようになっていた。

「夢か…京谷…あのさ、私…自由って望んでもいいのかな？」

「それが君の望みなのかい？」

「いや…よく分からないんだ。今でもある程度は自由なんだけど、これが自由なのかってというのがさ…実感できないって言うか…」

「ふうーん…」

京谷は私の顔を間近で見ている。

「何だよ！恥ずかしいな」

私は思わず仰け反ってしまった。

「いや…嬉しくてさ」

「何がだ？」

「みゆがそんなことを考えているって事だよ」

「そんなに凄いことなのか？」

「ああ…第三の人類の欠点を俺は俺なりに考えていた。

それはさ…感情がないってことだよ。それは研究者たちのせいかもしれない。

単調作業のように詰め込むだけの作業を君達に与え続けたから…感情がないってことは、夢もない、生きる意味も持たない。

もしも人類がこのまま滅びたとしても君達は意味のない人生を迎えるかもしれないんだ。

だからこそ、君達には感情を抱いて欲しかった。それが今の俺にできる唯一の望みなのだから…」

「今の俺？これからもやればいいじゃないか。でも…私は変わったように見えるか？」

「ああ。雰囲気は少し変わった」

私自身、自分が変わったのかどうかなど分かるはずもなかった。

「そういうことしておいてやる…」

「照れるなよ」

「照れてなんかいない！も…もう行くからな。勝手にしろ」

私はそのまま、その場に京谷を置いていった。

そしてそれから一週間後に世界を変える大きな事件が起こった。

## 20話

セウロの使いが私の元へ足早にやってきた。

その足音でただ事ではないことは確かだった。

明け方だったが、私はその音で目が覚めていた。

だから相手が部屋のドアを開ける前に私はベッドから起き上がっていた。

それから数秒後に機械音と共に目の前のドアが開いた。

「ノックぐらいしたらどうだ？」

私は無愛想な顔でそう話した。

しかしそんなことはどうでもいいと、目の前の黒のスーツに包まれた男は私に書類を投げてよこした。

「今から三時間後にここに集合だ。」

壊疽者の動向が掴めた。作戦内容もそこに全て入っている。

いいか…我々と奴らの因縁をここで絶つんだ」

「はいはい…」

そんなそつけない態度に腹を立てたのか、男は私に向かって少し苛立ちながら話した。

「おい。シックス。」

余計な世話かもしれないが、お前の感性の部分で、鋭さが失われているような気がする…」

「鋭さだ？」

その言葉に思い当たることなど何一つなかった。

「ああ…任務における実戦訓練は何度もシュミレーションしているが、所詮は機械だ。」

機械相手には上手にこなしているが、俺の目は節穴ではないんだぞ？」

私を睨んで威圧した。しかしそれに臆するほど私も弱くはない。睨み返してやった。

「ここ連日お前の様子を伺っていたが、以前のような圧力をお前から感じない。」

刺すような鋭い雰囲気かな…」

「私同様に人間でもないお前に何が分かるというんだ？」

「俺は少し人間寄りだから分かるんだよ。人は臆病で繊細だから…しかし俺の話したことも証拠のあるものではないからな。実戦で結果を出せれば問題はない。作戦実行までに今あるお前のその変な甘さを取り除け」

その言葉に私は柄にもなく突っかった。

「偉そうに…なんなら、今お前で試してみるか？」

それが望みならこの場で叶えてやるつかという意気込みだ。

「くくく…その意気だ。その気持ちで任務に望んでくれよ」

そう話すと、男はそのまま部屋を出て行った。

振り上げようとしていた拳を私はそのまま引っ込めた。

「私は…」

先ほど言われたことが何故か胸に響く。

それからそつと側にあつた封筒を拾い上げ中身を見た。

そこには壊疽者の集合している場所と予測行動、どんな種類の壊疽者がいるのか細かく記されていた。

壊疽者も必死らしく、玉砕覚悟で力を集結させているかのように一箇所に留まっていた。

だが、そこには罠があるのかもしれない。

私はいろんな可能性を予測しながら、任務に気持ちを向けていった。

そつすることで、先ほどの男の言葉を忘れるような気がしたからだ。

数分で資料を読み終えると、すぐに着替えを済まして部屋を出た。

後二時間後には任務開始だ。

ここから目的の場所までは最短で走って一時間か：十分すぎる時間だ。

武器は常に携帯していたから用意する必要もないし、防護服など  
も必要はない。

私は常に身軽だった。

そして私の住処のビルを出ると、早速地上に出る準備を整えよう  
としたが、携帯が突然鳴り響いた。



## 21話

「もしもし…」

私が数回のコールで電話に出ると、電話の向こうからは聞きなれた声が聞こえた。

「み…みゆ」

「何だ…京谷か…私は任務で忙しいからこれからは電話に出れない。終わったら話す」

そう言って切ろうとしたが、その間に京谷は何かを話した。

「無理するなよ…それから…その…えっと…今までありがとう…な」

「え？」

聞き返す間もなく、ぶつんとそのまま電話は切れてしまった。

途切れ途切れの細い声だったので上手く聞き取れなかったが、京谷の身に何かがあるのはその話し方で分かった。

どくん…どくん…

私は今まで軽かった足取りが急に重くなった。

まるで錘でも付けられたかのように両足が動かなくなっていた。  
胸の鼓動も何故か早い。

京谷は…どうかしたのか？

それを考えるだけで妙に不安な気持ちになっていた。

いや…任務が終わってからあいつの様子を見に行っても大丈夫だろう。

そう納得させる自分もいた。

任務開始まで残り時間は二時間を切っていた。

「行くか…」

私の足は地上への出口を目指して歩いているはずだったのに…

何故か京谷の住むビルの方角を向いていた。

あれ？

自分でもよく分からない。

どうして…こんなことになっている？

走る速度はどんどん増していった。

任務のことよりも京谷のことが心配になっていたのだ。

私はそのまま十分走り続けて、京谷の住処の前までたどり着いた。

エレベーターに乗り十階のボタンを押す。

部屋にたどり着くまでの時間がとても長く感じる。

自分の勘違いであればいいが…

そして部屋の前まで来ると、呼び鈴を鳴らした。

誰も出ない。

どういうことだ？

何度も何度も鳴らすが誰も出なかった。

ちくしょう！

私はそこからすぐに立ち去ると、京谷の携帯を鳴らしながら走った。

しかし電話は繋がらない。

何だよ！あいつ…勝手な電話だけよこして、こっちからは繋がらないだなんて…

私は今まであいつに連れて行ってもらった場所に移動した。

公園、植物園、ファーストフード店、などを片っ端から探したが成果が得られなかった。

任務開始まで残り一時間と少し…

私は思い出すかのようにある場所に向かった。

それは、リロイから壊疽者壊滅の作戦を話されたあのビルだ。

あの時京谷はあそこに来ていた。それならば、いる可能性もある  
と思った。

任務開始まで一時間を切ろうとした頃、私は京谷に遂に会うこと  
が出来た。

それは意外にも医療機関の一室だった。

私がこのビルに入り、受付のコンピューターで京谷の名前を検索  
すると、すぐに引っかかった。

政府機関の方だろうと思ったが、予想外にも入院患者として医  
療機関の方にいたのだ。

真っ白い部屋の中心には大量のチューブにつながれている京谷の  
姿があった。

口には呼吸器もつけていた。

「どっぴいっ…ことだ？」

目の前の光景に言葉を失った。ただただ、そのことを受け入れる  
ことだけに必死になっていた。

介護をする人間はここにはいない。

機械が見回り、体の状態も全て機械任せだ。

投薬、治療、手術も全て人工知能が行うのだ。

「京…谷…」

ふらふらと京谷の側まで近づいた。

その目は開かれていなかった。しかし生きてはいた。

いや…生かされているといった方がいい。

おそらくこのチューブを抜けば死んでしまう。

つい一時間前に電話で声を聞いたばかりなのに…

「おい…どづいづことだよ！」

私は京谷に向かって叫んだ。

すると…京谷はすっと目を開いた。



## 22話

「はは…相変わらずでかい声だ」

呼吸器をしながら私に話しかけた。

「あ…」

「悪い…病気のこと…隠していた」

「何で…いきなりこんなことに…」

「不治の病だ。今の医療ではどうにもならないらしい…」

それでも…このチューブを繋いでいれば…一年は…生きられるらしい。

そしてその間にこの病気の治療法が見つかるかもしれない…だそうだ…」

京谷はからからと笑っていたが、心から笑ってなどいなかった。

どこか寂しそうに遠くを見つめていた。

「だけど…俺は…そんな状態で生きていたくないんだ…お前なら分かるだろ？」

そうだ。京谷はそういう人間だ。

自らの保身のために生きながらえたりなどしない。そこに治るといふ希望があったとしてもだ。

自然の死を望んでいる。

「だから…どうしろというんだ？まさか…お前…」

私はそこまで話して全てを察した。

「頼む…この機器を壊してくれ。そうすれば、俺は…死ぬる…  
今は…まだ薬で意識がはっきりしているが…後数時間すれば…  
もう、俺の意識はなくなるだろう。  
そうなれば…俺は、俺ではなくなる」

植物状態になって眠り続けるということなのだろうか？

京谷の命のともし火はすぐそこだということか…

「しかし…」

私は答えを出せずにいた。

生物を殺すという行為は今まで何の躊躇いも持たなかった。

しかし、この男だけは殺したくないかった。

それが本音だ。

だ。  
心があるのかわいには分からない。でも、胸がずきずきと痛むんだ。

「私は…私は…お前を…」



ふるふると指先が震えていた。

ここまで動揺することも今までなかったし、人に対して感情が働くこともなかった。

私は壊れたのか？

あれこれ悩んでいると、京谷はまるで私の心を見透かすかのよう  
に話した。

「みゆ…ご免…君にこんな辛いことを頼むなんて…」

でもね…俺が…俺のままで死ぬには今しかないんだ…それだけは  
…分かって欲しい。

後は…君に任せるよ…俺はそれで満足だ。君が下した決断ならね。  
君という存在に会えただけで…僕の人生は素晴らしいものだった  
のだから…」

「う…」

今思えば、京谷は病気のことをずっと隠していたんだ。

私と会った時にやたらとトイレに行ったり、医療機関に通つてい  
たり…

そこまでして私に何を…教えたかったんだ…

私に何を…

どくん…どくん…

胸が痛い…こんなにも熱く、脈打っている。  
どうして？今までこんなことなかったのに。  
それに…

「あ…」

目から何かが出てきた。

これが…涙か。

この世に生を受けて十数年初めての体験だった。

こんなものが私の体の中にあっただのか。

そんなことすら感じる。

抑えきれない…私の本能のような心の葛藤が…

だからかもしれない。素直な気持ちそのまま言葉になった。

「京谷…死ぬな！死なないでくれ！」

病室に響き渡る位の大声で叫んだ。

私の本心を…私の望みを…

しかしそれが叶うこともないのは分かっていた。でも叫びたかつ

たんだ。

抑圧された自分を解放させるかのように心の底から…

「はは…ありがとうな。もう…それだけで満足だ…俺も…高望みしすぎたのかな…」

有り得もしないお前との未来を…」

京谷はそう言って微笑んでいた。もう十分だ…そういった表情で…

しかし私は納得がいくはずがなかった。

「駄目だ！お前は…」

生きると言いたかった。しかしそれは無理な相談だ。それ以上言葉が出ない。

これしかないのか？

京谷。お前は死ぬことしか…望んでいないのか？

拳をぎゅっと握り締めて、京谷をじっと見た。そして京谷も私から視線を外すことはなかった。

その時間は短いようでいて非常に長く感じられた。

私の思考回路は、『どうする？』この言葉だけが延々と駆け巡っていた。

ここまで決断を迷ったことは今までにない。

私の行動はとても分かりやすかったからだ。

人類の敵は殺す、それだけだったからだ。

人とも一定の距離を置いて付き合っていた。

それが第三の人類の身の置き方でもあったからだ。

人を一個人として見て、話して、接して悩むことなど今までになかった。

だから…私はどうしたらいいんだ？

あるはずも無いと思っていた心がこんなにも疼き、蠢き、体を蝕んでいくようだ。

「頼む…京谷…死なないでくれ」

言つまいと決めていた言葉が何度も口から飛び出した。

それはとても自然に、踏みとどまる意識もないままに声に出していた。

そして京谷の寝ているベッドのシーツを力強く握り締めていた。



## 23話

「俺は…幸せだよ。ここまで好きな人の心を動かせたんだからな」

「…」

「正直言つと…一人で死ぬのは怖かったんだ。

怖くて…怖くて…もがいて、苦しんで…お前の顔しか浮かばなかった。だから電話した。

お前の声が聞ければ十分だと思って…出ないかもしれないけど、出る可能性に賭けてみたんだ」

「それで…私が出た」

「ああ…だからそれだけで俺は満たされたんだ。

しかもお前がここに来てくれるとは、予想外のなにものでもなかったよ。

人つてのは、自らの願いが叶えば欲が出るもんだ…

お前が俺の最後を決めてくれることまで望んでしまった」

京谷は悲しい表情で私を見た。それは自らの罪を認めて私に謝罪しているかのようだった。

「俺は…お前にそんなことさせるために呼んだんじゃないよ…」

だから…俺は…自分で決断するよ…」

「え？どういうこと？」

唐突な出来事で何のことを話しているのか分からなかったが、京

谷はそのまま立て続けに話した。

「この部屋を出て行ってくれ…それで…それで…お別れだ」

その目はとてもよく透き通って見えた。覚悟を決意した目だ。

弱りきった体とは裏腹に京谷の意志だけがそこに宿っていた。

「京谷…」

私は話しかけてみたが、京谷はそれっきり向きを変えて私の方を見なかった。

「く…」

もう何を話しても聞き入れてくれないだろう。そう思った瞬間、私は本能で動いてしまった。

「こつちを見るよ！京谷あ」

自分でもビックリするぐらいの大声を張り上げてしまった。全く無意識の行動だった。

そこに一寸の計算はない。

冷静な自分がここまで取り乱すことは生まれて初めてだった。

「もう…どうしようもないの？これで終わりなの？」

京谷の間近に迫り、無理やり顔を見た。

京谷はそんな私を見ても至って冷静な対処をした。

「仕方がないだろ…これはもうどうしようもないことなんだ…  
お前は黙ってこの部屋を出て行け」

力強い声は私を突き放す。京谷のやるせない気持ちは十分分かった。

それでも、この部屋を出てしまったら、彼は一人で寂しく死を迎えるのだろうか。

だったら…

そんな言葉が頭を過ぎり、私を迷わす一つの決断が浮かんでいた。それはやってもいいことなのだろうか？

善と悪の境目もよく分からない私だったが、  
今自分がしようと考えていることはどちらにも当てはまる行為だ  
と思った。

結末は同じだ。

だったら京谷の望む形をとってやった方がいい。

自分を納得させるように何度も何度も考えた。そして、

「それなら…」



私はすらつと腰に携ええてあつた短剣を抜いた。

「みゆ…お前…」

怪しく光る短剣の刃を目の当たりにして、京谷も察した。

「お前が一人で寂しくこの世を去るのは嫌だ。

それなら、京谷と同じ今、この場所でお前を見届けたい…」

覚悟はもう決めた。そう思ったときに私はまた涙を流していた。

どうしてだろう…次に自分がすることを考えただけで涙が出てしまふ。

視界がぼやけて体も思うように動かない。構えた刃がそこでぴたっと止まってしまった。

「大丈夫だ…俺はお前の事を信じている」

そうか…そうだ。

これは京谷の最後の願い…そして人類の望みだ。

私は折れそうになった心をどうにか持ち直して、京谷に繋がっていたチューブの山を一気に切り落とした。

一振りですべてが終わった。

京谷を生かしていた生命維持装置が機能しなくなった以上、京谷の死は免れない。

そんな京谷の体からは、ゆっくりと死を連想させられることになった。

顔色が次第に悪くなり、呼吸は荒く、激しくなった。

私はぎゅっと彼の手を握った。その手は冷たかった。

血液の循環もままならなくなっているのだろう。私はそれを肌で感じ取った。

京谷は笑っていた。

今までにないくらい笑顔を私に見せた。

「あ……ありがとう……俺は……お前に……出会え……て……ほん……と……う……に……し……あ……わ……せ……だ」

途切れ途切れの言葉のまま最後の言葉を残す前に京谷は静かに息を引き取ってしまった。

まるで寝てしまったかのようにだった。

体温はまだ残っている……肌にだつてつやがある。

嘘だと言いたかったが、これは紛れもない真実。もう認めるしかなかった。

「最後の台詞が……きちんと決まらないのはお前らしいよ」

そんなことを京谷に話しかけて、私は振り返らずにそつと部屋を出た。

涙は未だに溢れている。

もう任務のことなど頭にはなかった。

そんな心配よりも胸が張り裂ける思いでいっぱいだった。

どうしたらこの胸の衝動を押さえられるんだ。

私はむやみに施設の壁を殴りつけた。

何度も何度も…

これで気分が晴れるかどうかは分からなかった。でも殴っていた。

くそ…くそ…くそ…くそ…くそ…

京谷という存在は私の見えないところでどんどん大きくなっていたんだ。

それを私は隠し、誤魔化し、塞ごうとしていた。

それが今は、抑圧された心が解放され、正直な自分の気持ちだけが残っている。

だから泣くんだ…悔しいんだ…怒りをぶつけるんだ。

こんな大事なものが私の中にもあるのを彼は教えてくれた。

どの位時間が経ったのだろうか？それすらも分からなかった。

医療機関内をふらふらと生氣のない状態で歩いていると、遠くからかつかつと靴音が鳴り響いてきた。

## 24話

ここには一般の人間は入らない。政府機関のクラス人間しか出入りできない。

だとすれば、靴音の主は政府関係者だが、私にはどうでもよかった。

そんなことを気にするほど気持ちに余裕がない。

ぼっかりと心に穴が空いてしまった。

靴音はどんどん私のほうに近づき遂には、私の前で止まった。

「おい…」

太い声の主が私に向かって話しかけてきたが、返事はしなかった。

「任務はどうしたんだ？時刻はとっくに過ぎている…」

声の主は先ほど私に任務の封筒をよこした男だった。

あらかじめ監視役として動いていたのだろう。

焦った様子もなければ、探し回った感じもなかった。

「腑抜けたものだな…最強を誇る第三の人類が…まさか人間一人でこんなにも脆く壊れるとは」

私は逆上した。そして次の瞬間にその男を躊躇うことなく殴っていた。

「く……」

男は何も出来ずに後ろにあつた壁にたたきつけられた。

男の唇が切れて口からは血が流れていた。

「貴様：監視役の俺を殴るとは：どうなるか分かっているのか？」

「どうなるというんだ？」

その男の言葉など今の私に何の意味も持たない。最悪、このまま勢いで殺しかねない。

私の自制心は完全に失われていたのだ。

そしてその気迫は男の四肢の動きを封じてしまう程だった。蛇に睨まれた蛙のように男は何も出来なかった。

「命令違反：そして、今は俺まで殺そうとしている。これは重罪だぞ！」

男は力では完全に勝てないことを自覚し説得することを試みた。

「俺とて：第三の人類のなりそこないだが、貴様以上に忠誠心は持っている。」

それなのに完全な人になったお前がそれを破るとは、どういふことか分かっているのか？」

明らかに敵対心丸出しだ。そこには僻みや妬みといった感情も含まれているのは私は分かった。

こいつは、壊疽者にも第三の人類にもならなかった中途半端な生物。

何の能力も持たず、寿命が極端に短いクローン人間だ。

私の監視役としているが、数年後にはその役は変わってしまったているだろう。

「俺は…貴様が憎い。生物として…完成させられたのに…更に自由を得ようとしている」

「自由だと？」

その言葉に私は瞬間的に反応した。

そして熱しきっていた頭も落ち着きを徐々に取り戻していた。

自由という言葉に以前の私なら気にも留めなかっただろう。

しかし…京谷と出会ってしまったことで、その感情は少しずつ芽生えてしまったのだ。

望んでいいのだろうか？

きっかけはそんな小さなものだったが、それは次第に大きくなっていったのだ。

私は禁断の欲を持ってしまったのだ。

「自由まで得て、お前は完全な人間になろうとしているんだ。

創造主を超える気か？忠義を果たさず…」

ぐさりと刺さる言葉だ。

私はこいつに言葉で圧倒されていた。殴ろうとして固めていた拳も自然と力が抜けていた。

すると、男の携帯が前触れもなく鳴った。

誰もいない通路には小さい携帯音も大音量に聞こえた。

「はい…」

男はすぐにその電話に出た。

電話相手は上司に決まっている。私は黙ってその一部始終を見ていた。

男は、話の具体的な内容を口にすることなく、相槌を打っているだけのようだった。

しかしその表情は酷く険しかった。

数分で電話を終えると、男はため息を大きくついた。

「最悪だ…」



話の内容を知らない私は何のことだか分からなかった。

「壊疽者が壊滅寸前に自爆。大量分裂したらしい…」

壊疽者を蝕んでいたウィルスが反転の効果をもたらしたのだ。

奴らの体を侵食していくのと同時に生き残っていた者たちに新たな恩恵を与えた…

それが本体の大量分裂。数十人しかいなかった奴らが、大爆発と共に何万にも増殖した」

「それなら…」

「奴らは最初の数倍に膨れ上がった。爆発に巻き込まれたお前らの仲間の命と引き換えにな」

私はその場にいないのでいまちぴんとこなかった。

しかし男は私をそのまま責めた。

「お前のせいでもあるんだぞ？」

「え？」

「お前が作戦の中に存在しなかったことで、初動が大幅に遅れたのだ。」

しかもチームの連携も全くなっていなかったそうだ。

もつと速く奴らを仕留められれば余すことなく壊滅させられたそうだ…

無意味に与えた時間が奴らの大量分裂に拍車をかけた…これを…貴様のせいではないと言えるか？」

今までとは逆に男が私に詰め寄ってきた。

当然私は何も言い返せない。それは紛れもない事実だ。

「上の人間は…お前を直ちに査問会議にかけるようだ…

だから、お前はそのままセウロ様の所へ向かえ…」

そう話すと、男は私の前からどいて道を開いた。

私は何も考えられなかった。

一度に大きな出来事が次々と災いのように降り注ぎ、現実に戻る  
ことができていなかった。

足は進んでいたが、自らの意思ではないような気もした。

出口に向かって歩き続けていると、後ろから男の声が聞こえた。

「おい…お前と会えるのはこれが最後だから言うておく。貴様は…  
最低だ！」

そんな刺さるような言葉も今の私には何も響かない。無言のまま  
歩き続けていた。

しかしあの男は、きっと寿命が迫っているのだろう。最後の言葉  
と言ってもいい。

鬼気迫るものだけは感じ取った。



## 25話

「さて…話を聞かせてもらおうか？」

セウロを始めとする五人のお偉いさんは、強張った表情で私を見ていた。

その場所には憎しみしか存在しない。

私は拘束具を付けられて、ここの場所に立っていた。

反乱者と思われても仕方のない行動をとったのだから。

「貴様が与えた影響がどれほどのものか分かっているのか？  
有能な第三の人類を四人も失い。そして…壊疽者が数万に膨れ上が  
ったんだぞ？」

「任務の話は事前に通しておいたはずだ。そこに不備はない。  
だとしたらお前自身の問題としか考えられない。

お前の監視役の男からの報告では、椿京谷…彼が原因らしな」

今まで人形のようにただ立っているだけの私は、京谷の名前で微かに反応することができた。

「椿京谷…最後の人類か」

「彼は先天性の病を患っていた。しかし後数十年すれば、それも解明されるかもしれない。

だから、仮死状態になることを進めたのにそれを断り続けたのだ

…」

「それで、その彼がどうして原因になったのだ？」

男達がみゆをそっちのけで話していた。

「あいつは、自らの最後の立会人にシックスを選んだんだ。自分を  
見取って欲しくてな」

「それなら…シックスは、それを断らなかったということか？」

「そういうことだ。彼の病室へ行き、作戦の時間になっても現れな  
かったのだ」

その場は静まり返った。

事実を知っていたセウロは、知らなかった四人の男に向かって事  
の一部始終を詳しく説明した。

それによって、他の四人は信じられないといった様子だった。

「お前は…感情がないはずだ。

生まれてからずっと任務に忠実に従い、そこに一切の迷いは存在  
しなかった。

それが…一人の人間によって壊されたのか？」

「シックスもシックスだが、その京谷も京谷だ。

仮死状態を選ばなかったのなら、死は必然だろうが！

そこにこいつを巻き込むなど、人類の恥だ！死ぬなら黙って死ぬ  
べきだったな」

一人の男が死んだ京谷に責任転嫁をするように攻め立てた。

「今…なんと…」

私はぼそつと口を開いた。

「何だと？」

男は私を睨みながら、虫けらでも踏み潰すかの勢いですごんだ。

まるで身動きも取れないくせに、粹がっているんじゃないと言わんばかりだった。

しかしそんな彼以上に私の怒りは頂点に達していたのだ。

京谷の生き方そのものを馬鹿にしたのだ。

あんなに人間らしく散ろつとしていた誇り高い人間を。

「今、何て言ったあ！」

バアン！

鉄製の拘束具は四方に思い切り弾けとんだ。

叫ぶのと同時に私は京谷を馬鹿にしたその男に触れられる数センチ側まで移動していた。

頭を掴んで思い切り殴りつけてやる。

そう思うのが早いか、私の体はその男と対極に弾け飛んだ。

「う…」

数センチ先まで迫っていた自らの死に、男の体からは恐怖がしばらく抜けなかった。

一方、私は体が痺れて身動きが取れなかった。

高圧電流が体中を流れたのだろう。全ての運動機能が麻痺してびくびくと痙攣していた。

「生みの親にここまで歯向かうとはな」

セウロが高いところから見下していた。

私は言葉を発することも出来ずに、地面をのた打ち回っていた。

「我々には外敵から身を守るために簡単な結界が張ってある。

お前ぐらいのものだよ。この結界を使うことになったのは…

さて、こいつをどうしたものか…」

他の四人の顔を見てその意見を聞こうとした。

「廃棄処分にするのは容易なことではない。こいつには不死の力が宿っている…」

それに壊疽者の仲間にもなられたら厄介だぞ？」

「それならどうしたら…」

「記憶を奪っては？」

「奪うだけなら簡単だが、それだけでは…」

「なら従順になるように制御を与えよう。強制力って奴をな…」

「なるほど、それは名案だ」

それぞれが勝手な意見を並べて、それに賛同していた。

そしてリロイがその提言をまとめるかのように、

「それならこいつは、京谷と過ごした記憶を奪って強制力を与える  
としよう…」

二度と我々の命令に背かないように」

死刑宣告をするかのように話した。

嘘だろ…

私と…京谷の過ごした記憶が奪われるのか？

言葉を発することのできない状態の私は口をばくばくとすること  
しかできなかった。

「壊疽者を壊滅させるまで、お前の強制力は解けないようにしてや  
る」



殴ろうとしていた男が嬉しそうに私の顔を覗き込んだ。

くそ…まるで体が動かない。

頭は、はっきりしているのに…

「早速始める。もはや我々にも一刻の猶予がないんだ…」

リロイが奥に向かって声をかけると、がらがらストレッチャーを運ぶ白衣の人物が二人やってきた。

それから私はそのまま研究所に連れていかれた。

麻酔で眠らされ彼らの話した行為そのものを体に植えつけられたのだ。

## 26話

みゆは自らの過去をついさっきの出来事のように話して、憂鬱な表情を見せた。

そこには、人間らしい彼女の姿があった。

今までは人間とはどこかが違うというのは、肌で感じていた。

雰囲気やら、言動、そして戦い方…だが、過去を話す彼女の姿は一人の女性そのものだった。

それにしても悲しい話だ。

みゆは、道具として利用されているだけで、そこに本人の意思など存在しない。

俺は怒りを感じていた。

「それで、強制力を与えられたのか。壊疽者を全て殺すという途方もない無謀な…」

それは先の見えない行為だと思った。ゴールが見えるのはいつなのだろうか。

「私が原因で、あれから全ての第三の人類には強制力を与えられた。私と同じように壊疽者を殺すものだったり、人間を守るものだったり…」

だから、私は同士の自由をも奪ってしまったのだ。

恨まれる存在になってしまっても仕方がないことだ……  
だから……こんな物で自分だけ自由になることなんてできない！」

みゆはセウロに渡されたカプセルを地面に捨てると、思い切り踏みつけた。

「あ……」

俺は何もすることができずに、ただ声を上げるだけだった。

「私が……この世界の平和を乱した……」

それは事実だ。それを捻じ曲げようとしても無理なことだった。

だが、俺はみゆが人間になるきっかけの出来事だとも思っていた。

それを多めに見るなどとは言えない。しかし考慮はして欲しかった。

完全な人ではない第三の人類。

そこには感情というものが存在しないから、京谷という男は人類に未来がないとも思っただのかもしれない。

そしてみゆはその感情を開花させる資質があったのだ。

俺は育った環境のお陰で人と同じ感情を得ることができた。みゆは京谷のお陰で感情を得ることができた。

原因は環境なのだ。

それを研究体としか見ない研究員からすれば不要なもので、怖い存在なのだ。

そこから分かるのは、自分の思い通りに動かしたい。それだけなのだ。

ここまでの話を聞いて、俺は半ば呆れてもいたが、分からないことが一つあった。

それはみゆの記憶の事だ。

彼女が話した内容には記憶を奪われる出来事もあった。京谷と過ごした記憶がないはずなのに、俺に話して聞かせていた。

「みゆ…話は変わるが、記憶は戻っているのか？お前は奪われた話をしていたが…」

みゆもそのことを話さなくてはと思ったのだろう。俺が聞くと、すぐに答えてくれた。

「すまない…実は門を潜り戻った時にはつきりと思い出したのだ」

「ここに戻った時に？」

「ああ…今までは断片的にだが、映像のように私の頭を駆け巡っていたんだ。

唯一心の奥底に残っていたのは京谷の付けてくれた名前だけだ。そしてお前との出会いがそれに拍車をかけた」

「俺が？」

「きつと…この世界の住人とあつたのがきつかけだつたのかもかもしれない。」

三条織斗との一件から思い出す感覚が短くなっていたんだ。

ぼやけていた映像は次第にはつきりと…

そして私の心情までもが曝け出されるかのように少しずつ剥がされていった。

でも、私には夢のような出来事にしか感じられず、信じられなかった。

それが本当に自分の身に起こっていた出来事なのかどうか…」

自信がなかったのだろう。曖昧な記憶が断片的に頭を過ぎっているのだから。

「だけど…この世界に戻った時に確信したんだな？」

俺は代弁するかのように話したが、みゆはそれを否定しなかった。

「そうだ…だから、私は新たな枷を自らに課すような思いだった」

「枷だと？」

「考えても見る。同士は私のせいで自由を奪われ、従順にこの世界を守っていたんだ。」

その間、当事者の私はまるで無関係のようにあの世界にいた。

これで何事もないかのようにこの世界の住人に顔を合わせられるか？

私にはできないんだよ…だから、何を言われても絶対にそれを受け止めようと思った」

なるほど…だから言われるがままで大人しかったのか。

しかし複雑だ。俺自身も元々はここの住人だから他人事ではないのだ。

だとしてもみゆが一人で背負い込むのはどうにも納得できなかった。

「俺が言うのは何だが、終わってしまったことは仕方がないだろう。それをずっと思い悩んで、引きずっていても先は見えない。」

俺は、お前の行動は正しかったと思っっているよ。確かにそこには犠牲になった人もいたかもしれない。

だけど…お前がその場にいなかったからといって全てをお前のせいにするのはおかしいだろ！

本当の仲間なら、いない者の分もカバーする、そしていないことに対して責めることもしない。

そう俺は思う…だから、奴らはお前のことを物としか見ていないんだ。

責任をお前に全て擦り付けて、自らの失敗をなかったことにしている」

俺はみゆを擁護する言葉を並べ立てた。それは本心からだ。

一連の話を聞いていて無性に腹が立ったのは事実だ。

セウロは所詮はアルタイルと同じだ。人のためではない。自分のために動いているんだ。

「俺は…京谷と同じ考えだ。もしも…自分が同じ状況なら、きっと

お前に電話をするだろうな」

「え？」

「人ってさ…単純なものじゃないんだよ。

計算で導き出されるようにその通りの行動をすることはない。

だって、そこに計算では量ることのできない感情というものがあるのだから…

それが、人間なんだ。俺から言わせれば、京谷を一人でひっそりと置いておく状況が理解できない…

彼は、寂しくて寂しくて仕方がなかったんだ。頭では分かっているけど心では理解できない。

だからお前に電話をした。もどかしさ、後悔それらを払拭するかのようにな…」

「しかし…私は…」

「それを受け止めてくれたお前を俺は尊敬するよ。例え、他人に恨まれようと…俺はお前を認めるよ」

「海…」

「悪いな、こんな陳腐な言葉しか言えなくて。でもさ、これは本心だ。

お前は人の心を取り戻したいって今までずっと思っていたんだろうが、実はもう手に入れていたんだ。

それが何よりも嬉しい。だから…先に進もう」

「先に？」

「それが、京谷の望みでもある。この世界の本来あるべき姿に戻すんだ。そしてお前も俺も…」

みゆは何て返していいのか分からずに、ただ黙っていた。

その気持ちも汲んでいたの、俺はそれ以上何も言わなかった。

しかし無言の中でもお互いにこれから先への進む道が自然と決まっていたのは確かだった。

椿京谷…彼がいなかったら、きっとみゆは救われない存在になっていたんだろう。

無感情にただ任務をこなすだけの操り人形に…

俺たちの世界に来た時には彼女は既に感情があった。それをみゆが気がつかなかったただけだ。

それに俺も同じ存在なのにこんなにも感情豊に育っている。それは親父に感謝しなくてはならない。

さて、これからの行動だが、残り二つの門を元に戻せば全ての準備が整うが、そんな簡単にいかないだろう。

やはり壊疽者の動向が気になる…

どんどん能力を高め、成長している。

気難しい表情を試みたが、何も良い案が浮かぶことはなかった。



「まあ…今すぐ考えてもすぐに思い浮かぶはずないしな、とりあえずここを出よう。」

どいつもどいつもこの空気は俺には合わない…」

そのままみゆを連れて地上に出ることを望んだ。

## 27話

六カ月後

状況は芳しくなかった。

俺がこの世界に入り込んでから、もう一年と二ヶ月を迎えようとしていたが、最後の門を閉じることができなかった。

その理由は壊疽者が門を中心に防衛の陣を組むようになったからだ。

その突破は容易ではない。二度ほど門の付近まで足を運んだが、その度に黙って帰るしかなかった。

三重に渡る布陣の配置と結界。これが厄介だった。

総勢千人を超える壊疽者がしつかりと持ち場を守りつつ、簡易な結界までも張っていた。

そこまでいくと、目的が分からなかった。

あいつらが何がしたいのか…

人間を困らせるためにそうしているのか、それとも最後の門で何かをしようとしているのか…さっぱりだった。

俺らは何とあえず様子を伺いつつ、その状況を把握して作戦を何度も考えた。

「あいつらは、何を企んでいるんだ？俺にはさっぱり分からない」  
みゆに愚痴のようにこぼしたが、みゆも同感だった。

「人間との戦いをここで決着をつける気なのかもしれない…」

「それなら、地下に攻めてくればいいじゃないか。まるで、じらし  
ているかのようにも思える…」

俺らを誘い出すように」

実際にセウロも先に進まない状況に苛立ちを覚えていた。

何度か付け入る隙はあったが、強固な守りは崩壊にまでは及ばな  
い。

これが二度もあれば歯がゆい気持ちも分からなくもない。

自身の望みが叶う一歩手前でそれが叶わないのだから…

そんな半年にも及ぶ行為にセウロは遂に腹をくくった。

第三の人類を全て呼び集めたのだ。

この世界に存在する第三の人類はみゆと俺を含めて残り七人だっ  
た。

しかし一緒に行動することはない。それぞれの役割を果たしてい  
たからだ。

防護、詮索、攻撃と…

俺らは蚊帳の外だ。

しかしそれらを全て終結させ、最後の戦いにしようかと決断した。

だから俺たちは再びあの地下の楽園へと足を運ぶ事になった。

「良く来たな…」

心にも無いことをセウロは話した。

俺たちが例の教会の大聖堂に到着した頃には、他のメンバーは集まっていた。

それぞれが俺たちの事を憎いといった眼差しで見ている。

これはこれで、結構堪えるな…

セウロは明らかに意志の疎通が上手くいっていない状況を見ていたが何も言わずに本題に入った。

「全員が揃ったから始めるぞ」

その言葉を聞いても誰もはい、とは返事をしなかった。

しかしセウロはお構いなしに話を続けた。

「世界は今、決断の時に迫られている。

それは最後の門を元の形に戻し、人類の新たなる形を取るべき時  
ということだ…」

みゆと海のことはお前らも知っているとと思うが、今は仲たがいを  
している状況ではない」

「そんな言葉を軽々しく口にしないで欲しいものだ…」

以前俺とみゆの前で壊疽者を簡単に葬り去ったあの男が、セウロ  
に向かって意見した。

「俺は、こいつらを認めていないし、大嫌いだ」

はっきりと言う奴だ。

俺はその言葉にいちいち食いつくわけにもいかないで流して聞  
いていた。

「こいつらとチームを組んで作戦をしたとしても、絶対にかき乱さ  
れるに決まっている。

なあ、シックス…お前がそれを一番良く分かっているはずだろ？」

俺はその言葉だけは許せなかった。

だから身を乗り出して否定しようとしたが、その前にみゆにそれ  
を阻まれた。

「ああ…分かっている。私自身それは否定のしようがない。

「だがな…済んだことはしょうがないだろ？」

みゆは以前のように過去のことを後悔していなかった。それを認めて、自分の体の一部にしてしまったような感じだ。

俺はそのみゆの懽然とした態度を見て、安心した。

「お前な…あの出来事をそんな軽々しく…」

男が逆に激怒して掴みかかろうとしたが、セウロがそれを制止した。

「止める！」

迫力のある言葉にぴたりと一同の動きが止まった。

「イレブン…貴様はいつまで過去のことをねちねちと話している。我々は先を見なくてはならないんだぞ？それとも私に楯突く気なのか？」

その気迫といったらすさまじいものだった。七十は超えている老人の体が数倍にも見えてしまうほどに。

「す…すいません」

男も黙って謝罪した。

「いいか…今、お前達に自由を与える。これで今までの強制力はなくなる。

そこでだ、防衛に回っていた者も詮索活動をしていたものもみんなで力を合わせて最後の砦を壊すのだ。

第三の人類の力を持ってすれば、この七人で一蹴できるはずだ」

今までにない提案だった。

それぞれが強制的な個々の活動をしていたのに、それを取り除いたのだ。

しかも自由になるというおまけつきで…

「このカプセルを飲めば、お前らの強制力は消える…」

セウロは懐から取り出した、あのみゆに渡したものと同じカプセル

ルをそれぞれの手に渡した。

ちっばけなカプセルを眺めてそれぞれが、本当に効果があるのかと、首をかしげていた。

「自由にはなれる…だが、分かっているだろうか？」

お前らが我々を裏切ったらどういう末路を迎えるのか…」

セウロは釘を刺した。

第三の人類が自由を手に入れ、好き勝手なことをしないようにと。

「当たり前だ：俺はそいつとは違う。生みの親であるあなた方に逆らう気など毛頭ない。」

我々は、あくまであなた方の代行者なのですから…」

先ほど一括された男は機嫌を直して、セウロにそう話した。

しかし相変わらず嫌味な奴だ。

みゆのことを引き合いに出しやがって…

そして他の連中もそれは当然だと話した。

「作戦の指揮官は、海…お前がやれ、そいつらをきっちりまとめ、最後の砦を破壊しろ。」

そして私に時の雫をもたらせ」

最後まで命令口調かよ…



俺はあまりやる気のない返事をして、その場のメンバーの顔を見た。

知っている顔は二人。

俺とみゆが都市部で機械化した壞疽者と遭遇した時にいたあの二人。

残りは、きりつとした顔立ちの背の高い女が一人と、

目が開いているんだか、開いていないんだか分からない切れ目の男と、美少年系の男だ。

会話を全くしていないので、どんな性格かも予想がつかない。

「お前は鋭い洞察力も兼ね備えているんだろ？それなら難しいことではあるまい」

簡単に言ってくれる。

人間関係も上手くいっていないのに、無理な注文だ。

「セウロ：時の雫は確かに元の姿に戻す。だが、以前の約束忘れていないだろうな？」

確認の意味で再度聞くことにした。

それが、俺にとっては重要なことだからだ。

「ああ…全人類の相違で決めるという話だな。

それは任せておけ…お前がそれを手にしたときに、全人類を集め

て答えを聞かせてやる。

それが一番分かりやすく、不正がないだろ？」

「ああ…それなら、いい」

俺は聞いたかった答えを聞くと、そのまま第三の人類達の前に立った。

初めて顔を合わす奴らの前で、リーダーシップをとるのは難しい。

それぞれの顔を見ても俺の事を快くなど思っていない。

しかしここで引き下がるわけにもいかない。だから俺はみゆと同じように自らを貫き通し、迷うことを止めた。

「じゃあ、俺たちは俺たちの仕事をするでしょう…一時間後にミーティングだ。外の公園でやる」

はつきりとそこまで話したが、返事の一言もないままに、それぞれが何も話すことなく教会を出て行き、

俺とみゆだけがその場に残った。

やっぱりこうなるよな…

ある程度のことは予想していたが、完全なまでの拒絶を見せられると俺も流石に落ち込む。

それから誤魔化しているのか、心機一転させているのか自分でも分からなかったが、みゆに話しかけた。

「みゆ…例のカプセルのことだが…」

俺はみゆが以前にもらったカプセルを破棄したのを思い出し、セウロにもう一度もらうように考えていた。

しかしみゆはそれを承諾しなかった。

「いらない」

「どうして？今なら…あいつらと同等の条件じゃないか。いつまでも背負い込むな」

「海が頼むことでも駄目なものは駄目だ。これは私の意思だから…」

「頑固だな…」

「う…うるさい」

「それなら、いつお前は自由を望む？」

俺の要求を断るみゆの本心を聞きたかった。すると、俺の目を真っ直ぐに見て話した。

「全てが終わったら…時の雫の結末をお前がどうするのか見届けてから…」

それは揺ぎ無い信念といった感じだ。しかし俺は賛同できなかった。

「おいおい…その頃にはセウロがカプセルもっているか分かんない

だろ？今の内にもらっておけよ」

「駄目：あると思っていれば、それが逃げにも繋がる。もしもその時になかったらなくてもいい。

きつと海がなんとかしてくれるから…」

「随分な言葉だな」

みゆらしくない発言に俺は戸惑ってしまい。妙に恥ずかしくもな  
った。

そして一時間後のミーティングの時間が来た。

「まずは、自己紹介から始めよう」

開口一番はこれと決めていた。

そうしなければお互い何も分からない。しかし全員の目は冷やかだった。

俺のことをまるで認めていない。

はいはい…わかっていることですよ。

俺も納得してはいたものこのこまで露骨だと苛立ちも募る。

「じゃあ、まずは俺からだな。

俺は…月夜海だ…その…ナンバーは恐らくゼロだ。門の向こうの世界で育てられたから、この記憶がほとんどない。

でも…ここに来て一年以上が過ぎている。それなりにこの事も分かってはいるつもりだ」

自分から何か話さなくてはと思い、咄嗟にこんな端的に自らの説明をしたが、食いつきは悪かった。

寧ろ怒らせた。

例の男だ。

「ふざけんなよ！お前がいなくなったせいで、どれだけ俺らが尻拭

いをしたのか分かってるのか？

お前はのんきに向こうの世界で暮らしていたかもしれないが……俺らは必死だったんだよ。

毎日が戦場だからな。お前みたいなのほんとした野郎がリーダーになるのも俺には理解できないしな！

それにこの世界を分かった風に話していることが一番ムカつくんだよ！」

言いたい放題だが、俺も反論した。

「なら、どうすればいい？」

逆に意見を求めた。

すると男はシンプルな答えを出した。

「俺らの中で実力が一番上だというなら話が早いだろ？」

だから……俺ら一人ひとりと組み手をしろよ。全員を納得させられる力を持っているのなら認めてやるよ。

じゃなきゃ、お前がリーダーってのは、なしだ」

「セウロの命令を無視するのか？」

「作戦を実行すれば問題ないだろ？誰が指揮官をしたって結果が出せれば同じだ」

それも一理ある。

今の状況を変えるためにも俺はこんな無理な要求を呑まなければならぬ。

「分かったよ。なら、誰からやるんだ？」

気を抜いてしまった状態でそんな一言を口にしたのはまずかった。脳裏を瞬間的に映像が過ぎる。

その数秒後に俺の背後から鋭い蹴りが飛んできた。

「う…」

未来を見ていなければ確実に直撃コースだ。

その蹴りは空気を斬る音すらする。直撃していたことを考えるとぞっとする。

俺はその蹴りを放った主を見た。

やはりあの男か…

この議題の発案者。

その動きは目にも映らないほどの速さだった。

例えるなら雷とでも言うべきか…閃光のごとく地面を走りぬける速さが、そいつの武器だった。

俺の先読みの能力も体が追いつかなければ意味が無い。

以前の俺なら身体能力が追いつかずに確実に能力を持て余してい

るだろう。

だが、今は違う。

この一年と数ヶ月で俺の身体能力は格段に跳ね上がった。戦いながらも学んでいたのだ。

親父やアルタイルの動きはとても参考になった。

無駄な動きをせずに、最小限の動き、相手の攻撃を肌で感じほどの繊細さ、攻撃の時に与える瞬発力。それを俺は全て見てきた。

今ならできるはずだ。俺にも同じ動きが。

そう信じて、先読みをすることはせずに、肌で相手の動きを感じ取った。

頭で考えていると、動きは鈍ってしまふ。本能に任せた自然な動きにこそ無駄な力が省かれる。

闘争において、頭を使うことは大事だ。しかし…それは人同士にしか使えない。

人を超えるものがいたのなら、本能を使うしかないのだ。自らの五感を研ぎ澄まし、無心で…肌で…細胞で感じるしかない。

だから俺は感じ取った。

相手の秒速を更に上回る攻撃を…





### 30話

ぎりぎりの所で鋭い暫撃をかわし、体勢を整えた。

一回…三回…

ここまでかわせればこれはまぐれではない。

それは相手も感じ取っていたはずだ。

何も考えないで完全な自然体を持つていけると自分の身体能力もここまで跳ね上がるのだな。

そんなことも考えながら、反撃のチャンスを伺った。

そしてそれは六回目の攻撃に僅かな違和感を感じたことから実現した。

寸分変わらない無駄のない動きに微かな動揺が生じたのかもしれない。

流れるような今までの動きに硬さが出てしまったのだ。

びくり…

俺の体はその僅かな一瞬に反応していた。

空いた間を利用して最短距離で体を思い切りぶつけた。

その瞬間にすさまじいほどの衝撃波が体を駆け抜けた。

相手の攻撃の衝撃力がそのまま相手の体に俺の力を加えて返っていった。

いわゆる合気というものだ。

中国の八極拳にも似た形だったが、相手はその衝撃力を証明するかのように紙くずのように宙を舞っていた。

軽く五メートルは飛んでいた。そしてそのまま受身も取れないまま鈍い音と共に体を硬い地面にぶつけて転がった。

見ていた奴らも啞然としていた。

まさか…そんな…そういうった表情だった。誰もが、あの男の能力の方が上だと思っていたからだ。

その考えは間違いではない。俺とあの男との差はさほどない。

一瞬の隙を突けなければ俺にも勝機などなかった。

もしもあのままミスのない攻撃をしたなら、俺はきつと圧力で押し負けていただろう。

所詮、実力が同じなら根競べということなのだ。

あいつはなかなか立ち上がってこなかった。

俺は黙ってその様子を見てみると、あいつはゆっくりと起き上が

ってきた。

そこに闘気はなかった。

すぐに襲い掛かってくるものだと言っていたが、それもなかったのだ。

そしてゆっくりと俺の前まで歩いてくると、

「もう…十分だ」

その一言で全てを片付けた。

こいつは俺の一撃で悟ったのだ。

このまま戦いを続けても無意味だということ。

俺は、それはそれで嬉しかった。これ以上無益な戦いは避けたかったのだから。

「それは…負けを認めるといふことか？」

俺は確認したが、それを覆すことはなかった。

「ああ…お前の実力は分かった。俺が見誤ったよ。まさか…ここまでやれるとはな」

認められることは嬉しかったが、無性に恥ずかしい気持ちで一杯だった。

気高い気質のあいつがそんなことを口にするとは夢にも思っていなかったからだ。

「初めて対峙した時に、こんな男が希望の子どもだと知った時は愕然とした。

まさか、こんな奴がこの世界の希望なのかとな…怒りが湧き上がった…」

それは俺も分かる。

俺はそんな器ではないことを自分自身が重々承知していた。

「話で聞いているだけでは実感が湧かないからな…」

でもな、今、自らの攻撃をぶつけてみて分かったこともある」

「え？」

「俺らに無いものを持っているってことだ。認めたくはないがな…」

この負けず嫌いめ…

一瞬でもこいつに同情してしまった俺は馬鹿だなと反省してしまった。

「お前の持つ能力はよく分からないが…人間のものと近い気がする。繊細で、柔軟、動物本来の自然の力をフルに活用している。俺らにはないものだ。

それを兼ね備えて更に能力を持っているのだとしたら…」

それから先は言わなくても分かる。

俺はこいつらにとって脅威の存在ということだ。

第三の人類でありながら人間という生物本来の能力も持っているから。

向こうでの世界が長かったせいかもしれないが、それも親父の影響が大きかったからだろう。

第三の人類はみゆを見ていけば分かるが、生物としての動きではなく、機械的な動きしかできない。

それは、根強い主従関係と同じ動きでの訓練の繰り返しが生んだ結果だ。

この世界に自然のものは全くと言って存在しない。

だからそれと触れ合う機会のなかった彼らは自然の動きを見に付けられなかったのだ。

「なら…これ以上の組み手は必要ないと言うことか？」

俺ははっきりとした返答を求めたかった。

ここで曖昧な返事はしてもらいたくなかったからだ。

そうすることで、指揮力を高めることにも繋がるのだから。

「…そういうことになる。見ていたこいつらが判断して、良いと言  
うのならな」

さつと後ろを振り返って、ギャラリーを見る。

するとそこにいた全員が納得していた様子で、反論の弁をする者はいなかった。

俺と彼とのやりとりはそれだけ意味のあるものだったのだ。

無駄な争いは避けたかったので、俺もみゆもほっと胸を撫で下ろした。

「それなら自己紹介から始めよう」

そして中途半端だった自己紹介を再開することになった。

### 31話

全員の自己紹介が終わると、俺は俺なりにそれぞれの特徴を頭の中で整理した。

それぞれに名前はなかった。

みゆや俺が名前を持たなかった時と同様にナンバーで呼ばれていた。

イレブン、サーティ、フィフティワン、セブンティーエイト、ナインティーシックスと繋がらない穴だらけの数字だった。

それは、成長過程で第三の人類になれなかった者たちがいたからである。

完全なる第三の人類が出来上がる確率は十分の一だった。

その研究は、一期、二期、三期と行われ、完全なる第三の人類が生まれたのは最後の第三期だった。

失敗した生物の数は数え切れないほどで、今までの話で分かると思うが、その数だけの壊疽者の数が生まれたということだ。

しかし俺たちだけが名前をもらって他の奴らがナンバーとは、理不尽な感じもするし、親近感がわかない。

だから、あえて名前を付けたかった。



その意志を伝えると、意味が分からないと言われた。

「そこに何の意味があるんだ？」

全員がそんな様子だ。

「作戦を実行するのにお前らの名前は呼びづらい。

まあ…作戦上の名前だと思ってくれればいいんだが…」

お互いに顔を見合わせどうすればいいのか、考えていた。

「海だったか…お前に任せる。作戦を仕切るのはお前でいいと決めたんだ。好きなようにすればいいさ」

全てを俺に任せてくれるようなので、ありがたいと思いつつ、彼らの名前というか愛称を考えることにした。

そして良い考えがふと浮かび、それぞれの名前を口にするにしました。

「それなら…お前がレイブン。それであんたがサティ…ティワンとセブエイとナックスでどうだ？」

「どうしてそんな名前に？」

どこからそんな名前を考えたのだろうと思ったのだろう。例の男が話しかけた。

「お前らのナンバーを短縮したりひっくり返したりして、短くしてみた…嫌か？」

「いや…それでいい。なら、これからの作戦だが、具体的にどうする？」

「そのことだが…流石に急には決められない。だから、時間をくれないか？」

お前達の個々の能力や性格等を分析したいからな。作戦に必要なのはチームワークだ。

何も知らない状態でいきなり机上の作戦を提示したとしても失敗する確率が高いからな」

「もつともだな。それならどれだけの時間が必要だ？」

「そうだな…最低一ヶ月くれ。その間にそれぞれの能力を分析して、見合った作戦を考えてみる」

「いいだろう。なら、一時解散ということでもいいか？」

「ああ…連絡は、電話でする」

簡潔に今後の予定を話すと、それぞれが自らの場所に帰った。

そしてまた俺とみゆだけその場に残っていた。

「すっかり、たくましくなったな…」

みゆが俺を見てそう話した。

「そうか？」

「ああ…私が思ったとおりだ」

照れくさいことを言ってくれる。しかしみゆはいつも俺のことを信じていた。

俺ならできると…

しかしそれが俺の自信に繋がったのは言うまでもない。

過去の経験が自らの肉体と精神を強くし、弱い自分を捨て去った。

世界を変えろということとはものすごいことだ。しかし俺にはそんなことができる器だと自分では思っていない。

しかし自らにできることを最大限に後悔することなくやるだけだ。

例え…失敗しても…

完全な人間など存在しないんだ。

逃げ口上を用意しているかのように嫌だったが、そう思ったかった。

「がんばろう…」

思い浮かぶのはその言葉だけだったが、みゆは待っていましたとばかりに頷いてくれた。



## 32話

一カ月後

世界の現状はそう大きく変わることはなかった。

壊疽者は相変わらず最後の門を中心に皆をかまえている。動かす焦らず、じつと…

都市部の街にも襲撃に来ることはなかった。

だから余計に不気味だった。

俺たちとはというと…それぞれの能力の分析が終わり、具体的な作戦を立てられる所までいっていた。

最初に会った男で、よくしゃべるレイブン。彼はあらゆる物理を破壊する能力を持っている。

典型的な攻撃型だ。

そして最初に会ったもう一人の男、ティワン。彼は見るだけで相手の動きを止められる。

後衛に回ってもらおうとするか…

唯一の女性サティ。彼女は物理的攻撃を完全防御できたり、結果を張り巡らしたり、打ち崩す能力を持っている。

範囲もかなりの広範囲だから前衛、後衛で使える。

セブエイは千里眼を持ち、ナックスは回復を中心とした治癒の能力を持っていた。

みゆと俺は超高速再生能力を持っているが、他のメンバーはそれがなかった。

つまり不死の力は持つておらず、不老の力だけが体に宿っているようだった。

それだけ時の雫の欠片は何が起こるか分からない能力をそれぞれに与えたのだ。

一ヶ月の間に何度も仮想の作戦を立てて、動いてみたり、仲間同士で組み手もしたりした。

個々の能力は高く、劣るものは存在しなかったが、みゆ同様に何の能力も持たないナックスだけが少し気がかりだった。

攻撃に回すか、守りに回すか…悩んでいた。

そして一ヶ月を超えて二週間が経った時に作戦は実行されることになった。

俺がこの世界に来て、一年半が経った頃だ。

全員に再確認をして、セウロの待つ大聖堂へと向かった。

「それでは、報告してもらおうか。今までの成果をな…」

偉そうな態度は健在だ。

俺は全員の先頭に立って、作戦の話をした。

「壊疽者があの門を守っているのは、全部で三千。三層に及ぶ布陣でそこを固めている。

典型的な攻撃方法で、遠距離攻撃の組、近接戦闘の組、中間の距離での戦闘の組に分かれている。

その具体的な攻撃方法は分からないが、ある程度の予測は出来ている…」

俺らの能力を考えれば、制圧にそう時間は掛からないだろう。

全ての可能性を予測して数通りの作戦を考えているがそれも全て話したほうがいいのか？」

「いや…そこまで相手の事を把握しているならこれ以上の詮索は控えておこう。

しかし…今回は壊疽者を一層することも目的の中に含まれている。門の場所に集結しているというのなら、一匹も逃してはならない。そのことは分かっているだろうな？」

「勿論だ…全てを時の雫に返すためにそれは、最低限のことだ。

俺たちがあの場所に踏み込んだ瞬間に結界を張る。誰も出れないようにな…」

「そんな閉塞的な空間でもしも、以前のような自滅にも似た大爆発

をしたらお前らの命はないのだぞ？」

「それも考慮している……」

俺はあらゆる可能性を追求してきた。以前の壊疽者が大爆発したことも念頭に置いてはいた。

絶対にそんな状態にはさせない。

その前に俺が時の雫の欠片の武器で全てを葬り去る。

セウロは全員の、気持ちが集まってきたことを雰囲気察しているらしく、これ以上無駄なことは聞かなかった。

「それでは、諸君の検討を祈ろう。自由を手に入れたお前らなら、きっと我々の望みを果たしてくれるはずだ」

最後の言葉をかけると、そのまま俺たちを送り出した。

これが俺の最後の戦いになるのだろうか？そしてこの星の結末を決めることになるのかもしれない。

俺を率いる六人の同胞はそのまま最後の門へと向かった。



### 33話

移動には例の如く一ヶ月は掛かった。

そこまでの道のりは慣れたものだったが、門を目の前にするとそんな甘い気持ちは吹き飛ばされる。

壊疽者の放つ殺気がその場を埋め尽くし、泥の中に浸かっているような感覚だ。

一歩一歩が慎重になり、その足取りも重くなる。

模擬訓練はこなしてきたつもりだったが、実戦とそれとは大きく異なるのだ。

俺は、壊疽者まであと僅かと迫る、一キロ手前でそれぞれの持ち場につくように指示を出した。

前衛と後衛に役割分担を分け、攻撃の布陣も一箇所からの突破ではなく、門を中心に三箇所から突撃する方法を取った。

俺と、みゆとレイブスが突破の鍵だ。

この最後の門のある場所はちょっとした山だった。

山といっても植物はほとんどない、禿げた山だ。

その頂上に門が存在するので、上にいる連中からは俺らの姿は丸見えだ。

だから隠れる必要はなかった。そして奴らも俺らが近づいたから  
といつてもすぐには襲いかかつてはこない。

動けばそれぞれの持ち場が手薄になるからだ。

そういつた見えない駆け引きがそこには存在し、俺らが近づくの  
をゆっくりと待っているような感じだった。

そして遂に作戦を実行する時が来たのだ。

サティが門を中心とする半径数キロに巨大な結界を張り巡らした。

あらゆる物理攻撃を跳ね返す能力の応用ではあるが、

本人曰く、ここまで巨大なのは初めてだしどれぐらいの時間持つ  
のか分からないと言っていた。

それでも最低数十分は稼げる。だとしたら、俺らに残された時間  
は少ない。

第一陣が大勢で襲い掛かってくるのが見えてきたが、そこには俺  
の過去二度の訪問の成果が目の当たりにされたのだ。

バゴオオオオオオオオオオ

耳を劈くような爆発音と共に山の斜面が揺れる。

そして岩盤は大きく割れて山の斜面をどどん切り崩していた。

何が起こったのか壊疽者には理解ができなかった。

ただただその場に踏ん張ることで精一杯で、土砂に飲み込まれるものでごちゃごちゃになっていた。

俺は二度この場所に訪れた時に、地盤のつなぎ目に注目していた。そしてその箇所に爆薬を少しずつ仕掛けていたのだ。

いずれはきつと役に立つと思いつつ。そしてそれが今ようやくつと実を結んだ。

出鼻は挫いた。

同時に俺たちは恐るべき速さで前に進んでいた。

崩れる土砂を掻い潜り、そのまま一気に上へと上っていた。

今の衝撃で巻き込まれた壊疽者は数百人いただろう。混乱に乗じて生き残った奴らもそれぞれ殺していった。

次々と塵へと姿を変える壊疽者。

第一陣はほぼ壊滅で、中距離で攻撃態勢を伺っていた壊疽者にも多大な影響を与えた。

機械化された壊疽者の集団は状況を理解するまでに数秒を要する。

機械と融合したために無駄な知識が増えたことが仇となったのだ。

知識は殺し合いの上で、本能には勝つことはできない。

格下のものと戦うのならそう言ったものは、あっても何ら支障はないだろうが、これは違う。

俺たちは格下ではないのだ。

俺とみゆ、レイブンは共にもたつく機械化した壊疽者をどんどん葬り去っていく。

ここまでくれば、ゲームに出てくる雑魚キャラと同じだ。

固まっていれば思う壺。

それぞれの武器で思うがままに絶命させている。血しぶきなどは一切出ることはなく、塵へと返り時の雫へと姿を戻している。

俺の握る武器はどんどん大きくなっていった。

疾風の如く戦場を駆け巡る俺たちは、立ち止まることをしなかった。

ただただ先しか見ていない。

目的のあの門のことしか…

駆け出す足は次第に速くなっていくが、予想外の出来事にその足は止まる。

ドン！

体に鋭い衝撃が走る。

「か……」

呼吸が一瞬止まった。

それを見たみゆとレイブンも一旦距離を取るしかなかった。

何事だ、とその攻撃の主の姿を目で追った。

するとそこに身構えていたのは、壊疽者とは思えない風貌の男だった。

すらりとした体型で、女性のような顔立ち。

こいつ……人間か？

そう見間違えるほどだった。

「上出来だ……ここまで来れるとは……」

驚くことにそいつは言葉を発した。

「お前……壊疽者なのか？」

みゆも動揺を隠せないままそいつに言葉を投げかけた。

「そうだ…お前らの想像とは少し違うがな」

その通りだ。俺が今まで見てきた壊疽者は言葉など話せなかった。知識うんぬんの前に言語を司る脳の発達がなされていなかったからだとおもわれていた。

だから意志の疎通ができていたのも、言語ではなく体で共鳴していたのだからだと思っていた。

「そうそう…お前の考え通りだ。そこの坊主」

「え？」

俺…今のこと口にしたか？

「いや、していないさ」

そいつはまるで聞いていたかのように答えた。

俺は心で考えていたことを口にはしていない。しかしこいつはそれをまるで聞いていたかのように受け答えしていた。

「心を…読んだのか？」

それしか考えられなかった。



### 34話

「そつだ。私は壊疽者の中でも特異な体質でね。相手のことが手に取るように分かる」

「お前だけがそうなのか？」

「少し説明しようか…壊疽者は第三段階に分かれている。第一段階。これはさつき君達が土砂でほぼ壊滅させた、ただの脳なし野郎だ。そして第二段階…

これは外部の干渉を受け、自らの体に取り込むことが出来る者…そして第三段階は、私のように特異な能力を持つ者だが、これは仲間のお陰でもある」

「仲間だ？そんな意識がお前らにあるのかよ」

「はは…確かに…私も言葉を誤った。糧のようなものか…弱肉強食の世界が我々にもある。

弱いものは自然に淘汰される自然の歯車だ。だから私の体には数千という奴らの存在が生きているのだ」

「お前の体の中ですか？気持ちの悪い奴だな」

レイブンはそのことがよく分からなかった。

体の中で、他人が生きているなど想像もできないからだ。

「お前は…自らの体に取り込んだんだな？数千の壊疽者を…そうす



ることで、急速な進化を遂げた…」

俺は大体の推測で話したが、それは間違いではなかったらしい。そいつはふつと笑っていた。

「その通りだ。察しがいいな、坊主。そうすることで、私は脳を手に入れ、知識を手に入れ、能力を手に入れたのだ。

お前らの体に入り込んでいる時の雫を体内に蓄積したことだな」

それなら道理が通るな…それにしてもどうやったら体内に取り込むんだよ…

「簡単な話だ」

俺の心を読まれてそのまま会話が成立してしまった。

「食ったんだよ。全て殺してな…僅かな時の雫を体内から取り出してそれを食う。

その繰り返しを数千回行ったんだ」

恐ろしいことを平気な顔で話していた。俺は背筋が凍った。

こいつは確かに取り乱すという行為が当てはまらない。きっと普通に食事をするように仲間を食ったんだろうな。

毎日…毎日…

想像しただけで吐きそうになる。

「それで…お前と同類は何人いるんだ？」

みゆは相手に合わせるかのように淡々と質問をした。

「そうだな…確認はしていないが、私を入れて三人だ。能力も分からんし、自由にこの場所を守るようにとしか言われていないからな」

「言われていない？」

仕切っている誰かがいると言うことか？

「そこまでは教えられないな…お前らはどうせここで死ぬんだから。後衛に回っているお前らの仲間とやらも俺と同じ存在の奴らが殺しに向かっているはずだ」

「随分と意志の疎通のない計画なんだな」

「そんなことよりも早く始めないと、お前らにも都合が悪いんじゃないか？」

「都合が悪いだ？」

「さてな…知りたいのなら、力づくで聞き出したらいい。お前達も殺し合いを所望なのだろうが…それならくだぐだ話していないで、私が話している際でも何でもついて殺しにかかればいい…」

すつと体勢を正面からずらすと構えていた。それは凄く自然で殺気すら感じられない。

きつと殺すという行為自体が自然に染み付いているから殺気も出ないのだろう。

「三人同時でも別に構わない。お前らが想像している以上に私は強い。」

不意打ちだろうが、囲んで攻撃だろうが、好きにしたらいい」

ここまで絶対の自信を持っている相手も始めてだ。

以前戦った、柊リオや三賢人も自信に満ち溢れていたが、それともまた違う。

こいつは常に冷静だ。

その嫌な間に痺れを切らしたのか、レイブンが全てをかき消すかのように真っ先に飛び出していた。

彼の動きは銃口から吹き出す弾丸のようだった。真っ赤に熱した鉄の塊が敵目掛けて一直線に迫っている。

飛び出した大地が抉るほどの脚力。

レイブンは空手だった。武器は何も持っていない。しかし彼の両腕には物体そのものを破壊する能力が備わっている。

拳を固めると、空気を切り裂いて目の前の障害を打ち崩す。が、それは叶わなかった。

ぐるん！

体が一回転すると地面に思い切り背中を叩きつけられた。まるで自らの意思でそのようになったかのようなほど自然な流れだった。

「なかなかの動きだけど、無駄が多すぎる。三の動作を一の動作でできないようじゃ……」

レイブンは諦めていなかった。たたきつけられたのと同時に転がって体勢を元に戻し、二度目の襲撃を試みていた。

そしてみゆも動いていた。

敵は一人では倒せないという危険信号が体の中を走ったのだろうか？

一瞬で二人に取り囲まれ、前後を塞がれた形になったが、奴はこれからどう動くのだ？

俺はあくまで傍観者を気取ってしまっていた。

レイブンの切るような左拳とみゆの斜めに振り下ろされる剣線が同時に交錯する。

だが、これも敵の肉体には届かない。

両方の掌でそのまま攻撃をするりと流される。とても柔らかな動きで……

みゆたちの体は半回転しただけだったが、敵は反撃をしない。どこま

で余裕を見せるつもりなのだ？

そんな甘さは二人には命取りだ。

そう心の中で強がっていたが、それは間違いだった。

「右に三センチ…左に五センチ…」

紙一重で攻撃の一つ一つを完全に見切りながら、攻撃をよける距離を狭めていた。

その目に恐怖や焦り、倒せるといった欲といった動揺など感じられない。ただただ冷静に戦いという行為に没頭している。

幾多にも及ぶ空振りがその場の空気を切り裂いていると、次第に敵も受けだけではなく、攻撃にも転じた。

しかしそれは酷くやさしい攻撃だった。

みゆとレイブンの攻撃をかわすと同時に背中や腹部にすつとタツチをしていた。

それはまぐれではなかった。二度、三度と続く。

その不気味な攻撃に高速で動いていた二人の足はぴたりと止まってしまうた。

「悟ったか？君らの動きでは私に勝てないことを？」

そこのお前は、あらゆる物理というものを破壊する能力を持っているようだな。

そしてその女は…能力はなさそうだ…だが、ナイフの使い方は相当慣れているし無駄な動きはない。

しかしそれだけなんだよ。お前らの戦力の分析は終わった。後は、後ろのお前だけだ…」

奴は余裕を見せているのではなく、みゆとレイブンの動きを細かく分析していたのだ。

### 35話

こいつ…今まで戦ってきた奴らの誰にも当てはまらない。戦いに欲を感じないし、そこに気持ちが入って入っていない。

忠実に任務をこなすロボットみたいだな。

「心配するな…俺だってお前の分析をしていたまでだ。いつまでもここで立っている訳じゃない」

ゆらりと体を動かすと、ゆっくりと前進して歩いた。

「ほっ…」

その言葉に嘘はないのだと思い、俺の行動に感心した様子を見せた。

そして互いの手が届くぐらいの距離まで迫るとそいつの顔を眺めた。

「そっいえば…」

俺が殺気をむき出しにしていると、一呼吸置くように相手が話した。それはまるで、落ち着けと話しているかのようだった。

「私の名前をまだ教えていなかったな。お前も心の中で呼びづらいだろう？敵とか、奴とか…」

ちっ…相変わらず人の心を読んでいやがる。それに余計な気遣い

だ。

「名乗ってもまずいことはない。なら、名乗っておくでしょう。私は…イチという」

「イチ？数字のか？」

「さあな。我々三人は、名前をいただいたのだ。イチ、キシ、マヒメとな…」

それがどのような意味を持っているかなど知らない」

「いただいたと言うのなら、やはり黒幕がいるのだな。

ご大層に宗像三女神の名前を三分割にするなんてな…よほど歴史に詳しい奴だな」

「宗像…三女神だ？」

「こつちの話だ。それよりもやるんだろ？」

「分かりきったことを…臆したのか？」

「まさか…俺も似たようなものだと思ってな。お前同様に慎重だ。お前の能力の分析も終わったよ」

「え？」

そう言っ て俺は目を瞑る。

「さあ、どっからでもいい。かかってこいよ。俺の心が読めるのなら仕掛けてきたらいい」



イチの姿は見えないが挑発をしてやった。

その行動にイチは先手を打たれたように戸惑っていた。

「心を読めるのなら相手から攻撃する場合は、動きを知らせているようなものだから分かりやすいな…

しかしお前から仕掛けるとしたらどうなるんだ？相手の動きは分かるのか？」

不適な笑みを俺は浮かべてやった。それも計算だ。相手が少しでも心を動かされてくれればいいという…

だが、相手は微動だにしなかった。

「くく…考えたものだ。確かに私は攻撃される方が都合がいい…相手の動きが読めるからな。」

だが、攻撃に転じたからといって、私が不利になることはない。お前らの動きを一通り見て分かった。

お前らの動きは私よりも遅い。攻撃を仕掛けてかわされたとしても反撃で十分殺せる」

その考えは間違いではない。だが、一つ間違っていることがある。

イチはみゆとレイブンをその場に残して俺に向かってきた。

わき目も触れずに一直線とは…俺も好かれたものだ。

勝負は一瞬。

そう決めていたが、やはりその通りだった。

瞬きをし終わると相手は宙を舞っている。

それは自らの意思ではない。俺の手によってそうなったのだ。

「え？」

イチに理解をすることはできなかった。

俺という存在をみゆとレイブンと同じだと判断してしまった結果なのだから。

奴の思考は一瞬空白になり、自分の身に何が起こったのかを確認する。

どうして…

そういった考えが嫌でも伝わってくる。

イチの腹部には深い傷が斜めに刻まれていた。そこからは出血はない。

こいつも生物の定義から外れている生き物。体も普通ではなかった。

それから俺はいつものように傷つけた相手の消滅を黙って待っていた。

しかしそんな淡い期待もかき消された。

シュパッ

目に見えないほどの細く鋭い斬撃。

それはワイヤーのようにも見えたが違った。奴は体の一部を武器化していたのだ。

俺の体目掛けてそれを空中で舞いながら放った。

俺が攻撃を食らわして跳ね飛ばしてから一秒にも満たない間の出来事だった。

「くっ…」

完璧に相手を捕らえたという気の緩みが俺の動きを鈍らせた。

脇腹を貫通させてしまった。

しかしそれでも運が良かった。もしも空中ではなく、立った状態なら俺にかわす術はなかったかもしれない。

がくつと痛みで体が崩れそうになった。

「やっぱり…空中だと上手くいかないか」

片足でふわりと着地をすると、先ほどと変わらない平然とした顔で俺を見ていた。

「しかし…驚いた。まさか私の読心術が通じないとは…」

俺は脇腹を押さえながら呼吸を整えていた。

「は…俺にはな、未来を見る力があるんだよ。だからお前から攻撃を仕掛ければそれは全て頭の中に入り込む。

だから…俺はそれを想定して動ける。お前が心を読むのよりも速くな」

本来なら能力のネタバレは避けたいところだが、相手も自らの能力を包み隠さず話しているので、合わせる形を取った。

「ほう…それは、興味深いな。そしてもう一つ…お前はその武器で私を確実に仕留めたと思ったのだろうか？」

だが…私は立っているそれはどういう意味が分かるか？」

俺にはさっぱり分からない。

「私の体には数千の同胞の命が入っている。だから私の体は、数千の命の塊だ。

私を完全に殺すには数千回致命傷を与えなくてはならない。まあ、一撃で一つの命が死ぬとは限らない。

手練のものなら一撃で数十も可能だろうかな…

しかしだとしても数十回は殺さなくてはならない」

「何だと…」

「これは事実だ。それを踏まえた上で、再戦をしようではないか」

イチは再び構えた。

### 36話

まずい。非常にまずい。

俺はこんなことは想定していなかった。それを悟られてもまずい。表情は変えないでいた。

すると、イチは完全武装解除といったように、自らの体を武器化した。

先ほどの髪の毛のように細い無数の鋼線が俺らの体に一度に襲い掛かった。

みゆもレイブンもその場に留まっていたはいけないと即座に動く。動いた場所には無数の針の穴が地面を削り取って残っていた。

同時に三人の思考を読むことはできないのだろう。

鮮麗な動きはそこにはなく、数を撃てば当たるといった安直な攻撃だった。

大地を駆け抜ける三人の姿とは対照的にイチはそこをまるで動かない。

しかしそれを補うだけの攻撃力が奴にはあったのだ。

俺たちは攻撃を防ぐことで手一杯で、反撃の余地はなかった。

レイブンはそれでも相手の攻撃に負けずに前進をしていた。少しでも相手に近づくために。

このままでは、俺たちの体力が尽きるのが先なのは目に見えている。

しかも相手は数千もの命をストックしている。どうやったら勝ち目が…

腹部の激痛を堪えながら、必死に目の前の攻撃を消滅させていった。

「海！お前は作戦の指揮官だろ！迷ってないで何でもいいから思ったことを決断しろ！このままでは押し切られる」

レイブンの激が飛ぶ。

そつだ…俺は指揮官だ。

弱気になってどうする…

脳みそをフル回転させろ。きっとあいつにも弱点はある。

命が数千もある。ということは何がそれを動かしているんだ？

それぞれの意志があるのか？それならまとまるはずはない…

向かってくる幾重もの鋼線の攻撃を払いのける。しかし傷のせいでそれも完全に防ぎきれてはいなかった。

また腿に一撃喰らってしまった。

くそっ…

みゆはというと、これまたレイブンと同じように高速移動で尚且つ相手の攻撃を押し返していたが、  
今までにないくらいの苦戦を強いられていた。他の仲間を気遣う  
余裕もない。

「どうした？どうした？まだまだ私は攻撃の量を増やせるぞ？」

とんでもないことを口に出している。それだけ俺たちには時間がな  
い。

しかし…俺にはとあるひらめきが。

無数の命を動かす本体がきつとある！

それを立証するものは何もないが、そう考えるしか他の道が見当  
たらなかった。

時間の残されていない状況で、俺は決断して叫んだ。

「みゆ！レイブン、奴の中心を目指せ」

こうなれば賭けだ。

みゆとレイブンに奴の体の中心、心臓の位置だけを見るように話  
した。



するとレイブンとみゆは重なるように並ぶと、一直線に鋼線の嵐を次々となぎ倒した。

黒い塊にぽっかりと穴が空いているかのようだった。

共闘することでここまでの力を発揮しているのは俺も嬉しい誤算だった。

しかしここで喜んでいる場合ではない。俺はすぐにその後ろから二人を盾にして進んだ。

イチとの距離が三メートルまでに近づくと、敵も本能的に何かを察したのか、攻撃の量を今までの三倍に増やした。

「うお！」

黒い鋼線の嵐は、大波へと姿を変えた。それと同時にみゆとレイブンの足がぴたりと止まった。

嵐を進むことが出来ても大波には飲まれてしまふといったところだろうか。

「怯むな！行け！」

俺は無理だと分かっていたが、声を荒げてしまった。しかしそれは、二人の力になった。

踏ん張って攻撃を受け止めると、更なる力を出した。

ぶわ！

大波にも大穴が開いたのだ。

だが、レイブンは体中の組織を無理やりに急稼働させたためにぶちぶちと筋肉の繊維が切れるような音がした。それに伴って体中から出血もしていた。

しかし今しかない。

千載一遇のチャンスを見つけた俺は迷わずその大穴に向かって飛び込んだ。

音速を超えるほどの速さを俺も見につけたのだろうか？

羽のように軽くなった体が瞬間移動するかのように相手との距離を一瞬で縮めた。

「っ…」

俺の持つ武器はイチの心臓を深々と捕らえていた。

俺の見立てが正しければ、奴という体を動かしている司令塔のような命がこの場所にあるはずだ。

それさえ殺せれば、後はばらばらになるはず…

そう考えていたが、二度目の裏切りにあった。

「甘い！」

突き刺さったままでイチは何事もなかったかのように俺に向かって無数の針を浴びせた。

当然、反撃の余地もなくまた体に穴を開けられてしまった。

右肩、脇腹、両手、両足、数えたらきりが無い。

体は脱力して崩れ落ちてしまった。

「海！」

みゆが大声を上げて、俺の方へ向かおうとしたが、同様の結末を迎えてしまった。

無数の針はみゆの体にも穴を開け、だらしなく地面に倒れ込んでしまった。

相性が悪すぎた。

奴の繊細かつ、豪快な攻撃はみゆや俺に向いていなかったのだ。

レイブンは物理を壊す能力を持っていたので、どうにか自らの体に迫る危機は脱していた。

それでも不利な状況には変わりなかった。

みゆと俺が抜けた穴を一人で埋めているのだから…

レイブンの体中が真っ赤に染まっていた。

それは、傷を追ったからではない。

自らの体のリミッターを無理やりこじ開けた結果だ。

「う…」

俺はどうか意識を保っていたが、傷が回復するには時間が掛かる。

その場に倒れている俺たちに止めを刺さないのは、死んだと思っただからだろうか？

そして遂に、レイブンまでもが、体を貫かれることになる。

後退しながら戦っていたので、致命傷には至らなかったが、戦線離脱は確定だろう。

酷使しすぎた体とそれに重なる負傷は大きい。

その場合は、イチ一人を残して全員が倒れることになった。

それを見るなり、イチは攻撃の武器を体に引っ込めた。

「こんなものか…第三の人類とやらも」

ため息混じりの声で、微かに動く俺たちを見下ろしていた。



### 37話

「しかし…先ほどの攻撃で数百の命を殺すとはな…それはそれで賞賛に値する。」

まあ、それも死んでしまえば意味がないがな。さて、まだ息があるみたいだから止めを刺しておくか」

真つ先に俺の元へと歩いていった。

「お前がこいつらを仕切っているのだろう？それならお前を殺せばチームは機能しなくなる」

指先がすつと俺の背中に向けられた。

心臓に目掛けて鋼線を突き刺す気なのだろうか？

それは薄々分かるのだが、俺の体が言うことをきかない。

ぐぐぐつと体を起こすが、それよりも先に襲い掛かる鋭い針の束。

思わず目を瞑ってしまったが、

イチの動きはそこから先に進まなかった。

「…っ」

俺はゆっくりと目を開くと、そこにはまるで時でも止まったかのよつに身動きのできないイチの姿があった。

「お前らの…仲間か…」

必死に体を動かそうとするが、ぴくりとも動かないのが見えて分かった。

イチの指摘通りに俺らの後ろにはティワンの姿があった。彼の能力で奴の動きを止めたのだ。

後方支援に回っていたので、到着が遅れたのだ。

しかし助かった。

稼いだ時間のおかげで俺はゆっくりと立ち上がった。体の機能の半分は元に戻った。

傷口が小さいことが幸いした。俺の治癒能力でも数分で回復できた。

当然、みゆは俺を上回る治癒能力を持っているので、完全回復していた。

これなら反撃の芽はある。

そう思ってイチを見た瞬間に、奴はどうやってやったのかは知らないが封じられた体を開放して動き出していた。

「何！」

ティワンは足止めできなくなったのだろうか？そう思いティワンの方を見ると、彼は地面に蹲っていた。

攻撃されていたのだ。

一体いつ、誰が？

焦りながら周囲を見回すが、周りには誰もいない。しかしティワンの体からは出血していた。

あの出血量では相当の傷を負ったのが分かる。背中から攻撃された結果だと俺は判断したが、どう見てもイチには不可能な位置だ。

まさか…新たな能力だろうか？

多少の混乱が俺の判断力を鈍らせてもいた。

そして拘束具が外れた獣のようにイチは疾風のように大地を走り、俺を指して自らの攻撃力を惜しみなく出した。

一気に決める気だ。

鋼鉄の針の束は生き物のようにならぬが俺の体を目指す。

みゆはそれにいち早く気がつき、小太刀、雪姫の力を存分に発揮した。

極限状態に追い込まれると第三の人類は思いがけない力を絞り出せる。そのことはレイブンも証明していた。

みゆの放つ斬撃は刀の大きさと異なる衝撃波を生む。まるで放射状のように広がり、大気を切り裂く。



剣速は悠々と音速を超えたのだ。

音と共に俺の目の間にまで迫っていた鋼鉄の武器はぱっさりと切り落とされた。

助かった…

あと数センチで、俺の肉体は確実に貫かれるであろうといった所で全ての攻撃は無へ返った。

みゆの次の行動は速かった。

イチがそのことに気がつく前にすでに先回りしていたのだ。

そして相手の思考回路がみゆと判別する前に斜めに切り落とす。

が…体は両断はされなかった。

傷は深々と刻み込まれたが、すぐに元通りになっていたのだ。

やはり無数の命が壊されたただけだ。

「流石だな…一撃でまた、数百の命が死んだよ」

イチは軽口を叩くとそのまま何事もなかったかのように体の一部を変化させて、みゆの腹部を串刺しにした。

「か…」

激痛で呼吸が思わず止まってしまったのだろう。

大量の出血と共にびくんと体が跳ね上がった。先ほど負った傷がまだ回復して間もないのにこのダメージは大きかった。

みゆは焦りながらも、このままでは身動きがとれないと判断し、腹部に刺さった棘をばっさり切り落とした。

「はあ…はあ…はあ…」

後退する力もなくイチの目の前でひざまずいてしまった。

俺は既に動いていた。

みゆをその場から離さなくてはならなかったからだ。

イチの追撃が手に取るように分かっていた。未来が見えていたから…

俺はみゆの体を抱き上げると、イチの追撃の網目を縫うようにして、その場から離脱した。

みゆを抱き上げている腕は真っ赤に染まってしまった。

「くそ…」

俺が不甲斐ないばかりにみゆにまた致命傷を負わせてしまった。

俺は何度も自分の力不足を呪った。

敵との距離が十メートル以上になると、攻撃の嵐は届かなくなっていた。

そしてその場を振り返って戦場を改めて見回した。

血を流して倒れているティワン…そして自らの体に付加を与えすぎ、体中から血が流れ出しているレイブン。

明らかにこちらの分が悪い。

結界を張っているサティと後方支援に回っている残りの二人が参戦したとしても今の状況を打破することはできない。

それならどうする…

俺らで何とかするしかない。

俺は脳みそをフル回転させて、今までの出来事を振り返る。

あいつはどこかに本体を持ってるのはずだが、それがどかか分からない…

どこだ…どこだ…

きよるきよると辺りを見回しながら、今までのことを細かく分析していた。

心臓付近でもないのなら、頭か？それとも手や足？

そんなはずはない。

ちくしょう…分からなくなってくる。それに時間もない。判断が遅ければそれだけ俺らの状態は厳しくなるのだ。

どうしたらいいんだ…

ん？

すると俺の脳裏にはあることが電撃のように流れ込んだ。そして今までの出来事を思い出してそれらを確認した。

そうか…

俺は背後の何もない大きな岩を見た。

可能性はある…

そう思って、みゆをその場に置くとイチに背を向けるように走り出した。

それを見たイチは急に態度を変えた。

「まさか…貴様！」

十メートル以上離れた俺を追うのはそう簡単なものではない。見る見るうちに引き離されている。

俺は後ろを振り返ることなく、目的の岩場まで走りぬけた。

そして、持っていた武器で動いている相手にはできないような大降り目目の前の大きな岩を切り伏せた。

ズズズン…

数トンもある岩が低音を響かせながら崩れた。

それと同時に絹を裂くような叫び声が響き渡った。

「ぐあああああああああああ」

その声にその場にいた全員が動けなくとも体が反応した。

声の主は当然、イチだった。

俺を追いかけていたはずのイチの体は何故かそこで止まり、体を掻き毟るように苦しんでいた。

俺の考えは正しかったのだ。

奴は本体を隠していたんだ。

俺は奴の体の中心に隠していると思いついていたがそうではなかった。

ティワンが足止めをしたときに攻撃をしたのが、岩になりすまして隠れていた本体だったのだ。

俺はあの時の状況を思い出して、その攻撃が可能な場所を割り出したのだ。

見晴らしの良いこの場所で、ティワンの負った傷の位置から攻撃の場所を特定するのはそう難しいことではなかった。

傷の深さで威力、場所で方向が導き出される。

所詮は本体を戦いの場に置かない卑怯者だったのだ。

俺はそのままダメ押しの一撃をカメレオンのように体を岩と同化していた本体に喰らわせた。

すると、後ろの操られていた数千の壊疽者の命を纏った仮の姿は、そのまま崩壊していった。

「お前は見誤っていた…司令塔の俺一人の力が全てではない。チームの一人ひとりが協力しているからこそ成り立つんだ」

正反対の結果を思い知らせるかのように最後の言葉を投げかけた。

そんな言葉を聞き入れることもないまま、イチは完全に消え去ってしまった。

「終わった…」

俺はがくと力が抜けたが、まだまだ序盤に過ぎないのが現実だ。

残り二人のこんな数千もの壊疽者の命の塊みたいな奴を相手にしなければならぬと思うとぞつとする。

しかし今は怪我人の回復が最優先だ。

そう思い、サテイたちを呼び寄せると、ナックスの力でティワンとレイブンの治療に専念した。

そんなほつとした束の間の時間だったが、それをいとも簡単に潰してしまう人物が背後から声をかけた。

それはとても低い声で、まるで人を諭すようであり、惑わすような不思議な声色だった。

「やはり、ここに来ていたのか…海。そしてみゆよ…」

自らの名前を呼ばれた俺たちは、すぐに後ろを振り返った。

すると、そこには俺の最悪の予想が的中した結果があった。

「久しぶりだな…数年振りか」

その男は以前と変わらない顔つきで、妖艶といった表現がぴったりだった。

独自の雰囲気には磨きがかかったのだろうか？側に立たれるだけで、雰囲気は飲まれそうになる。

「三条…織斗…」

忘れることもできないそいつの名前を口にした。ぱっと見は、以前とほとんど違いはない。

大きな違いといえば、失われたはずの腕が何故かそこにはあるということだ。

そして全体的に細い体だったはずが、威圧感を与えるに相応しいがっしりとした体つきになっていた。

「覚えてくれたか…それは光栄だ。くくく…何故生きている？そんな表情だな？」

ずばりその通りだったが、あえてその言葉は口にしなかった。

「あの時、お前に致命傷を負わされてこの世界に送り込まれたが、私は生きていたんだよ。

傷を回復するには少々てこずったが、あの門を潜ることで新たな能力を手に入れられた」

「新たな能力だと？」

「ああ…壊疽者を飼いならすというものだ。彼らは出来損ないの人



間だ。脳もない。

しかし意思は存在するのだ。命を燃やすかのように大気中をそれが伝わっている。

私にはそれが分かるのだ。だから、彼らの道を指し示したのだよ。このまま死ぬのはつまらない。

それならば、人間に成り代わってみないかとね。はははは…どうだ？面白いと思わないか？」

「何がだ…」

「自らが最強だと思い込んでいる人間の世界が今まで無碍に扱われていた者に逆転されるんだぞ？」

これこそ私が求めた新世界なのかもしれないとまで思った」

「壊疽者を操り、理想郷を作るとでも言うのか、貴様は！人を操るだけでは飽き足らず、世界までも動かそうってのか？」

「それが私に与えられた使命だと今は思っている。

あの門を潜り抜けた時にこの世界の様々な思いや記憶が脳裏に流れ込んだ。

だからこそ、私はこれを望むのだ。人は必ずしも正しい行為をしていると言い切れるのか？」

その質問に答えることはできなかった。

「お前も気がついてきているのだろうか？このままでは人類に未来はないと…」

それならば、新たな可能性を求めてみるのも一つの道理だ。

それを否定することができるのは、力のあるものだけだ。今のお前にそんな力はない」

「ふざけるな。どうしてもそう、言い切れる。俺だって俺の考え方がある」

「確かに…時の雫を元に戻せる能力があるのならそれもそうだ。

しかしそうはならないのだ。私がそれを阻むのだからな」

「時の雫のことまで知っているのか…」

「当然だ。この二年間、私が何もしていないとでも？

私は壊疽者に知識を与え、戦術を教えた。そして肉体の進化にも手を加えた」

それでか…数ヶ月での壊疽者の急激な進化はこいつが絡んでいたからか。

しかし一介の人間がここまでこの世界に溶け込んで指導者になれるのはある意味すごいことだ。

アルタイルとは違った脅威を織斗に感じた。

「何度も都市部へと部下を運ばせて、人間の情報を集めていた。

だからお前らの本拠地ももう私の手の中だ。壊疽者は大きいものばかりではない。

虫のように小さなものも存在する。お前らが初めてこの人間に会いに行った時にこっさり忍ばせておいたのだ。

あれから数ヶ月で、中の様子はほとんど分った」

「用意周到なんだな……」

「ああ。漠然とした戦いは私には向かない。

完全な勝利を得るためには、慎重な行動とじつと何ヶ月でも息を潜める忍耐力、そして的確な判断力が要求されるのだ。

それをお前との戦いで学んだよ。

あの頃の私は最悪の自分の姿まで想定していなかったし計画の甘さもたくさんあった。

みゆを手に入れたことで、全てを手に入れたと勘違いしていたのだからな。

そんな自らの問題点を反省し、今回はとことん勝利というものを追及した」

蛇のような性格は相変わらず健在だ。だが、以前のような隙はどこにも見当たらない。

それに統率者に相応しい風格と才覚を兼ね備えている。

死の淵を見たものが這い上がってきたことでここまで進化を遂げられるとは夢にも思わなかった。

俺自身も進化はしている。能力で言ったら織斗を上回っているだろう。

だが、それだけでは片付けられない何かがある。今のこいつにはある。

「くく…恐れているようだ。私の事を」

「何だと？」

「そう身構えるな…お前とて私から見れば脅威の存在だ。しかし壊疽者同様に私も進化はしている。」

そして以前のような呪術の能力も失われてはいない…

そこで、お前は考えるだろう。また同じような呪術をかけられてはまずいと」

それはその通りだった。俺は奴の能力を知っているからこそ、そのことを警戒した。

奴が死ななくては解けることのない呪術。それはみゆと俺が以前かけられたものだ。

あれは織斗がこの世界に吹き飛ばされたから解けたが、またかけられる可能性だってある。

警戒心を緩めることなく、奴の目は決して見なかった。

「心配するな…私の呪術は一人一度きり。脳に確実な印を入れられるのは一回だけだ」

「印だ？」

「私の呪術は脳に直接強制的な指令を焼き付けるものだ…それは同じ場所には二度と行えない」

「信用できるかよ」

「信じてもらわなくても結構だ。だから私は違う方法を取った」

何のことだか検討もつかなかったが、織斗は満面の笑みを浮かべていた。

何かあるということか…

それを見ただけで全身の毛穴が開いたが、未来を見る力では何も見えない。

こればかりは自らに起こる危機でなければ反応することがほとんどない。

「何を企んでいる」

怒りに近い感情を表に出して、最大限警戒をした。

「私が何のためにこの場所で数ヶ月間もじっとしていたと思う？」

「え？」

「ただ黙ってこの場に留まることに理由があるとは思わなかったのか？」

「それは…最後の門だから嚴重に守ろうとしたんだろ？」

「それではつまらないと思わないか？」

知識を持ち始めた壊疽者がそれでは、不甲斐ないと感じないか？」

「意味が分らないが…」

「君らは私が仕掛けた罠に掛かったんだよ」

「罠だと？どこが罠だと言った？先ほど戦ったイチのことを罠と言ったのか？」

「まさか…残念ながら彼は捨て駒だよ。ここに全員を集めるための…」

ふっとため息のように一笑すると、奴の目が怪しく光っていた。

まさか…呪術か。

そう思って瞬間的に目を直視しないように背けた。

すると、織斗は愚かなことを…といった様子で、

「大丈夫だってさっきも話したろうが」

そう話した。

本当にそうなのだろうか？

未だに信用しないままゆっくりと奴の表情を見た。

すると、あいつは勝利を確信しているかのような顔をしていた。

「しかし海…君意外はどうかは分らないがな」

どういうことだ！

俺は焦りながら背後に立つ仲間を見た。するとそこには生気を失った骸が俺とみゆのことをじっと見ていた。

「む…」

どこか腑に落ちないといった表情を織斗は一瞬見せたが、よく分らなかった。

「まさか…こいつらに呪術を…」

「そうだ…こいつらにはかけられるのだよ。唯一の障害であった強制力の効果さえ取り除ければな…」

「それって…まさか…彼らが強制力を失うカプセルを飲んだから…」

「その通り。戦力をここに集中させれば、全勢力をここにぶつけてくると私は判断した。」

だから辛抱強くじらし続けたのだ。何ヶ月もかけてな…

そして人間のお偉いさんは決断をしただろう？もういい加減にけりをつけようとな。

我々の方がまだ実力は上なのだからという驕りで…そこで邪魔なものは強制力の存在だ。

これがあれば、防衛に回っているものは戦闘には参加できない。

だからそれを解除させる必要が出てくる。後はご覧の通りだ。

呪術に邪魔な存在は強制力という脳に対する規制だからそれが失われれば、私の思うままだ」

「それだけではないんだろ？」

「流石だ：察しがいい。ここに第三の人類を集まっているということは、都市部は手薄の状態。」

密かに送り込んだ壊疽者がもう向かっているはずだ」



## 40話

「くそ…」

やはりそうか。こいつは緻密に計算された作戦だった。

何ヶ月もかけて俺たちを挑発するかのようじらし、自ずとこの場所に向かうように仕向けた。

急激な進化を恐れている部分もあったから、いやおう無しに全勢力をここに投入する。

セウロも当然、第三の人類の力を出し切ったのだからこれで戦いが終わると過信していたんだ。

そこをつかれた。

俺は織斗に掛かっていこうとしたが、それを阻むようにレイブンたちが目の前に立ち塞がった。

「く…」

俺が数年前に体験したあの光景と同じ状況。

その目には感情もなければ、意思もない。ただ与えられた任務を遂行するのみ。

みゆでもこうはならなかったが…

「一つ答える…どうして、みゆはあっちの世界でお前の呪術の影響を受けた？強制力はあったはずだ…」

俺はこれが最後になるかもしれない質問を織斗にした。

「いい質問だ。それには答えておこうか」

まるで全てを手に入れて満足しているかのようにだった。

「みゆがあつた門を潜り抜けた時には強制力はほとんど働いていなかった」

「え？」

「門は時空を超えるもの。強制力は時空を超えた者にまで働きかけなかったのだ。」

だから私の呪術も効いたのだ。まあ、半分といったところか。

強制力半分、呪術半分。

だから完全に操られないでお前と話も出来たんだ。こいつらを見ればわかるだろ？お前との会話は無理だ。

私の命令に従順なのだからな」

「ちっ…」

「しかし解せない。門を潜り抜けて、帰ってきたのだから強制力は元通りになった。」

人間に自由になるはずのカプセルをもらったはずだから脳の規制は解除されて私の呪術も有効になるはずなんだが」

だからか…先ほどの表情は。

俺はみゆに呪術が掛からなかったことで織斗が見せたあの表情を  
思い出した。

「みゆは、飲まなかったんだよ。あのカプセルを…自らの枷として  
な。自由を望まなかったんだ」

その答えを聞くなり納得した様子だった。まるでみゆが愚かなこ  
とをした、といった感じで。

「ほう…だからか。まあ、それでもここで同士討ちには変わりない。  
君らがいかに優秀でも第三の人類を全員相手にしてただではすま  
ないだろ？」

「嫌な奴だ…」

「そのまま大人しくここで散ってくれ…そして私との因縁を終わら  
せよう」

「お前は、何をしようとしている」

「世界の終わりと始まりを見たいのは、私も一緒だ。だから都市部  
に向かう。人類を滅ぼしに…」

「貴様！」

「私はいつも観客を装っているとお前は思っているのだろうか？  
それなら今回は観客ではなく、キャストとしてこの一連の輪の中  
に入るさ。それも主役でな」

そこまで話すと、織斗は、俺の前から立ち去ろうとした。

「ここから都市部まで私の作り上げた車なら一時間と少し…せいぜい無駄な足掻きを試してみるんだな」

後はよろしくといった様子でそのまま織斗はいなくなってしまうた。

俺とみゆの前には今までの中で一番難しい選択が迫られていた。

俺の持つ武器でこいつらは殺すことは可能だ。しかしそんなことでは何の解決にもならない。

みゆも滅多に流さない汗をかいていた。

どうする…

不死身の俺たちなら負けることはない。しかしここでゆっくりと時間を過ごしている余裕はない。

一時間と少しで織斗は地下の人間の場所へ乗り込んでしまう。

いや…もう部下の壊疽者が乗り込んでいる。歩いて一ヶ月以上掛かる場所からどうやって移動する？

頭が混乱しそうだ。そうしているうちに、

ひゅっ…

俺の目の前をレイブンの拳がかすめた。

織斗に操られたレイブンたちが一斉攻撃を仕掛けてきたのだ。

みゆはもうサティとセブエイを相手に戦っていた。

千里眼の持ち主と回復専門ならそうたいした戦闘にはならないだろうと思っていたが、それは甘かった。

サティもセブエイも戦闘の基本はできていた。サティは両手にナイフを握り、セブエイは剣を手にしていた。

千里眼で細かい動きを読み取り、サティの防御の結界で攻撃を防いでいた。

みゆは攻撃が思うようにあたらないで、相手に押される一方だった。

俺はというと、ティワンに動きを止められ、レイブンの攻撃が目の前に迫っているという絶体絶命の状況だった。

あらゆる物理を破壊する攻撃は、俺の体を砕いてしまいかもしれない。

それは避けなくては…

俺の四肢は動かなかったが、咄嗟に閃いた能力でその場をどうにか回避した。

空を切るレイブンの攻撃。ティワンはどうして動けたのか分らないといった様子だった。

答えは簡単だ。

時の能力を少し開花させたのだ。

以前三賢人との戦いで俺は、学んだ。

時を止める、進める、戻す。この能力は俺にも備わっているのではないか？そう思い、少しずつ操ることを覚えたのだ。

しかしどうしても完璧には扱えなかった。

ほんの数秒だけ時に干渉できる程度だった。やはりそれぞれの分野に特化している人間には適わないということなのだろうか。

それでもどうにか、自分の体には時の干渉を与えることはできた。

だから自らの体の時を俺は数秒戻したのだ。

動きを止められる数秒前まで。

そうすることで、俺の体は動いた。後は今いた場所にいなければ、その時の干渉は受けずにすむのだ。

そのまま俺はレイブんに攻撃を仕掛けた。

こうなれば気絶させるまでだ。

そう意気込んでみたものの、これはこれで難しかった。

達人の域に達している者を気絶させられるほど、俺の攻撃は高度ではない。

かわされ、追撃され、それをかわすの繰り返しがしばらく続いた。

「やれやれ……」

このままでは戦力でこちらが押し負けるのは明白だ。

みゆの方をちらりと見ると、同じように苦戦していた。

攻撃はされないものの、みゆの攻撃も全く当たらなかった。

時間は空しく過ぎていくばかりだった。

それにこいつらの攻撃もどんどん鋭くなっていく。防ぐことで手一杯だ。

だから已む無く俺は決断して、みゆに声をかけた。

## 41話

「みゆ！この場を離脱するぞ！」

みゆはその言葉を聞いて、簡単な返事をする、二人で全力疾走で傾斜を下った。

その場に残された者たちは意表をつかれた。俺たちから数秒送れて、動き始めた。

ティワンに足止めでもされたら厄介だ。最速でこの山を下りなくては。

振り返らないで一気に麓まで下りてきたが、最大の壁にぶち当たった。

サテイの張った結界だ。

これでこの山を覆っていたのだ。

そのことをすっかり忘れていたので、俺たちは寸でのところまで足を止めを喰らった。

背後から忍び寄る操られた強者たちが、すぐに追いついていた。

「くそ…こうなったら真っ向から行くしかないのかよ」

俺は戦いたくなかった。



なら…やるしかないのか。

覚悟を決めるしかなかった。俺はみゆに下がれと指示を出した。

「どうして！私も戦う」

大人しく従わないとは思っていたが、俺はどうしても俺自身の手でけりをつけたかった。

「いや…これは俺にやらせてくれ。お前の武器では難しいからな」

そう言っって自らの武器を取り出した。

「海…まさか…お前本気で」

みゆの気持ちも分つてはいた。しかし今はこうするしかない。

俺は前だけを見て、後ろを振り返ることはしなかった。

今まで仲間だった五人が俺に殺意をぶつけてくる。物凄い圧力だったが、俺はあくまで自然体を貫き通した。

親父からこれは学んだ。

親父は戦いにおいて徹底したプロだった。余計な感情を一切挟まず、目の前の敵を切り崩していた。

無駄なものは一切取り除き、自然に敵を壊す。

普段の俺からは考えられないが、それだけ集中していた。

そうしなければ、こちらがやられる。

勝負は一呼吸半…

達人なら一呼吸と言いたいところだが、俺はまだ未熟者だ。

半歩足りない。

武器を真っ直ぐに構えると、何も考えずに意識を細く鋭く尖らせた。

眼で相手を追うこともしない。

感じ取るんだ。

暗闇の中で一筋の光を探すように、じりじりとすり足で進む感覚にも似ている。

五人はそれぞれの能力で俺らを縛りにかかっていた。

だが、まだ俺は動かなかった。

レイブンが拳で、サティが防御の結界を張りながらナイフで、セブエイは剣で、ティワンは俺らの動きを止め、ナックスは後衛に回っていた。

それぞれの攻撃が肌に数ミリと迫った瞬間、俺は動いた。

大きく呼吸をひとつ吐くのと同時に全身を吹きぬける風のように

軽やかにそしてしなやかに一連の動作を完了させた。

俺は彼らを通り抜けるように移動していた。

その場所には静かな時間がすうつと流れていた。

彼らを背にそのまま攻撃の余韻に浸っていたのかもしれない。いや、すぐに振り返る勇気がなかったのだ。

それから間もなくして俺とみゆを残して、他の五人がばたばたと地面に倒れた。

「う…」

みゆはその一部始終を見て、言葉が思うようになかった。

俺が躊躇うこともなく仲間を切り捨てたことをどう表現していいのか分からなかった。

周囲を覆っていた結界もサティが倒れたことで崩壊していた。

これで外に出られる訳だが、互いにすぐに動こうとしなかった。

ここに見える現実には予想以上に俺らの心を深く傷つけたのだから。

今まで共に歩んできた仲間のその姿は、みゆにとっても俺以上に心に響いていたに違いない。

ただど前に進まなくてはならない。

そう思って、みゆの肩に手を置いて、

「時間がない…俺たちは先に進まなくてはならない。だから行こう」  
寂しくその一言をぽつりと口にした。

みゆも頭では分ってはいたのだが、思うように体がついてこないのが明白だ。

おぼつかない動作で俺の後を追ってきた。

そして俺たちは浮き足立ったまま都市部を目指そうとした。

## 42話

織斗がここを出て二十分は経とうとしていた。俺はとりあえず最後の門を時の雫に戻して自らの武器に吸収した。

時間はなかった。

こっちもぐずぐずしていたら織斗の計画に間に合わない。

しかし移動する乗り物を用意しているあたりが織斗らしい。

そんな風に感心している場合ではなかったので、俺もどうしたらいいか考えていた。

この世界に乗り物は存在しなかった。

その理由は要らないからである。必要な物は全て同じ場所で揃う。外部に出る理由が何一つない人間にとって乗り物は不要だったのだ。

だから織斗は作り出したのだ。来るこの日のために。

「どうしたらいい……」

俺は歩きながら考えていた。みゆも何か良い案がないか思案していたが、何一つと良い案が浮かばなかった。

「織斗のように乗り物があればな……」

そうも思ってみたが、それらしいものはどこにもなかった。

いや…ちらりそこを見てしまった俺は視線をそこからわざと逸らしてしまっただ。

そのままみゆと会話を続けた。

「走ったとしても何日掛かかるか分らない。このまま黙って待っているしかないのかよ！」

苛立ちながら愚痴をこぼしてしまった。

「海…」

「悪い…何も浮かばなくていらいらしていた。でも…何もできないで世界の終わりを迎えましたなんて嫌だろ？」

「それは私も同じだ。でも、足がいきなり速くなることは無理だし、乗り物もないとすれば…」

みゆの言葉はそこで止まったが、俺はその言葉で閃いた。

「まてよ…可能かもしれないな」

「え？どういうこと？」

俺はぶつぶつと一人で考えていた。そして自らの能力の中で唯一可能なことがあることを見つけたのだ。

「みゆ…どうにかなるかもしれない」

「え？」

「これは俺の憶測にしか過ぎない…でも俺の能力に賭けてみたいんだ」

俺はごくりと唾を飲み込んだ。

「危険な行為なのか？」

「さあ…そこまでは分らないさ。でも試す価値はある。

ただ…この話を聞く前に約束してほしい。俺の言うことを必ず聞くってことを」

俺はそのことを前提に話することを決めていた。

しかしみゆはどうしてそんなことを話すのか理解できないでいた。

「何だそれ？どうしてそんな必要がある。それほど危険だということなのか？」

「さあな、その条件を飲んでくれるかどうかだけを答えてくれ」

一切の情報を与えずにそのままみゆの答えだけを待っていた。

するとみゆは諦めにも似たような様子で、

「分ったよ。それでいい。海のことには必ず意味があるのだから私はそれに大人しく従うさ」

俺はほっとした。

みゆは一度口にしたことを覆すようなことはしない性格だからだ。  
だから正直に話した。

「簡単に話すと俺の時に干渉する能力を利用する。

と言つてもアルティルたちのようなそれぞれ突起した能力は存在しないんだがな…

それでも俺という狭い範囲だけでもそれは使えるんだ。だから、自らの体の時を進める」

「それは、海の体が数分後の場所に移動するということか？」

「ああ…だから自らの体を都市へ向かう一ヶ月後まで進める。

俺自身もどうなるかは分らないが、それでも一つの可能性には違いないんだ…」

「それで、私は何をすればいい？」

みゆが先ほどの約束を果たそうと聞いてきたが、俺は話すことに少し戸惑った。

「ここに残ってくれ」

そんな簡単な言葉だったが、みゆは不信感を丸出しだった。

「海は…私に戦うと話しているのか？」



やはりか…すんなりいかないとは思ってたが、しかし俺にも理由がある。きちんと説明しておこう。

「いいか…この能力は俺の体にしか使えない。だからみゆを連れて行くにはお前をおぶるでもしなければならぬんだ。」

それはどんなことになるか分かるよな？」

「それは…そうだけど…」

納得できないような納得できるような、そんなもどかしさを感じながら、みゆは俺の顔から視線を逸らしていた。

「ふて腐れるなよ…みゆにも大事な役割がある。」

壊疽者の残党がまだまだ残っているかもしれないんだ…だからお前はそれを一掃してくれ」

「でも…」

「いいか、ここからは時間の戦いだ。悪いが、みゆの提案を聞いている余裕はない。」

黙って従ってくれ…そういう約束だ」

俺は切って捨てるように言い放った。

するとみゆも俺の気迫に負けたのかそれ以上何も言えなかった。

「みゆ…俺は必ず織斗と決着をつける。だからそれまでの間頼む…お前がここに残ることが俺の活力にもなるし、先に進める」

そこまで話すと、みゆも感化されたのか、観念したのか、俺の言うことを素直に聞いた。

「すまない…最初の約束を破る形になってしまった。

でも…私もそれだけこの世界を変える気持ちは本気だということを知ってほしい。

海の提案は受け入れるよ、だから心配しないで前だけを向いて」

「ああ…そう言ってくれと俺も思っていた。

だから俺も後ろは振り向かない。このまま一気にこの世界を…いや、星を変える」

それから俺は、みゆを背にすると今まで以上に大きな決意の炎を体に燈して、堂々と歩いた。

## 43話

これで本当に全てが終わるだろう。

終わらせなくては、今まで係わってきた人間に申し訳が立たない。

友が死に、親父も死んだ。

俺だけが生き残るのには絶対に訳があるのだ。全ての物事の流れに意味のないものはない。

そう信じている。

新たなる一步を踏み出すその時は俺にも緊張感があった。

これから行うことは俺にもどうなるか分からないからだ。

思い切って大地を蹴り上げると体が数十メートル先に移動する。

それは体に羽でもついているかのように自らの体重や重力を感じさせなかった。

時の能力の一部である時間を進める行為を俺の体に施した。

これは何を意味するのか。

身体能力を無理やり数倍に跳ね上げるといふ行為なのだ。

数分掛かる距離もこれなら数秒で済む。ということは、一ヶ月掛

かるあの距離も数時間で済むということだ。

その能力を数秒進んだことで確かめたが、体がぐらついて眩暈がした。

それに体中が痛かった。無理な肉体の付加は予想以上の疲労と激痛を伴う。

そのことを知りながらも前へと進んだ。

それだけ進めるかは分らない。それでももつと速く進まなくては。

何度も何度も同じ行為を繰り返す。

その度に肉体は引き裂かれる思いだった。それに体中からは血が吹き出していた。

このままだと…肉体がばらばらになるかもしれない…

そんなことも脳裏を過ぎったが、歯を食いしばって再び肉体の覚醒を繰り返した。

四回目…五回目…

流石にやばい…血が止まらない。それに体中の震えも止まらない。

く…

どれほどの距離が進んだのだろうか。そのことも考えられなくなっていた。

いくら不死の能力を持ってしても俺にはみゆのような超再生能力

は備わっていない。

時間をかけて治るのだ。

だから持ち直すのには相当の時間を要する。しかしそのは待つてられない。

引きずるようにして、六度目の能力を開放する。

「あっ…」

バチイイイイン

体の健が切れるような音が耳の奥に響いた。

俺の足はもう動かなくなっていた。

がくんと方膝を地面について、痛みを必死に堪えていた。

「うっ…うっ…」

唇まで小刻みに震えている。移動だけでここまでのダメージを追っては織斗とやりあえるのだろうか？

そう思いながらも顔を上げると、目の前には見慣れた風景が広がっていた。

「これは…」

数キロ先には都市が見えた。

あれから一時間と少し…俺は間に合ったのだ。

織斗とほぼ同じ時間でこの場所にたどり着いた。

「よし…」

それだけで体の痛みは消え去った。

俺はゆっくり立ち上がると、片足を引きずりながら、どんどん進んでいった。

都市部は破滅の道を辿っていた。

町並みは完全に変わっていて、どちらかといつと荒野へと姿を変貌させていた。

「これは…」

明らかに誰かの手によってこうなっただけかと思えなかった。

人間達の住む地下への入り口も無警戒のままぽっかりと口を空けていた。そこからは煙も上がっていた。

やれやれ…人間の世界の牙城が崩されたことは間違いない。

しかし織斗はもう中に入ったのだろうか？

辺りを見回すが、誰の姿もない。

それなら急がなくては…そう思って俺も早速入り口の中へ飛び込もうとした時、悪寒を感じた。

未来を見る力で、何かが見えたのだ。

「う…」

どこからか俺ごと空間が切れるような映像が流れ込んだ。しかしその姿はない。

はっとして、咄嗟に後退して、入り口から離れた。

その瞬間にひゅっと空気が切れる音がした。

どこだ？

場所が上手く特定できない。

俺は再度辺りを見回したが、やはり誰の姿もない。だとしたらどこから攻撃をしている。

俺はすつと武器を抜いた。

「かか…勘だけは鋭いようだな」

声がどこからかする。

だが、その声の主はどこにいるのかは分らない。

気配もない。

だとしたら未来を見るしかない。

俺は次に迫る攻撃の軌道を正確に読んだ。が、体がついていけない。

ここまでの移動に要した能力の代償は軽いものではなかった。

膝ががくがくしていた。

血を流しすぎた…

そして右腕を深く切られた。

「あ…」

からんと握り締めていた希望の武器を落としてしまう。

「かかかか…もらった!」

追撃を仕掛けるようだが、俺にはその姿は未だに見えない。

どこからだ…

意識を集中させて、二度目の未来を見た。



後方か！

傷ついた右腕を押さえながら、大きくしゃがんだ。

「くそう！」

切り損ねたことで苛立つ声が聞こえた。

俺はそのまま闇雲に後方に向かって後ろ蹴りを放った。

がつん！

硬い物に靴底がぶつかり、跳ね飛ばす感触が確かにした。

「ぐあー！」

そいつはどつやら俺の蹴りを喰らって地面に転ばされたようだ。

地面の土が擦れているのが見て分った。

## 44話

「はあ…はあ…貴様はなんだ…」

俺も今にも倒れそうだった。しかし何も分らずに倒されるのだけは御免だ。

その場所にいるであろう人物を睨んでみた。

「俺は…壊疽者の塊の存在、キシ。そうそうイチはお前が殺したんだろ？」

かかかか…ありがとうよ。あいつはいけ好かない野郎だったからな代わりに殺してくれるなんてな…」

見えない姿の主は、イチが話していた。あいつと同じ存在の一人、キシだった。

こここの番人にでもなっているのだろうか？

こいつの能力は姿が消せるということか。それに気配…持っている武器までも見えない。

「いくら感謝してもよ。お前にはここで死んでもらう。それが織斗の野郎の願いだからな」

主人を呼び捨てとはよほど扱いづらい奴ということだ。見えないだけに気持ちが悪い。

「てめえとのくだらないおしゃべりもここで終わりだ。いい具合に

弱っているからな。ここで死ね！」

話の途中なのにそいつは既に移動していた。

くそ、情報もないままに再び戦闘開始かよ。

右腕はまだ神経が繋がっていない。ここまでを負ったダメージは六割回復というところ。

血もまだ流れ続けている。

キシはそんなことお構い無しにどんどん攻撃を続けてきた。

「う…」

未来を読む力も間に合わない位に攻撃が続いた。俺は勘だけでほとんどの攻撃を避けた。

それでも半分は体を切り刻まれた。

俺は体に直接攻撃を受けて、敵の武器を把握した。

まずは二刀流だということ。

短刀と、長い刀を使い分けて、距離が遠ければ長い刀で切り、距離が縮まれば短刀で急所を突いてくる。

俺は未だに武器を握ることができなかつたから、どうにか攻撃をかわすことで精一杯だった。

「はあ…はあ…」

息は上がり、無様に地面に転がされることもしばしばあった。

そして遂に俺は動きの基盤である右足を地面に向かって武器ごと貫かれた。

「ぐああああああ」

くそ！右足が動かない。

まじかよ…武器ごとその場に置きっぱなしか。思わず尻餅をついてしまった。

痛みに時間を取られている間に今度は右手に激痛が。

「か…」

右手を右足と同じように地面に貫かれた。

これで身動きがほとんどできなくなった。

やばい…このままでは…

俺は誰でも想像できる結末を考えていた。

首を切り落とす…それしかない。

見える…

新たな斬撃が俺の首を吹き飛ばすのが。

それなら…

これも試したことがなかったが、迷っている暇はない。自らの体に時の能力をむりやりかけてみた。

時を戻す能力。

数秒前まで体を戻す。まるでビデオの巻き戻しのように、刺さっていた刀は体から抜け出た。

「む…」

刀は数秒前の元の場所まで飛んでいった。それを見た敵の動きも追撃をする前に止まってしまった。

それで体の回復と動きは取り戻せたが、この能力は未だにしっくりこない。使い終わった後には視界がぐにやりと歪む。

俺は全ての能力を完全に使いこなせるわけではない。苦手な分野もある。

それでも危機を脱したことは確かだ。

どうにか体を動かして、最大の難関を乗り越える。

相手も武器を拾い上げると、すぐに俺の姿を追ってくる。

数秒に満たない間に危機は再度迫ってくる。これの繰り返しはい

い加減にうんざりだ。

肉体は回復しても壊される…

「奇妙な技だが、これで終わりだ」

キシは手にした武器でふらふらの俺の体を貫こうとした。

それなら…

俺もすぐに武器を拾い上げて、見えない敵に構えた。

そして脱力して肌で空気を切り裂く動きを読む。

相手の体が動けば、必ず大気は揺れる。

右…左…

かく乱させるように左右に高速で動いているのが何となく分かる。

今まで見えなかった相手の動きが、残像のように見えた。

「死ね！」

声でその場所をはっきりと特定。

キシの姿は右斜め方向、一メートル先だ。

俺は躊躇うこともなくその場所に踏み出すと何も無い空間に自らの武器を一直線に突き刺した。

ずん…

手に残る重たい感覚。

俺の武器の先は何故か消えていた。

「ぐああああああああ」

叫び声と共に俺の消えていた武器の先が姿を現した。

やった。

手ごたえは十分だ。

恐らく相手が人間の姿をしているのなら、腹部を貫いたはずだ。

しかし未だにどこにいるのかわからない。血痕すら残らないなんて…

こいつの体に触れているもの全てが消えるということなのか？

そうこう考えていると、あいつの声が聞こえた。

「貴様…許さんぞ…」

「がたがた言うなよ。お前だって数千の命の集合体なのだろう？絶命には至らないはずだ」

相手の情報がほとんどないので、そうやって探りを入れてみた。

すると、今までほとんど話さなかったキシは流暢に話をした。

「例え絶命に至らないかもしれないかもしれませんが、貴様なんぞに傷を付けられたのは腹立たしい。」

俺は、イチのアホみたいに命のストックなんか持ち合わせていないからな…

あいつは自らの命を失わないことを必死に追求していた臆病な奴だ。そんな奴と一緒にするな！」

怒りを俺にぶつけてきたが、見えない相手ではその表情も分からない。



## 45話

「お前の特異な能力は触れたものを透明にでもするの？」

「かかか…正解だ。俺の皮膚にはそういった能力がある…体液も同様に…」

だから血も透明って訳か。

「お前は織斗の駒なのか？何を望んで戦っている」

「愚問だな。俺は俺以外の生命が許せないんだよ。人間は下等なくせに俺らを上回っていると勘違いしている。」

織斗の野郎も人間だが、今は奴に協力してやっているだけだ。いずれは殺してやるよ」

計画性のない奴だ。

これではどうしようもないな…

「何故協力をする？お前に何のメリットもないだろうが…」

「あいつには俺の命を握られているからな。それを取り戻すまでは殺せないんだよ」

そういうことが…

俺もこいつの情報が少し貰えた訳だし、これ以上無駄な戦いは避けたい。

それなら…

「俺の話も聞いてくれないか？」

「何だ？命乞いは聞きたかねえな」

「そうじゃない。取引をしたい…もしもお前が識斗を倒すのに協力してくれたら、お前の望みも叶える」

ひとまず無意味な戦いは避けたいということと、気持ちを落ち着けたかった。それも相手次第なのだが…

「俺の望みだ？お前らを労せず殺せるってことか？」

若干ではあったが、俺の話に食いついてくれた。

これで少し相手の気も紛らわすことができる。俺はそう思ってた。つくりと話した。

「いや…労せずするのは無理だ。真っ向から勝負してやるってことだよ。最後の生き残りを賭けてな」

話に夢中になる振りをしながらも俺は例の入り口をちらちらと何度も確認していた。

いつでも瞬発的に動けるように、体をゆっくりと動かし、細胞の一つ一つに活力を与えながら集中していた。

キシは話を聞いて笑っていた。表情は当然分らない。

「くくく…面白いことを言う。そのどこにメリットがあるんだよ。所詮は延命のための策か？せこい真似を…」

「織斗を殺すことが容易ではないのは、お前も知っているのだから？それならいざねお前の障害になるであろう人物は早めに排除した方がいいかと思っとな。

だから共闘をとろうという提案だ…」

その言葉にすぐに従う奴ではないことも分かつてはいたが、利害が一致しているのなら乗ってくることもある程度期待してしまった。

怒り狂って俺の意見を正面から否定することも覚悟したが、意外にも相手は冷静だった。

「そう言うお前は…織斗の何なんだ？あいつはお前のことを名指しで殺せと言ってきた。

あの能面野郎があそこまで感情を露にするのは珍しかったからな」  
まるで嬉しそうだった。

「それは…」

次の言葉を言いかけると同時に全身の力を一気に解放させるかのように体の時を急激に進めた。

瞬間移動のように俺の姿はその場から忽然と消えた。

「あ…」

キシは咄嗟のことで呆気にとられた。

「貴様！」

してやられたといった感じで、俺の後を追いかけてきた。でも俺にはその姿は見えない。

俺は既にキシよりも数十メートル先にいた。

話をしていなければやばかった。

俺の体にかける時の能力は発動までに時間が掛かる。

こんな大胆な行動は、すぐにはれるから戦闘には向かないのだ。話に夢中になってくれて助かった。

そしてそのまま記憶を辿って、地下への道をどんどん進んだ。

当然、エレベーターは壊されているだろう。そう判断して、みゆに事前に聞いていた非常口を目指した。

見たことのない大きな入り口だったが、俺は足の速度を緩めないで、迷うことなくその中へ入る。

地下十数キロにも及ぶあの場所に到達するには最短でも三時間は掛かる。歩いていくのならその倍は掛かるだろう。

俺は頭と体を最大限に稼働させながら進んでいた。そして体に時を進める能力をふんだんに使った。

「が……」

何回か足が止まった。

体の負荷はどうしようもないからだ。また体中から血が滴り落ちる。

筋肉の断裂も激しくなっている。先ほどの戦いでダメージも幾分か残っていたのだ。

「はあ……はあ……」

何度やってもこれは俺向きではない。

時を止める、進める、戻す……あの三賢人はよくやっていたな。

引きずるようにして暗い通路を歩いた。

残り数キロと言ったところだろう。時間はかれこれ二時間は掛かっていた。

体を倍速に移動させても非常口を使っているから当然なのだ。

通常ルートの倍かかるからだ。

織斗が最短で三時間でたどり着いたとしてぎりぎりかもしれない。

ふらふらと歩きながら更に体を倍速移動する。

一時間後には地下の人間の住む空間にどうにかたどり着いた。

最後の重々しい扉を開くと、そこはもはや俺の覚えているあの空間ではなかった。

「これは…」

ぐちゃぐちゃに壊れた世界。

転がるたくさんの死体。

## 46話

俺は呼吸を整える間もなく、大聖堂を目指した。

その間に人間の死体の数は十数あった。どれもこれも人間の手で殺されたようなものではない。

体をばっさりと大きな鉈で切られたように、大きく切り離されていたり、破裂しているものもあった。

「くそ…織斗らしい…」

そう思いながら数分で大聖堂のある場所に着いた。まだ大聖堂は破壊されてはいなかった。

汚れた世界に無傷の建物は逆に奇妙な感じだ。

セウロは殺されたのだろうか？

そんな不安を抱きながら扉を開くと、そこにはセウロと織斗と見慣れない女が立っていた。

セウロは織斗を前にして少し怯えている様子だった。

「おやおや…」

俺の姿を見て織斗は眉一つ動かさなかった。

「おい！織斗」

俺は叫びながら近づいていった。かつかつと靴音が響き渡る。

そして恐怖を感じることもなく、胸倉を思い切り掴んだ。

「てめえ！」

そのまま思い切り握り締めた拳を顔面に叩き込もうとしたが、それは寸での所で第三者に止められた。

脇にいた女だ。

髪の毛長いスレンダーな女性で、背は俺よりも低い。そして瞳は青く、切れ長で冷酷な性格を表しているかのようだった。

俺の全力の拳をまるでもろともしないで、片手で受け止めていた。

それからそのまま空いている手で逆に殴られた。

「ぐっ！」

後ろの長椅子にそのまま叩きつけられ、ひっくり返ってしまった。

女の力では到底無理だ。

「良かったな…こいつが加減をしてくれて」

「何だと？」

俺は殴られた右頬を手で押さえながら起き上がった。



「こいつが本気を出したら貴様とて、一瞬であの世行きだ。  
表の人間の末路を見たのだろう？あれは全て彼女の仕業だ」

寒気がした。その女はその時の光景を思い出して高笑いをしてい  
たからだ。

「はははははははははははははははは」

女性の高い声は聖堂の中にわんわんと響いて俺の耳を刺激する。

聞きたくない声だ。心の底から人を不快にさせる…

「何がおかしい！」

「だってさ…楽しかったんだもん。今まで私らを圧倒的な力でじわ  
じわと追い詰めてきた人間が…」

あんなにも…簡単に、脆く、壊れていくんだもの。これを笑わな  
いでいられる？」

「く…」

「第三の人類とやらまで作り出して、高みの見物決め込んでいた卑  
怯な奴らがさ…」

逃げ惑って、怯えて命乞いまでしてるんだよ？死んで当然だよ…  
自分らは死なないと勘違いしてるんだもの。理想ばかり追い求め  
てこんな贅沢な暮らししやがって。

むかつく…むかつく…むかつく…

「落ち着け、マヒメ」

織斗は女の肩に手を触れた。

「お前の感情の高ぶりは相変わらず手がつけられないな…だが、分ったかな？」

「これが現実ということを」

俺の方に視線を移すのに冷めた眼で訴えかけた。

「押さえつけられた反動は必ずどこかで生じる。」

そして人間は間違った歴史を築いてしまったことを認めようとしていない。

「いずれは大丈夫だ、きつと何とかなる。そんな言葉で濁してな…」

「お前も同じ人間だろうが！だとしたらお前も愚かということになる」

「分かっているさ。人間は愚かだ。だからリセットしよう。」

「一から…そして壊疽者と共に新人類を作るのだ。人間ではない生物を…」

アルタイルとセウロは思い通りの世界を築くことが最終目標だ。

そして織斗は新たな生物を創造しようとしている。

「この中に正解はあるのだろうか？」

そんなことは俺には分からなかった。だって、世界を…星を手中に収めるということはそれぞれの意思があるのだから。

俺だって願いはある。でも…俺がいなくなればそれも叶わない。

「それで…そのマヒメだったかは、織斗の意見に賛成なのかよ？  
お前もこいつの計画に利用されているだけなのかもしれないんだ  
ぞ？」

俺はマヒメを見た。

「ベーツに…私は、人間を皆殺しにできればそれでいいよ。生きる  
目的なんかない。」

あ…そういえば織斗も人間なんだっけ？これだと矛盾しちゃうか  
あー」

こいつのテンションにはついていけそうにもない。完全に情緒が  
不安定だ。

「あなた、第三の人類なんだっけか…それなら私と一緒にこいつ殺  
さない？」

セウ口を指差した。

「こいつに作り上げられた者と、その失敗作の集合体同士気が合う  
んじゃないかな？」

玩具のように私達を作り上げた気分はどんな気分？」

セウ口の髪の毛を引っ張りあげて脅かした。

「く…うう」

何も言えないセウ口は惨めな老人にしか見えなかった。

今までのような何事にも屈することのない人物がここまで追い詰

められている。

俺は複雑な心境だった。

しかしマヒメの言葉でほいほいと従うほど尻軽でもないし、信念を曲げるつもりはなかった。

「止めるよ。確かに…そいつは最低な野郎かもしれないけど、殺されると困るんでな」

「どうして？こんな奴死んでも困らないでしょ」

「こいつにはな…最後を見届ける権利があるんだ。時の雫を元に戻した時のな…」

「何？あんた馬鹿なの？それとも詩人？臭すぎるよその台詞。」

憎むべき存在を目の前にしてそんな言葉を口に出来るなんて頭いかれてるのね」

お前に言われたくない。

## 47話

「哀れな老人。あんたも何か話したら？こうなることなんて予想もつかなかったでしょ？」

自分が勝つのが当たり前だと思っていたんだから」

セウ口を見下し唾でも吐きそうな勢이었다。そして対するセウ口もこの場で初めて口を開いた。

「私は…自らの行為に恥じるべきことは何もない。全ては間違いではない。次に繋がる行為だと思っている…」

自らの積み上げてきたことを否定することは決してしないで、それを逆に糧にして生きてきたことを強調した。

しかしそんな美学はマヒメの心に響くはずもない。

「はん！言い訳だね。失敗した時の…逃げ口上ばかり用意して。だから人間は大嫌いだ。」

どうして、私達は間違いでしたーすいませんって言えないんだよ」！

マヒメはむかついたのか、いきなりセウ口を裏拳で殴りつけた。

死なない程度に手心を加えているつもりだが、老人にその衝撃は大きいものだった。

鼻血を吹き出しながら思い切り後頭部を背後の壁に叩きつけられていた。

「ごめん。このぐらいで死なないでね。だって…お楽しみは最後まで取っておきたいからさ」

眼が笑っていない。こいつは…セウ口を確実になぶり殺すつもりだ。

拳についた血を汚いものでも扱うようにふき取っていた。

「それで、あんたはどうしたいわけ？私とここでやりあう？それでもいいけどさ。」

私さ、あんたに手加減なんかできないよ。五体ばらばらにするかもしれないけどそれでもいい？」

こいつに裏表など存在しない。だから口にしたことは実行するだろう。

俺は得体の知れない恐怖を感じながらもそれを必死に飲み込んだ。

「別に構わない。俺はここで全てを終わらせるつもりでお前らの立っているのだからな」

決して強がりではない。俺も俺でここにいる理由はあるのだ。誰に動かされる訳でもない自分のはっきりとした意思が。

「ほう…見ないうちによほどたくましくなったようだ。私と以前戦った時とは違うな。」

きつとたくさんの強者とやりあった証拠でもあるのだろう。

マヒメ！受けてやれ。その間に私はこいつを預かって奥に引っ込んでる」

セウ口の襟首を掴むとぐいっと思いつき張り切った。

「お前が勝った時の報酬としてこいつをくれてやる…だからさっさと済ませてこい」

そのまま奥の部屋へと引込んだ。

それを見たマヒメはますますやる気を出した。

「くくくく…あいつを速く殺したい…殺してやりたいよ！」

それにはお前が邪魔だ。さあ、望みどおりやりあってやるよ。どんな死に方が望み？」

みやりと笑って俺の方を見ると、怪しく目の色がぐるりと変わった。

俺はそれを見てしまった瞬間、何かを感じた。

こっくにいてはまずい。

すぐにたくさん並ぶ長いすの陰に隠れた。

すると…

バアアアアアアン

大理石の床がはじけ飛んで盛り上がっていた。

「う…」

それは数秒前まで俺のいた場所だ。

あのまま黙っていたら俺の体はばらばらになっていたかもしれない。

「ちっ…逃げたか」

マヒメは攻撃を外したことで、すぐに動いた。俺の隠れた場所に走ってきたのだ。

この場所にいたらまずいと思い、すぐに起き上がって、長椅子の上をぴよんぴよんと跳ねて距離を取った。

すると誘導弾のように俺の背後の長椅子が順番にばらばらになっている。

おいおい…何もしていないのに、どうしてここまでの破壊力がある。

どうにか奴の視界から逃れるように柱の影に滑り込むように隠れることができた。

「くそ…」

聖堂の中は既にめちゃくちゃだった。粉々になった長椅子の残骸があちこちに飛び散り元の姿が分からなくなった。



あいつは俺の姿を見失ってきよろきよろしている。

こっちからは丸見えだが、向こうからは見えていない。

それにしても…あいつの能力は見るだけで物を壊せるってことか…

八鬼の空間干渉能力を凶悪にしたものだな。範囲も威力も特定で  
きない…

下手すればこの建物も一瞬で破壊しかねない。

しかし、あの目を潰せば勝機は見えてくる。

アルタイルたちもそうだったが、目でまず確認をしなくては目的  
の物体に自らの能力を掛けることはできないのが弱点だ。

そう思い、親父のことを思い出した。

ベガの眼球を躊躇うことなく傷つけたあの時のことを…

残酷かもしれないが、これは殺し合いだ。俺もやるしかない。

そう思い、その場にあつた木片や鉄片を幾つか拾い上げた。

その一つ一つは壊れて先が鋭利に尖っていた。これは十分使える。  
そう思いすぐに動いた。

時間との勝負なら、迷いは絶対に抱いてはいけない。

この世界で俺が何度も気付かされたことだ。

鋭く尖った木片や鉄片を移動しながらマヒメに投げつけた。

俺の筋力でも刺されば肉を貫くだろう。

マヒメはそれを手で払い落としていた。しかし俺は同時に距離を詰めながら場所を特定させなかった。

五メートル、四メートル。

少しずつ距離を縮めながら相手の様子を伺った。

投げるものはすぐに尽きたが、地面を漁ればいろいろ見つかる。

大理石の破片も落ちている。それも武器にした。

そして円を描くように距離を詰め、奴との直線距離三メートルまで迫った瞬間、俺は全てを賭けて飛び込んだ。

これには勇気がいる。もしもマヒメが放つ能力が先なら俺は無力にその場にばらばらになるだろう。

そんな不安もあったが、強い気持ちで三メートルの距離を一呼吸で詰めた。

相手とはぱっと目があったが、俺の方が速い。

マヒメの眼球が怪しく光ると同時に俺は横一直線に彼女の眼球を切り裂いてやった。

「ぐ…あああああああああああ」

軟らかいものを切った。そんな感じだが叫び声を聞いてそんな感覚も忘れ去られた。

マヒメは両目を押さええて苦しんでいた。

もしこいつがイチのように何体生命体の集合ならやばいが、痛みを訴えてるといことはそうではないということだ。

それはキシが先ほど照明してくれたからな。

ほっと胸を撫で下ろしながらも警戒心は決して解かない。

ここで相手が怒り狂って闇雲の反撃を繰り出した時にとばかりを喰らう可能性だってあるのだから。

実に冷静に相手の動向を伺い、決して目を離さなかった。

武器を構えいつでも追撃の準備が出来るように整えておいた。

しかしマヒメは叫び声を上げてから反撃をすぐにすることはなかった。

## 48話

その場で両目をぐっと押さえると、しばらくして声を上げることが止め、何事もなかったかのように両手も目から離れた。

気持ちの悪いほど冷静になりその目は瞑られたままだったが、血は流れ出していた。

確実にダメージはある。しかしこの空気はなんだ？

追い詰めた感じが全くしない。

そうこうしているよ、

「ごきん！」

俺の左腕がぐるりと回転して、有り得ない方向に捻じ曲がった。

「ぐ…ああああああああ」

倒れはしなかったものの、痛みでマヒメのように叫び声を上げた。

「はははは…ようやっとちょこまか動いている鼠が止まったねえ…」

その言葉で俺は再度悪寒を感じる。

左手を押さえながら焦りながらすぐにそこから移動した。

しかし

「右斜め三十度の方向！」

そうマヒメが叫ぶと、俺の左足が簡単に折れた。

「ぐあああああああ」

今度はその場に崩れ落ちそうになったが、どうにか踏ん張った。

このままでは格好の餌食だ。

俺はどうしたらいいのか何も浮かばなかった。

「どうして…お前…目が見えなくなったのに…」

歯がゆさを感じながらマヒメを睨んだ。

すると彼女はくくくくくと目を瞑ったまま笑っただけだった。

「その様子だと、手と足が駄目になったようだね。あんたは大きな勘違いをしている。」

だから私の能力を止めることは出来なかった」

「勘違いだ？」

「目で相手を捕らえて能力を発動するってことさ…これはさ…目ではなく脳なんだよ。」

思念が物体を破壊する能力。だから目が潰れても相手の気配のする場所に集中すればそれが可能なのさ。

唯一の武器だったあなたの動きが止まれば簡単なことなのさ…  
はははは！さあ、このまま大人しく死ぬかい？それもいいけどさ…  
悔しいのはあなたの死体がこの目で見られないってことだけど、  
セウロって奴の叫び声で満足してやるからまあいいよ、別に。  
さあ…どんな死に方がお望み？上半身と下半身が真っ二つ？それ  
とも首を一気に捻り上げる？」

どちらも悪趣味だが、俺には一筋の光が見えた気がした。

「どちらも遠慮しておこうか…」

「そう…せっかくこちらから死に方を迷わないように提案してあげ  
たのに…ならこのまま死になさい！」

その言葉が出る前に俺は相手に向かって唯一の武器を一直線に投  
げつけた。

「え？」

俺に死の能力をかけることよりも身の危険が迫ったと判断したマ  
ヒメは避けることに専念した。

その間に俺は再度距離を詰めた。

以前のように軽快にはできない。倍以上の時間が掛かった。

「小細工を！」

マヒメはそう言って自らの迫る俺の気配に殺意の塊をぶつけた。

俺の右腕は無残にも吹き飛ばされた。

しかし俺はそれでも止まらない。

自らの体ごとマヒメの体にぶつけて

機能しない左腕を無理やりマヒメの頭に押さえつけてそのまま体重を乗せて地面に叩きつけた。

ずん！

地面に落ちると同時に体が鈍い音で包まれた。

「か…あ…あ…」

びくびくとマヒメの体が動いているのが触れているから良く分かる。

口を大きく開いて、何故だ？という意思表示を声に出さないうでしていた。

彼女は致命傷を負ったのだ。

俺はどうにかして自分の体を起こした。

左腕はひしゃげ、左足は折れ、右腕はなかった。それでも全身を真っ赤に染めて、マヒメのことを見下すように立っていた。

マヒメは後頭部を地面から突き出すように出ていた鉄片に貫かれ

生きているのか死んでいるのか分からない状態だった。

「ど…どうして…私が…」

震える唇で話しかけられた。

「お前の能力は確かにすごい…でも…目が見えなくなったことで、自分の周りの地形まで把握していなかった。

俺はそれを利用しただけだ。だから…結果的にお前の目を潰すことができて良かったよ…本当に…」

「ち…畜生」

そう言つと、そのまま人間のように息を引き取りさらさらと砂のように消えてしまった。

そしてその命の源であろう中心にあった光が後ろに落ちている俺の武器の時の雫の欠片に吸収されていった。

「く…はあ…しんどい相手だったな…」

俺はその場に座って呼吸を整えることで精一杯だった。

吹き飛んだ右腕もいずれはくつつくだらう。

そう思い落ちていた右腕を拾い上げ、破裂した面にぐっと押し付けると思議と離れて落ちることはなかった。

だが、骨も神経も繋がってはいない。動かすことができなかった。



左腕や左足も同じようにすぐには治らなかった。

「やっ…」

俺はセウロが連れて行かれた先の部屋を見た。

ぼろぼろの状態で逃げたくなっていたのも事実だが、そんなこと誰が期待する？

俺は最終局面に立ったのだ。ここからが本当の戦いだ。

暗く長い廊下を歩き、奥へ奥へと進むと、核シエルターを思わせるような近代的な分厚い扉があった。しかしそこは開いていた。

俺はそのままその中へ入ると、更に道は続いていた。

いったいどこまで続く…

体の回復を少しずつできるのは嬉しいが、変な間が空くのは俺の気持ちも萎えてしまう。

呼吸を整えながら歩き続けた。

そして遂に最後の部屋であろう場所にたどり着いた。

「ここか？」

俺は丸い金庫のような扉の中心にある金属の棒をぐるりと回した。

すると、どごとんと重低音を響き渡らせて、重々しい扉は開いた。



## 49話

「ようこそ…海。やはり君が来ると思っていた」

三条織斗は俺を歓迎するかのように堂々と立っていた。

一方、セウロは死なない程度の攻撃を受けて床に転がされていた。

「なあ…織斗。お前、こうなることを知っていたのか？俺がここに  
来ることも…」

俺はどこか織斗の表情に違和感を感じていた。それは俺が来ても  
待ちわびているようで、動揺をまるでしていない。

計算の内だといった感じで、冷静な状態を保っている。

こいつは策士だ。それならば、それなりの用意をしてからでなく  
ては、こんな大それた計画をするはずもないのだ。

「何故、そう思う？」

「俺が来なければ、セウロ同様に全てが揃わないだろう？」

お前は時の雫の力を必要ない振りをしているがそうではない。

俺の力が必要なんだ…だから待っていた。俺が大聖堂に来るのを」

「マヒメたちが敗れるのも計算の内だと言えるほどお前は傲慢なの  
か？」

「ああ…そうしなければ、全てがここに揃わないからな。」

時の雫を含んだ生命体はもう、俺とみゆを残して他はいないことになる…

ここでお前は俺からこの武器を奪い、俺とみゆを殺せば全てが成就することになるんだ。

思い描く世界に…どうだ、違うか？」

俺は未だに垂れ落ちる血液を気にすることもなくただ織斗の目だけを覗いていた。

しかしこいつは、感情をまるで表に出さないから、目を見ているだけでは分からない。

望みを持っているくせに、熱意も感じさせないとは…

すると織斗は拍手をしていた。

「正解」

「貴様…」

「まあ、それでもみゆがここにいないのは誤算だったがな。

わざわざ俺を追って来れるように車も側に隠しておいたのに…どうやら探せなかったようだな」

その点が納得できないようだったが、それは違う。

「いや…俺があえてそうしたんだよ。都合が良すぎると思ってな。みゆには内緒にして見ない振りをしていたんだよ」

俺は見ていたんだ。あの時。

しかしそれを見ない振りして、みゆにこれからのことを提案したのだ。

「そこまで切れる奴とはな…」

皮肉なのか織斗は俺を複雑な表情で見ている。

「褒めてくれてありがとうよ。だが、ここで終わるのは俺ではなく、お前の方なんだよ。」

お前が以前のお前でないとしたら、俺も同じだ。貴様を殺すことに一切躊躇はしない。

どうだ？織斗。俺に勝てる自信はあるのかよ？」

あえて挑発を試みた。それは相手の出方を知るためでもあった。

しかし織斗はいたって平然を装っていた。

相変わらずのきざ野郎だ。

俺は無性に腹が立っていた。ここが経験の違いなのだろう。

「お前は…私が怒りに身を任せてこのまま無謀に戦いを挑むとでも思ったのか？」

それは少し思っていた。そうすることで勝機も見えてくるからだ。

「以前の私なら多少なりとも動揺もし、自らが戦うことは避けただらう。」

だが…今は違う。私は自らでも十分戦えるのだよ」

「え？」

予想しない言葉が声に出ていた。

まさか…そんな…あれほど前に出ることを嫌っていた男がか？

「はったりはよせ。確かに以前と違い前には出ているが、それも所詮はスタイルなんだろ？」

騙し打ちや裏をかかれるのはもうこりこりなんだよ…」

俺は一笑して織斗の発言を否定したが、織斗は本気だった。

「本当にそう思うのか？私から発せられる殺気を感じ取って同じことが言えるのかな？」

そこまで言うと、織斗の体を渦巻く空気の色が急に变化した。

まるで穏やかな水色だったものがどす黒いものに染まった感じだ。

やばい…

本能でそれを感じ取ることができた。

「お前…」

俺は正直驚いていた。今まで戦ってきた敵の中でこれ程の純粹な憎悪を感じたことがなかったからだ。

俺は人から恨みを買ったことはほとんどなかった。買ったとしても

その恨みの度合いは大したことはない。

すぐに消え去ってしまっただけのものだ。

しかし織斗が発している俺に対する恨みは、俺そのものを飲み込もうとしている。

あの時の戦いがきつかけだったのだろう。

彼の本当の能力を俺同様に開放してしまったのかもしれない。

汗が頬をつたい、背中にはぴりぴりと刺激を感じる。

最大の敵を目の前にして、俺は気迫で押されていた。

あれから二年近く経過していたが、私の周りの変化は目まぐるしかった。

神徒協会は事実上の破滅を迎えていた。

三賢人が亡くなって数ヶ月で、その変化にいち早く気がついたのは、世界に散らばる護門徒だった。

門が次々と消滅している現実には動揺し信徒協会本部を訪ねようとしていたのだ。

しかしそれを防ぐかのように、八鬼は動いていた。

唐津紅蓮をはじめとするメンバーは残党を一掃する計画を立てていた。

今までの因縁に決着をつけるかのように護門徒の一人ひとりを暗殺していたのだ。

六人ほどいた護門徒も彼らの手に掛かれば、赤子同然だった。

八鬼の能力者が協力すればそれだけで戦闘力は数倍にも膨れ上がる。

正々堂々一対一といった武士道に基づき美しき戦いなどしなかった。効率よく、確実にその一人ひとりを亡き者にしていった。



だから時間もそう掛からない。

事実三ヶ月で全ての事が済んでしまったのだ。

それからはゆっくりと信者の間にも三賢人死亡説が浮上し、自殺する者、

自然にそこから抜け出す者、新しい宗教団体を作り上げようとする者、実に様々だった。

しかし新たな不穏分子を作るわけにもいかないのです、八鬼は常にその情勢を警戒し、大きな団体になる前にそれを潰していた。

そして私はといえば、どちらかといえば蚊帳の外で、自分の国の警護をすることで精一杯だった。

神徒協会の作り上げていた遺伝子操作に失敗した能力者は異常者として暴れているケースが多い。

それがこの国にも何十人と紛れていたのだ。

以前は海の父親、月夜灯がそれを裏で抹殺していたのだが、今はその役目を私と、表八鬼のメンバーで引き継いだ。

今思えば、月夜灯は物凄い能力者だということが分かる。

異常者の一人ひとりのスキルは私以上に高く、八鬼と同等と言っても過言ではない。

それなのに彼はたった一人でそれを駆除していたのだ。

異常者の弱点は、冷静な判断ができない。そして自らの欲望に忠実だということだ。

だから複数で連携して攻撃すれば殺すことも可能なのだ。

そして灯は自らの信用できる警察関係者にそれらの遺体の処理を頼み事実を闇に葬っていた。

私らも同じように灯の意思を継ぐ者にそれを明け渡した。

皆、国を想う気持ちは同じなのだ。

私は学業に専念することはあまりできず、鍛錬と警護の毎日を追われていた。

それでもあの八鬼最強の女性、

新城冬香が学生時代に同じ状況をもろともしなかったという話を聞いてしまったのだから根を上げる訳にもいかない。

しかしそれも二年の年月を過ぎた頃には、だいぶ落ち着いたので。

世界の情勢は明確に均衡を保ち、異常者は極端に数を減らした。

それと比例するように凶悪犯罪、異常犯罪、テロ行為は激減した。

誰しもがほっとした様子だった。

だから父親からも言われた。

「長い間ご苦労だったな。でももう大丈夫だ。お前もそろそろ学業

の方にも専念しなさい。

きつとお前にも能力とは関係無しに出来ることがこの先見つかるのかもしれない。

だから…それを若い今の内に探しなさい」

それは心に響いた。

私は生まれながら普通ではないと思い込ませていたのに開放された気分だった。

しかしそれをすぐに受け入れるのは難しい。少しずつゆっくり自分のことを考えようとも思った。

幸い剣道の推薦で大学にも進学することができたので、ここで何かを探そう。

自分のしたいこと…

こんな時に海がいたら相談に乗ってくれるんだけどな…

いないと分かっているつもりでもついつい彼のことを思い浮かべてしまう。

姿を消してから二年。

長いようで短くも感じられたが、一時も海のことを忘れたことはなかった。

あいつの最後に残した言葉を信じていた。あいつはいつでも言葉にしたことは守っていた。だから…必ず帰ってくる。

そう強く自分に言い聞かせながら、彼と再会できることを強く願っていた。

でも、海は…一体、今向こうの世界でどうしているのだろうか？

無事だろうか？

それに…今の私を見ても幻滅しないだろうか？

## 51話

俺は相変わらず動けない状態だった。それは体が負傷しているからではない。

気持ちの問題だ。

一気に踏み込めさせない何かをこいつは確実に持っている。

右腕はくつついて間もないので、動かせない。

左腕も少しずつ元に戻っているが、かろうじて武器が持てる状態で思い切り振り回したり、突くことはできない。

だから両腕は死んだも同然なのだ。

「迷っているな？私が今までにない空気を見に纏っているから…」

その通りだ。

不用意に近づいて武器を奪われ俺もこれで体を貫かれたら絶命は免れない。

織斗のことだからそのことも知っている。

「海…お前は時の能力を操れるらしいな。

しかし自らの体にかける、時を進める能力と戻す能力…あまり戦闘向きとは思えないが？」

「まあな…これは戦闘向きじゃない。どちらかといったら貴様と初めてやりあつた未来を見る能力の方が戦闘向きだ…」

「お前は時の雫を元に戻して何を望む気だ？」

希望の子どもとまで言われて、世界の全てを担う気持ちはどうだ？環境は人を変える。

もしもお前がここでずっと育っていたら迷うことなくそのセウ口の命じたままにあれを使うだろうよ」

それもそうだ。

その意見に間違いはない。環境が俺を変えたんだからな。

でも俺は良い方に自分が進んだと信じていた。

「そうかもな…だが、今は違う。俺は向こうの世界で育つた人間だからな」

「人間…くくく…お前は人間ではない。化け物だ。

そんな人の手に余る力を持ち合わせた人間が存在する訳がないだろっ…」

動揺させる気か？

だけどそんな安っぽい挑発に俺は乗らない。

「いずれは分かる。俺は人間だということかな」

「いずれか…それが来ればいいがな。まあ、お互いの意見がまとまることがないのも考えていた。」

それなら…力で全てを奪い取るしかないな」

そこまで話すと、織斗は自らの拳に念を込めた。

すると、何もなはずの右手にどす黒い剣が握られた。

「何だ？それは…」

まるで手品のように現れたその剣に俺は魅了された。

その剣は鉋物で出来ているという感じではなく、気体で出来ているように思えた。

ゆらゆらと揺れて見える。こんな武器は今まで見たことが無かった。

以前戦った時もそれを出さなかった。ということは、この世界に  
来てから開発でもしたんだろう。

そして織斗は自慢気にそれを説明した。

「これは、人間の念の塊だ。

ここに集まった全ての人間のな…苦痛、怨み、悲しみ、絶望、そ  
ういった負のイメージがの集合体と言ってもいい…

呪術を扱う私の新術だ。呪いの具現化。カースソード…」

「呪いの剣ってことかよ」

「これに切られると精神を食い殺す。それは肉体の死ではない。

精神の死だ。お前が不死の力を持っていてもこれは防ぐことはで

きないだろう…どれ…」

織斗はそのまま自分の背後にいたセウロに近寄ると、その剣を何の前触れもなくセウロの体にいきなり突き刺した。

「ぐう！」

セウロは何もできずにただ悲鳴をあげた。

しかしそれは痛みの悲鳴というよりも、心の悲鳴に近かった。

女性のように高い声が部屋中に響き渡る。それを聞いているだけで俺はどうにかなっちまいそうだった。

「織斗…貴様」

「大人しくしてろ。この剣の威力を教えてやっているんだからな。こうなればもう手遅れだ…」

セウロは貫かれた胸よりも頭を必死に抑えてもがき苦しむ。胸には斬られた跡がなかった。

あの剣は精神そのものを斬るということだ。

セウロは大きく体を揺れ動かすと、白目をむいて、口からは大量の唾液を撒き散らしていた。

醜い光景としか形容しようがなかった。

「く…」



見ているこっちも辛い。

そして数分と掛からずに狂った老人はびたりと静かになってしまった。

「精神の死は地獄の苦しみ…数分にも満たない時間がこいつの中では何十時間もじわじわと拷問された痛みを生み出している。剣では肉体の致命傷は与えない…ただ狂い死ぬだけだ」

あれだけ偉そうにしていたセウロがこうも容易く織斗に壊されるとは…哀れな末路だ。

それは生物の存在としての立場を逆転された感じだった。

人間と壊疽者…

常に下だと思っていた者に全ての人間は殺されたのだ。織斗という知識を飲み込んだ壊疽者たちに…

織斗は人間なのだろうか？壊疽者に自らもなりきってしまったのではないだろうか？

そんな疑問すら浮かぶ。

セウロが死んだことで俺は別に感情的にはなれなかった。この結末は逆に当然だとも思った。

たくさん生物を虐げてきた大罪の証だと。

そして冷めた自分がどこかにいる…

「さて…実験は済んだところで感想を聞いてみたいがな」

織斗は剣を俺にわざと見せるように構えた。

## 52話

その黒い剣は呪術にも近い存在だ。剣から無数の呪いの臭気が漂う。

常人はこの場にいただけでその雰囲気飲み込まれて発狂してしまつかもな…

しかしあの武器は厄介だ。

精神の死までは俺の中に浄化する機能は搭載されていない。それこそ致命的な一撃を受けることになれば、植物状態になってしまうな…

「その様子では、相当これを怖がっていうようだな…心配するな。命までは取らない」

「何だと？」

「この武器で抜け殻にしたお前を私の得意の呪術で私好みに操作する…」

そうすれば時の雫の完成された後でもお前を利用して願いを叶えてもらえるのだからな」

にやりと俺の顔を見て笑いやがった。

「ちっ…抜け目のない奴だな…俺しか扱えない時の雫という盲点を突いてくるとは…」

「言っただろ？勝算のない戦いはしないと」

これは褒めるしかないだろう。

隙がないまでに全てが計算されつくしている。

第三の人類を一箇所に集めさせて俺に殺させ、手薄になった場所に住む人間は自分たちが皆殺しにした。

そして自らが作り出した壊疽者をまとめた生命体にして俺に殺させ、時の雫の材料にしていた…

更にここまで俺をおびき出すとはな…

最小限の動きで全てがこの場所に揃う計画だ。だが、みゆはここにいない。

そこが唯一の失敗だな。俺を殺したとしてもまた戻らなければならぬ。だからそこを突いてみた。

「みゆはどうなんだ？お前の予想外ではないのか？」

するとすぐに自らの失敗を認めだが、特に問題はないといった様子を見せた。

「そうだな。彼女がここにいないことだけが、唯一の計算違いだが、こんなのは失敗の内には入らない。

すぐに探して殺せば済むだけのことだ。さあ、どうする？すぐにでも始めるか？」

じりじりと圧力をかける織斗に反して俺は少し引き気味だった。

あれに触れたら恐らく終わりだろう。

そんな下手な考えを思い浮かべていたら、織斗が先に動いてしまった。

「お前から動かないなら、私から行くぞ！」

床を蹴り上げ、一直線に俺に向かってきた。

以前のように片腕という不利な状態ではない。

万全の織斗の身体能力は想像以上だった。

失ったパーツを補ったことで体の軸がぶれずに動いている。速さは、俺と…同等だと！

やばい…目測を誤った。

織斗の力を過小評価している訳ではなかったが、以前の戦いのことが頭にあっただけ、

その感覚で相手の動きを予想していた。

判断が鈍る。

ちっ…

髪のを先を切られた。

はらりと数本髪が床に落ちた。

織斗は横一線に剣を振り抜いていたが、俺の皮膚を切ることはできなかった。

返しの攻撃が来る。しかし俺は武器で受け止められるほど、未だに両腕が使えない。

そう思い、未来を見る力を存分に使う。

下から上へ斬り上げる姿が見える。

先に数センチ後退し次の攻撃に備えたが、相手の動きは俺が先読みするのとはほぼ同時に迫っていた。

「うお……」

仰け反る形でどうかその攻撃はかわしたものの危なかった。

もう少し踏み込まれていたら直撃だった。

どうして、俺の先読みの力と同時に攻撃がくる。

そんな疑問を抱きながらも次の攻撃を再度読んだ。

突きを前に三発。

が…その映像は現実となってもう迫いかけていた。

「え？」

まずい。

触れることもできなさそうなのにこの剣を必死に上半身だけを動かして三度の攻撃を危なげに紙一重でかわした。

それは読んでということよりも感覚でかわしたといった方が正確だろう。

おかしい…俺の能力が通じないのか？

息はすっかり上がり、織斗の武器の恐怖にも圧されて立っているのが苦しくなった。

「どうした？予想外だ？みたいな顔をして…」

こいつ何か分かっている。

そつに違いないと思った。

「私は学習するんだよ。お前のその能力は先を読むのだろう？それなら私は幻術を使わせてもらおう。」

本体と幻術の区別がつかないように殺気も混ぜてな…だから貴様はどちらか分からない方を読んでいる」

そついうことが…どうりで未来の姿がぶれて見えたのか…

俺は妙に納得してしまった。

しかしピンチには変わらない。

先読みの能力が使えないとなれば、純粹に相手の動きを目と肌と感覚で読むしかない。

こんな状態でそれが果たしてできるのだろうか？



## 53話

右腕はようやく指先に感覚が戻りつつある。

左腕は折れた骨は復元してきたが、握力がまだ戻らない。

左足は単純骨折だったからもう少しで完全回復できる。

自らの体の傷を分析しつつこれからの戦い方を組み立てようとしたが、良い案はまるでない。

自然に身を任せるしかないような状態だった。

「どうだ？初めて危機に立たされる気分は。マヒメの手でここまで破壊されるとは思わなかっただろう？」

貴様の唯一の弱点は回復力が遅いということと、自らの能力に頼りすぎだということろだ…

能力を剥ぎ取ればただのガキに過ぎない。お前の父親月夜灯とは対照的存在だ…

彼は死んだのか？生きているのか？」

織斗はそのことを知りたがっていたので、ぶっきらぼうに俺は答えた。

「…死んだよ…」

その言葉を聞いて、やや間が空いたが織斗は冷静に対処した。

「ほう、それは実に興味深い。彼には圧倒的な力で私の全てを否定

されたからな…

もし今戦ったとしても勝てる気がしない」

「そこまで凄い存在だったのか…

改めて父親の凄さを知った。しかし今は俺が戦っている。親父に頼ることもできない。

「親父は親父で…俺は俺だ！」

その言葉は織斗を喜ばせた。

「何がだ？何も出来ないで防戦一方のガキに何ができるんだ？数秒後に結末は決まっているというのに…」

俺は思わずそんなことを口にしてしまったのかも知れない。それでもいくら俺にも残っていた切り札はあった。

「ははは！それは是非見せてもらいたいものだ…

これ以上時間を延ばしたらお前に有利に事は進んでしまう。それなら一気に方をつけようではないか。

お互いの因縁を断ち切るようにな…」

なかなか良いことを言う。

織斗と俺の因縁は俺が生まれて初めて自らの能力に目覚めた所から始まった。

それならば、その始まりと終わりに関与している織斗は因縁以外のなにものでもない。

俺は再度織斗に向けて武器を構えた。

織斗はあくまで自然体だ。

それを崩すことはない。黒い剣をゆらゆらと揺らしながら俺に殺気を放ってくる。

陽炎のようにそこにあるのかないのかすら分からない。

織斗の取る行動は常に俺の先に行く。

俺が戸惑えばそれを察したかのように攻撃を仕掛け、俺が警戒すればそこには絶対に踏み込まない。

さっきから俺の意思は反映されずにことごとく吸収されていた。

これが力の差というやつなのか…

はつきりとそれを目の当たりにしてしまった。

以前なら肉弾戦ですらそれほど遅れを取ることもなかったのに、今は雲泥の差になっている。

剣の攻撃をかわされながらも浴びせてくる蹴りや拳の突きは相当の威力があった。

俺はどうにか避けることで手一杯でいつ斬撃が俺を襲うのか…それだけではらはらしていた。

戦闘開始から五分が経過しようとしていたが、状況は悪い。有利な戦況に持ち込むことが一度もできない。

ここまで支配されるとは…後数分すれば俺の手詰まりで織斗の勝利が確定してしまう。

そんなことも頭を過ぎったが、希望は捨てない。

俺は必死に耐えるだけだった。

ぎりぎりの攻防をひと時も見誤らないように。ここで一度でもミスをすればそこで終わりなのだ。

繊細にかつ慎重に周りを広い視野で見ながら動いていた。

「奇策は思いついたか？私は相手にそんな余裕を与えるほど愚かではないぞ？」

攻撃の手は緩めることはしない。

感覚だけでかわすのには限界もあり、何度か自らの肉体を少々貫かれることもあった。

そこで全てが終わるか…そうとも思ったが、幸いなことに未だに精神の死は迎えなかった。

「精神の死は、心が折れた時に確定するのだ。急所を突かれればそれは確実だ…」

織斗が補足してくれたお陰で俺にもまだ勝機があった。

まだ負けたわけではない。

「それなら…」

ゆっくりと大きく息を吸い込むと、次の攻撃の準備を整えた。

織斗も俺が何かを仕掛けてくるのだらうと予想はしていた。

だが、俺の能力を分かっていたとしても織斗の体は反応できないはずだ。

そう思い、俺は自らの能力の全てを出し切ろうとした。だから例の如く体の時を無理やり速める。

しかし…

びぎん！

体の筋繊維が断裂、そして毛細血管も数え切れないほど破裂した。

「がは…」

やばい…体中から血液が噴き出す。そして、

ぼとん…

まじかよ……くっついたばかりの右腕も切れて落ちてしまった。ぼ  
たぼたと血液が滴り落ちた。

## 54話

今までのつけが今更…ここで出るとは。

体には力が入らず、何も出来ないでその場に倒れそうになった。

「ははは…手を下さなくても自らの能力で自滅とはな…」

織斗はその一部始終を楽しそうに見守っていた。

まるで勝利でも確信したかのように。

「が…は…はあ…はあ…」

立っているのも辛い。血が…大量に出すぎたせいで、意識は途切れそうで、体は小刻みに震えていた。

壊疽者の集合体と言われる生命体との戦いは想像以上に俺の体から力を削ぎ取っていたのだ。

「それで、どうする？もう終わりか？それなら一気に方をつけようと思うが？」

織斗はすっと俺の目の前に黒い剣を構えた。ダメージのない織斗からすれば今の俺を仕留めるのは容易いだろう。

緩和された空気は再び棘のある空気に変わりそれが、死をイメージさせるものだということも分かった。

だが…

俺も何も手札を用意していないわけではない。それを信じて待っている部分もあったが、それが遂に叶った。

しゅんっ…

その場に新たな存在がいつの間にか紛れ込んでいたのだ。

「む…」

そのことに織斗が気がついた時には遅かった。

ずん…

鈍い感覚が織斗の体を貫いていた。それが何かも分からずに。

「まさか…」

気がついたのは貫かれた後の数秒後だった。

この部屋にはもう一人存在していた。

俺と戦ったあのキシだ。



奴は俺を追いかけてこの場にたどり着いたのだ。そして織斗を殺す機会を伺っていた。

利害関係はどことなく一致していた彼と俺は契約していた。

もしも俺が織斗と対決することがあつたら、織斗を倒すチャンスを与えてやると。

それが叶つたら今度は俺もお前と真正面からやりあうと…

織斗は俺と戦っていたのでキシの存在を警戒することはなかった。

俺が葬つたと勘違いしていたから。

第二の協力者を手に入れていた俺は不利な戦況をひっくり返した。

織斗は腹部を貫かれ明らかに重傷だった。

俺は追撃をしようと思つたが、次の瞬間、見えないキシが黒い剣で両断されていた。

「う…」

鬼のような形相の織斗がそこにはいた。

怒りとはかけ離れた人物だと思つたが、そうではない。

自らの体を大きく傷つけられたことで、抑えていたものが吐き出されたのだ。

「馬鹿が！この程度で今の私は死なない。小細工を用意していたよ  
うだな…しかしこんなの何の足止めにもならんぞ？」

まさか、あのキシを一撃で殺すとは…あの武器は相当の威力だ。

俺はその光景を見て引きそうにもなったが、ここで引いてたまる  
か。

「く…はあ…」

ここでやらなければ、絶対に俺は負けてしまう。

だから俺は織斗の雰囲気飲まれずに距離をどんどん詰めると  
自らの能力を出し切った。

「無駄だ！」

織斗はそんな俺を吹き飛ばすかのような剣圧で全てをなぎ払おう  
とした。

しかし…

「が…」

剣の先が俺の頭を切り裂こうと数ミリ前まで迫ったところで織斗  
の動きはぴたりと止まった。

「これは…」

まるで蠟人形にでもされたかのように指先の一つも動かない。

言葉は発せられるのに体が動かないことに苛立ち、自らに迫る危機を感じる。

「これが…俺の最後の切り札だ」

そこまで話しただけで全てを理解したらしい。

織斗は観念した表情だった。

「ま…まさか…時を…止めたか…」

それを察しただけでもう勝てないと分かったのだろうか？

それ以上無駄な足掻きは見せなかった。

「ああ…悪いな。未熟だからほんの少しの間肉体しか止められなかった。

アルタイルなら全てを止められるんだがな…俺を中心とする半径一メートルまではこの能力は可能…  
といっても実戦では初めてなんだけどな…」

「くそ…キシに戦況を崩されなければ私の勝利は確定していたのにな…  
しかもこんな技まで隠されていたとは…貴様の作戦勝ちということか…」

褒められても嬉しくはなかったが、奇妙な感覚ではあった。

敵として付き合いの長いような彼はどこか自らと同じ存在のよう

にも思えたからだ。

自らの生の意味を知るためにそれを必死に探し回っている。

本当の答えなんかは分からないのに…

それが、空しいことかもしれないのに…

それでも似たような存在はどちらもお互いの意見を受け入れることは難しい。だから決別をしなくてはならない。

「さよなら…織斗」

そのまま俺は微動だにしない彼の首を左手一本ではねた。

そこで全てが終わったのだ。

長い、長い戦いが…

ここに立っているのは人類でも壊疽者でもない。

第三の人類だけだ…

## 55話

数時間を掛けてみゆの元へ俺は戻った。

織斗が残した乗り物を使ったので一ヶ月かかるあの距離も一時間で余裕に着いた。

俺にはまだやり残したことがある。それを済ませなければ本当の結末は迎えられない。

そう思いながらあの山を目指した。

俺が姿を消してから少なくとも四時間は経っていただろう。

みゆは黙って山の麓で待っていた。

「よお…」

俺は車を降りると、みゆの元へ近づき話しかけた。

俺のぼろぼろの衣服、染み付いた血痕を見てみゆは全てを把握した。

「終わったんだな…」

一言で片付けてしまったが、その通りなので否定はしない。

「人類は滅びた…壊疽者もな…」

それを聞いても、みゆは、そう、としか返事をしなかった。それもそうだな…

「なら、この世界に残ったのは海と私だけってことなの？」

仲間を殺したことを思っただ話したのか、含みのある言葉で静かにそう言った。しかし俺はそれを否定した。

「そうじゃない…」

「え？」

「俺がこの世界に来たときにふと思ったんだ。時の雫なるものは俺らに多大な影響力を与えているとな…」

「何の話？」

はぐらかされた感じでみゆは戸惑っていた。

「人類が時の雫を受け入れたことで発生する特異な能力。

壊疽者はそれを受け入れらなくなった人間…だとしたらそれを取り除いたらどうなるのだろうか？」

「取り除くだと？」

「ああ…俺には時の雫を操る能力が備わっている。

だから…時の雫だけを体内から取り出すことも可能なのではないかと思っただんだ」

「しかし…海に傷つけられた者は例外なく死んでいる…」

「壊疽者は体の部位を時の雫で進化させた生き物だ…だから俺がその力を取り除けば形をなくして崩れてしまふ。」

しかし人の形を保ったまま時の雫を受け入れている者は…能力だけを奪い去る。」

「三賢人も結果親父が殺したが、あのままでもアルタイルはきっと消滅していただろう…」

俺に傷つけられ彼の肉体が時の干渉を受けなくなれば、千年も生きた体に対する負荷が普通の体に一気に襲い掛かるのだから。」

「なら…海が殺したと思ったあいつらは？」

みゆは第三の人類の仲間たちのことを話した。

「大丈夫だ。彼らは普通の人間になった…」

俺は時の雫だけを体から取り除いた手ごたえを感じたからな。」

その言葉を聞いて、みゆは嬉しそうに笑った。

「そうか…はは…そうなんだ。やっぱり海は凄いよ。希望の子どもの名前に相応しい能力者だ…」

無邪気に喜ぶ姿はまるで子どもだった。

「いや…まだ終わりじゃない。俺とお前が残っている…俺らの体に残っている時の雫を取り除けばそこで全てが終わる。」

「私も海も普通の人間になれるってこと？」

「ああ…せつかくの不死の力も失われてしまっがな…」

「そんなものはいらない。私は…京谷と会って本当に人間になりたいと願ったんだ。彼もそれを望んでいた」

「それなら話は早いな。なら、みゆ…君から始めよう」

そして俺は時の雫の塊をくっついたばかりの右手で取り出す。

その塊は最初に比べて随分と大きくなっていた。残り二人分の時の雫を吸収すれば本来の形に戻る。

「痛みはない…体に穴を開けるわけじゃないからな…」

「分かっている…海を信じているから」

みゆはすつと目を閉じた。

緊張はあったが、今まで通りやれれば大丈夫だ。

そう強く思いながら、そのままやさしくみゆの体にその切っ先を滑り込ませた。

「う…」

ふっと全身の力が抜けるようにみゆはその場に崩れ落ちた。

意識を失ったのだ。



今まで体を支配していた時の雫が抜け出すのはそんな簡単なものではない。

失った力を修復するかのように体がその部分を再構成しているから目覚めるまでに時間が掛かるのだ。

穏やかに眠るみゆの顔を見て俺は安心した。

「残るは俺だけか…これで本当に最後なんだな…」

感傷に浸ってみるのも悪くはないが、そんな場合ではない。

「よし！」

間髪入れないで、一気に自らの体に時の雫の塊の切っ先を突き刺した。

「ぐっ！」

その瞬間、目の前が真っ暗になった。

暗闇の中に自分が漂っている、そんな感じだ。これは夢なのだろうか？

## 56話

「……」

どこを見回しても黒い闇しか見えなかった。

そして自らの持つ時の雫がいきなり光りだした。

「うおー！」

思わず手から離してしまっただが、それは落ちることなく重力に逆らうように上空に浮遊していた。

まるで太陽のように眩しい光をそして穏やかで自愛に満ちた光を俺に浴びせてくれた。

どこか…気持ちが安らぐ。

光りを全身に浴びていると、

『私はこの星そのもの…』

不意にそんな言葉が頭の中に流れ込んだ。

『長い年月を掛けて卵からようやく孵化しました』

孵化だと？やはりそうか…俺の頭の中に時々流れた星の記憶はこれだったんだな。

『孵化を迎えた私は姿を思い通りに変えられます。あなたの望む世界。それを作り上げるのも可能です』

「あんたは、ずっと孵化しない状態でいたんだよな。それはどうしてだ？」

『私が宇宙を彷徨い、この場所に定着し眠っていました。しかし…そんな矢先に無理やり引き裂かれた』

「アルタイルたちの実験だな…」

『安定を失った私は生物の時の法則をおかしくしてしまいました…』

俺の中に流れていた星の記憶と寸分と狂いが無い。

やはり、あれは、こいつの意思が俺の中に流れ込んでいたんだ。

今、そのことを確信した。

しかしこんな鉱物にそんな効力があるなど、本気に出来なかつた分だけ、驚きもあつた。

それから俺は時の雫に質問した。

「今回は俺が姿を戻したけど、もしもあんたが自らの意思で孵化したらどうなるんだ？」

知りたいことを最小限に凝縮して聞いてみた。これは永遠のテーマでもある。

もしもこの鉱物が意思を持って世界を動かせるのなら、人の意思

など意味を持たない。

すると、時の雫は淡々と答えた。

『私は所詮は鉱物です。生物を支配する力は備わっていません。だから孵化する必要はないんです』

それを聞いて安心するのと同時に納得もした。

こいつは卵のままの状態がいいんだ。それを人間が無理やりむちやくちやにしてしまった。

だから…俺が望むことはただ一つだ。

「俺はお前が卵の状態に戻ってくれるのが一番ありがたい。願うことなら、そのまま誰にも見つからずにと眠り続けてほしい」

最初から決めていた言葉を口にした。

アルタイルもセウロも織斗も理想郷を作ることを考えていたが、俺は違う。

元ある自然の形に全てを戻したかっただけなんだ。

それで人間が減ぶのならそれでいい。それは自然の摂理。

自然淘汰という言葉に違いはないし、愚かな行為を繰り返していれば絶滅することは必然なのだ。

ずっとそう思っていた。

みゆの話していた京谷って奴もそれを望んでいた。俺も同意見だ。

『本当にそれでいいんですか？あなたの思い通りの世界も作れるのですよ？理想郷を…』

時の雫は再び俺に話しかけた。

「いいんだよ。俺はそれが何よりも望みだ」

誘惑にも似たその言葉を払いのけるように俺は断った。しかし本音では、朱里に会いたいという気持ちは心のどこかにあった。

抱いてはいけない…世界と朱里を両天秤にかけることなどできないのだから…

だからそれは諦めよう。そんな希望を俺が抱いてしまえば全てが矛盾する。

俺の力で何とかするしかないんだ。

それにこの世界でみゆや同胞と生きるのも悪くはない。

そう思い、はっきりと時の雫に意志を伝えた。

「さあ、お前は卵に戻れ、そして二度と人に発見されるな」

そこにはもう一切の妥協もささやかな望みも存在しなかった。全てを吹っ切るように俺は固い決意で言い切った。

時の雫もそれ以上俺を誘惑に陥れるような発言はしなかった。

そこでもう俺の意思を完全に把握してしまったのだ。

だから最後の言葉を俺に向かって話しかけた。

『分かりました…あなたの言葉を受け入れます。なら、あの場所で全てを終わらせましょう…』

「え?」

その言葉の全てを理解する前に時の雫は、自らの存在を世界のために行動に移していた。

まばゆい光は俺の意思を汲み取りましたと言わんばかりにはあぁんと弾けて消え去っていたのだ。

「うわ!」

その閃光に目を瞑り体が硬直してしまった。

そして目を開くとそこは状況が一変して暗闇の中ではなかった。

「え?」

それは先ほどまで俺が立っていた場所だ。浮いていたような感覚も今はない。

みゆは気を失ったままで、眠っているようだった。







## 57話

あれから数時間。

みんなが目覚めて全てを受け入れるには十分の時間だった。

焚き火を囲んで全員がそこに座っていた。

そしてそれぞれが複雑な面持ちだった。

「あの…」

俺は何て切り出していいのか分からなかった。

長い沈黙がしばらく続くと、みゆが代表して話を切り出した。

「私達が人間になったのは事実で…これからどうするかだけ。何か意見のある人はいる？」

いきなり核心に迫った話だ。

「それも大事だが、海…時の雫はどうなった？」

レイブンが俺に向かって話しかけた。

「ああ…あれか。あれは、元の姿に戻したよ。アルタイルたちが発見する前の形にな。」

だからもう俺たちのような能力者は誰もいないし、これからも出ない」

正直にあの時の出来事を話したが、サティは冷たい視線を俺に浴びせた。

「不思議に思うんだけど…今のこの世界は海が望んだ世界なの？話を聞けば、あの時の雫は完全な形になれば世界を思い通りにできるって話じゃない」

「いや…その…こんな世界は望んでないけど、元の形に戻したかった訳で…」

どうも言い訳のようには聞こえないな。あそこでの出来事は言葉では上手く伝わるはずもない。

「私…この世界の人間のことはそんなに好きじゃなかったけど、それでも誰もいない世界と比べたら…」

サティはどこか寂しそうだった。

「だったら俺らでこれから変えるしかないだろうが！泣き言言ってるんじゃない」

レイブンはサティに諭すように大きな声で話したが、サティは変わらず不機嫌そうな顔だった。

「うっさいな…この野蛮人」

「喧嘩売ってるのか、てめえ…」

売り言葉に買い言葉で一種即発のこの状況はどうしたらいいのか

分からない。

しばらく睨み合いが続いたが、俺はどうすることもできなかった。

しかしサティの話も分かる。

いきなり俺たちがここで最後の人類になったとしても前途多難だ。その先が見えないのだから…

「なあ…人間が誤った道を進んでこんな世界になったんだよな。

それなら過去に戻ればそれを変えることも可能なんじゃないか？」

セブエイがそんなことを話したが、現実を見ていない。

「時の雫がなくなった今、門は存在しないんだぞ？過去には戻れない」

俺もみゆに同意見だったが、ティワンが先に突っ込んだ。

「セブエイ…馬鹿」

「何だと！テメエ！ならお前のミジンコサイズの脳みそで何か考えがあるのかよ！」

おいおい…ここで兄弟喧嘩は…

「なるようになる…」

ティワンはそれしか話さなかった。

「それで何とかなったら苦勞はいらねえんだよ！」

そしてセブエイとティワンの無駄に長いじゃれあいと言っか喧嘩が勃発した。

「とりあえず世界の変化をしてみることにしてみないか？ここでじつとしていても分からないことだらけだし……」

ナックスがまともな意見を出した。

「それもそうだ……」

一同はその一言で納得してしまった。

やれやれ……どうにか落ち着いたな。

それから俺たちはそこで一夜を明かすことにした。

星がはつきりと見えていた。

今までは雲が常にこの世界の空を覆い隠していたが、門の消滅がきっかけとなったのか、空が姿をがらりと変えたのだ。

吹き付ける夜風はそれほど冷たなくなり心地が良い。

騒がしかった話し合いからようやく落ち着いてきた。

全員が眠ったことで静かになった。

今日は頭がおかしくなりそうな一日だった。最強の壊疽者三人と戦い、織斗を殺し、時の雫を元に戻した。

「これでいいのかな…」

そんなことをつい呟いてしまった。

弱音は吐かないって決めていたが、言葉に出てしまった。

俺もまだまだ人生経験が浅い。ようするにまだガキなんだ。世界を背負って見たもののそんな決められっこない。

俺の思い通りの世界って何だよ。

誰もにやさしい世界なんてそんなの存在するわけがない。

やさしいってことは、人を拒絶するってことだ。

人がそこにいれば、やさしい世界ではなく、苦しさを乗り越える世界なんだ。

しかし俺はそれでいいと思った。苦しさも痛みもない世界は生きている意味がない。

生物としてそこで終わってしまったっているんだ。

一人で悶々と自分の行った行為を振り返って自問自答を繰り返していた。

すると、

「寝れないの？」

背後から声がした。それはみゆだった。

「ん？ああ…お前もか？」

俺は気が沈んだ様子でみゆに返答した。

「まあ、その…嬉しくてね」

「嬉しい？意外だな…お前からそんな言葉を聞くなんて」

「海は元々向こうの世界で普通に暮らしていたから実感が湧かないんだ。

私はそういったものとは無縁だったし、兵器として生きていたと

思っていたから…」

「兵器ね…そうだな。みゆの生き方は確かに酷だ。

俺とは対極であり、意思も何もあつたもんじゃないからな…

他の奴らも大丈夫なのかな…みゆとは違い、感情の形成が…」

みゆは京谷によって人に近づく物を手に入れた。それは感情だ。

しかし他のメンバーにはそれがまだ備わっていない気がした。

下手すれば無感情のまま生きてしまう。

「彼らも愚かじゃない。京谷が私にしてくれたんだからきつと手に入れられる」

「お前が…教えるのか？あいつらに…その…感情つてものを…」

みゆが教えられるかどうかは疑問だが、つい聞いてしまった。

「無理だね。多分…」

「おい。憶測で物を言つなよ」

「それは海に任せた。海ならきつと彼らの感情を育ててくれるはずだよ」

「そんな…」

みゆはどこか明るかった。

人間になれた嬉しさもあつたのかもしれないが、以前のような暗い雰囲気はどこにも見当たらない。

まるで憑き物が取れたかのようだ。それを見ているだけで俺は満足だった。

俺が行ったことの結果そのものだと思えた。だから正直に自分の気持ちも話した。

「みゆ…この先どうなるか分からないが、それでも希望だけは捨てないようにお互いしような。」

今まで信じてやってきたことが無駄ではなかったという証明のためにもさ…」

「ええ…分かっている。海からもらったような第二の人生。私もこれから必死に生きていくよ」

それが聞ければもう何も怖いものなどない。

俺は真っ直ぐ前を向いていこう。

二人で空の星空を眺めながら、ゆっくりと時間を過ごした。

人間になつたばかりの二人が面白おかしくたくさん話したのだ。





それから数ヶ月が経ち、俺がこの世界に来ていよいよ三年の年月が経とうとしていた。

仲間は俺と過ごすことで少しずつ感情を芽生えさせてきた。

偽りの心を無理やり植えつけられた彼らの心を溶かすには時間が掛かったが、

それでも彼らと過ごす時間は楽しいものだった。

たくさん話し、笑い、時には喧嘩もし、お互いの本性をどんどん曝け出していったのだ。

世界を旅することで団結力も強くなり、精神的にも成長した。

しかし世界は広いので、全てを回することはできなかった。それでも大陸を一周することはできた。

そこで見たものはほとんど同じだった。

草木もない荒野ばかりだ。

「どこにも緑はないんだな…」

俺はそう話した。しかし自然の緑を見たことのない彼らにとってはそんなことはどうでもいいことだった。

自然が完全に崩壊してしまったこの世界で俺らが生き続けること

が可能かは分からなかったが、それ以上に妙なものを発見した。

大陸のちょうど、ど真ん中にあつた大きな山の麓だった。

「これは…」

レイブンが立ち止まってその不思議なものを見つけた。

「おい！来てみるよ。ここに何かある…」

俺たちはその言葉に誘われて一斉に集まった。

「何だこれ？」

「空間が歪んでいる？」

見ればそこにはあの門のように空間にぽっかりと穴が空いていたのだ。

しかもゆらゆらと揺れていて、消えたり現れたりを繰り返していた。

門ほどの大きさはなく、一人が入れるぐらいの大きさだった。

「反応が微弱になっている…いずれは消えそうだ」

「そうね。これはあの門と同じような存在なのかしら…」

それぞれが考えて意見を出した。

「でも…どうしてここに？」

俺も何故ここにこれがあるのか分からなかった。だから詳しく辺りを調べてみた。

地形や地層、全ての風景どれを見ても特に何かに当てはまるものもなかった。

しかしどこか俺の体に訴えかけるような信号にも似た波動を俺は体で感じた。

『海…ここは始まりの場所よ』

これは…

人間になつたはずの体に昔を思い出すように時の雫の記憶が自然と流れ込んできたのだ。

断片的に見える映像は、時の雫がそこから掘り出されるものだった。

「う…く…」

苦痛に歪んだ表情を見て、仲間は心配した。

「大丈夫か？」

なるほど、ここが時の雫の起源だった訳だ。

それからアルタイルたちが発見して、今までのような出来事までに発展したってことだ。

失われた力が急に働いたことにもびっくりしたが、それ以上に「ここが発点だったことに驚いた。

「海どうしたんだ？そんな険しい顔をして」

みゆは俺のただならぬ雰囲気に声を掛けた。

「ん…ああ…断片的だけど時の雫の映像が見えたんだ。

壊される前のな…人の手で地面の中から取り出されるのも見えた」

その場にいた全員がそのことには驚いた。

「なら、ここが発見された場所ってことか？」

「そうなるわね」

「だからこんな空間にも歪みが出るんだな」

「これって、あの門と同じような感じがするが、海はどう思う？」

「似ていると思う…時の雫がここで発見されたとなれば、元に戻った状態のものがここで再び眠っている可能性もある。

それに時の流れがここから始まっている。この世界の始まりはここなのだから…」

「始まりね…」

「もしも時の雫が砕けなかったら、私達も生まれなかった。だとしたら何故ここに私達は残っている？」

サテイが時の矛盾を指摘したが、俺はそこに補足した。

「俺たちは第三の人類として作り出され事になっているけど、ベアスは今まで開発されていたクローン技術と何ら変わりない。

ここには人の手しか加えられていない…

だとすれば、時の雫の効力で働いていたのは、身体機能の保持ではなくて俺たちの異能力だけってことだ」

「俺たちの肉体の解釈は理解した。しかし時の雫が砕けた後の世界はどうなるんだ？

元々存在しない未来になっているのなら、それこそ俺らの存在そのものが消えてしまうだろ」

確かにその通りだ。しかし時の雫は俺に話しかけた。

『あの場所で…全てを終わらせましょう』

それは俺たちの存在が消えることを現しているかとも捉えられるが、そうではない。

ここにこんな異質な物が用意されているのには意味がある。

## 60話

「時の流れから見たら俺たちの存在は矛盾の生命かもしれない…でも時の雫は生かしていてくれたんだ。そこに意味がある。そしてこの場所にも意味がある」

「時の雫の恩恵を一番受けたお前が話すと説得力があるな」

「そうだな。言葉に重みがある」

「海、かつこいー」

ティワンが変な合いの手を入れた。

「それで、お前が出した結論は？」

レイブンは全員を代表して俺に聞いた。

俺は少し間を空けてから今まで思っていたことを口にした。

そのことに賛同してくれるかどうかは分からなかったが話さなくてはならなかった。その義務が俺にはある。

あの時の雫と会話を交わした唯一の人間なのだから…

「これは最後の門。ここを潜ればこの世界は自然に崩壊する…」

そして俺たちは過去に戻ってこんな世界を作らないように向こうの世界に新たな種をまかなくてはならない」

はつきりと分かりやすく自らの意思を伝えると、全員の間には急な現実を受け入れられずに一時に静けさが流れた。

やっぱり…戸惑うよな。

一人で周りの温度差を感じていたが、みゆがそれをフォローするかのようになんかに話した。

「それってすばらしいことじゃないか？」

「え？」

「どうして？」

「だって…私達にも生きる意味があるじゃないか。このままこの世界にずっと留まっても八方塞だ。先が見えていない。

でも海たちの住んでいた世界ならそれが見えるんだよ。このまま消滅を待っているのよりはいいんじゃないか？」

「そんな簡単に言うけどよ…俺は他の人間が怖い。この世界しか知らないからな。

お前は一度行ったことがあるからそんなことも言えるんだよ」

「だが、何もしないで死ぬよりは、何かして死んだ方がいい…みゆの話にも説得力がある。俺は前に進むことを希望する」

レイブンがみゆに感化されたのか迷うことなく賛成に一票を投じた。



すると他のメンバーもそれを聞いて各々考えていた。

これからのことを。

俺は強要する気はない。だってこの門が本当に最後の門で過去に戻れるという保障はなにもないのだから…

それに過去に戻ったとしてもいつに戻れるのかは分からない。アルタイルたち同様に千年前かもしれないし、数年前かもしれない。

それでも俺は過去の人間に伝えなければならない。この世界の事実を…

覚悟はしていた。

じつと押し黙っていると、俺とは正反対にそれぞれの声が聞こえてきた。

「このまま死ぬのはごめんだね」

「私も海の世界を見たいかな…」

「ティワン、行くー」

によみたいに言うな。

「みんなが…その…行くのなら俺も…」

それぞれがそれぞれの想いで動くことを決意したようだ。

だから俺はあえて、門の先に何が待っているかは話さなかった。無事に抜けられる保障がないことも行き先が分からないことも。

騙しているつもりはない。

それだけの覚悟でなければこの先は生き抜くことが難しいから…

一人よがりかもしれないが、この場にいた全員心がまとまったのは嬉しい。

「じゃあ…いいんだな、本当に？」

再確認をしたが、誰一人として意見を変えるものはいなかった。

それから俺を先頭に、あの歪んだ空間である最後の門に足を踏み入れた。

ぐうん！

「うお！」

体が無重力空間に投げ出されるようなこの体に掛かる変な感じは慣れない。

以前門を潜り抜けた時もそうだったが、自分がどこにいるのかわからないこの状況は不安にさせられる。

まるで海の底を漂っているようだ。

他のメンバーも次々と入り込んだが、その姿を見ることはできなかった。

それほど余裕がないということだ。

自分という存在がばらばらにならないように精神を留まらせることに集中した。

脳の中はぐちゃぐちゃでまともな考えすら浮かべることができない。

以前の俺たちならこの程度の状況には耐えられた。それは異能の力を手に入れていたからだ。

今は何の能力も持たないただの人間だ。この場所はあまりにもハードルが高すぎる。

精神崩壊を起こすのが先か、門を潜り抜けるのが先か…しかしそんなことよりも俺には思い浮かんだ一つの顔があった。

「朱里…」

そうだ。朱里に会って約束したじゃないか。

なら…必死に願おう。朱里いる時間にたどり着きたいと。

朱里が子どもでも老人になっただけでも構わない。

同じ時間を過ごせるのなら…それだけで俺は十分だ。朱里のい

る時代にたどり着きたい。

ぐにゃぐにゃの俺の思考回路はやがて一つにまとまりつつあった。

そして朱里の顔がはっきりと細部まで俺の思考の中で構成された。

その瞬間！

「え？」

俺はどこかの場所に立っていた。

それがどこかは分からない。

でも…どこか懐かしい匂いがする。俺の長い間住んでいた草の香る暖かい場所だ。

俺の目はその光景をはっきりと見るまでに数秒の時間を要した。

明るすぎてその場所が良く見えないのと、まだ頭がぐらぐらしているからだ。

ゆっくりとだんだん辺りの色が見えてくる。

緑…青…茶色…風景がぼやけながら浮かび上がっていた。

ここは…河川敷か？

ん？人の姿も見えてきた…

俺の目の前に誰かが立っているのが分かった。

誰だ…

その輪郭がはっきりと見えてきた。

まさか…そんな…

俺は目の前の人物をはっきりと見て驚いた。

だって…会えるはずもないと思っていた人物がそこにはいたのだから…

俺の望みが叶ったのだろうか？

それともこれは夢なのだろうか？

言葉が…上手く出ない。

三年…実に三年もの歳月、あの時から自分が止まってしまった。

でもまたここから始められるというのだな。

感謝した。この必然のような偶然に。

きつと時の雫が俺の願いを叶えてくれたのだろう…心の奥底にし

まっしておいた望みを。

だから自然と涙も出ていた。

お互いに…

たくさん言葉があるが、今はこれだけをはっきりと伝えよう。

「ただいま…」

門を潜り抜けた俺たちは同じ時間のこの世界中に散らばってしまった。

みゆもレイブンもセブエイもティワンもサティもナックスも…

それは感覚的に分かった。

あの門を潜り抜けた瞬間、それぞれの意志がこの世界に飛び散るのがはっきりと見えたのだ。

生きていればきっと出会えるはず。

全員が時の雫の意思を受け継ぎ、未来を担う覚悟を持っているのなら…

それはどんな活動でもいい。これから始めなくては世界は滅びを

迎える。

時の雫が元に戻ったことで、異能力者は消えた。

八鬼の連中も突然その効力を失ったのだ。そしてアルタイルの実験体だった異常者たちも消えた。

時の雫が与えていた様々な影響は、あの日を境に全てが元通り…  
というか変化したのだ。

この星の時の流れが今から正常になったのだ。

人の欲望は無限だ。

いつ織斗のようなアルタイルのような人間が出てもおかしくはない。  
い。

しかし愚かな歴史を繰り返してはならないんだ。

未来を生きるこの子どもたちの世界を壊さないためにも俺は…自分の意思を世界に訴え続けよう。

俺は親父が残してくれたパイプを利用していた。

警察関係者や政治家…そして八鬼にも協力を仰いだ。

俺の見てきたことや体験したことを全員に包み隠さず伝えて、これからのことを提案した。

するとすんなりとそれを受け入れて、行動に移そうと進言してく

れた。

そこには、アルタイルの作り上げた神徒協会の全貌が明らかになったことも一つの要因だった。

世界を変えなくてはならないという危機感が国を動かす者たちには芽生えていたのだ。

ゆっくりではあったが、変わってはいる。

親父は本当に最後まで俺にいろんなものを残してくれたな…

そう思いながら抱き上げている我が子を見て微笑んだ。

親になることで親父の気持ちも分かったんだ。

「俺の意思を受け継いでくれよ…」

そんなことをやさしく話しかけてベランダから夕暮れの景色を眺めていた。

夏の夕暮れはどこか寂しい。それでも夏にはいろんな思い出があったから俺は好きだ。

さて、今日の夕飯はなんだろうな…あいつ、いつものように張り切って作りすぎなければいいけど。

ぼーとしながらしばらくの間その景色に見とれながら俺は部屋の中に入った。

そしてそのまま買出しに向かっていた俺の幼馴染を俺は部屋の片



隅で待っていた。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9201f/>

---

裏（時の支配者の裏側）

2010年10月10日20時45分発行